練習さしてから之れを中字に縮め、更に細字に縮めて書かすことが可也廣く行はれたのである。一見甚だ合理的の方法であるが如く見えるけれども、尙ほ未だ細字練習の眞髓を捉へたものとはいはれぬ。何となれば、大字の用筆法と細字の用筆法とは其の間餘程手加減の異なる所のあることは前既に述べた所で、（第三章第三節參照）善美なる大字を其の儘縮めたものが、必しも善美なる細字ではないのである。このことは方二寸程の大字を、寫眞で方五分程の細字に縮寫して見た場合、其れが果して善美なる細字となるかといふと、決してさうではないのである。又大字を書くに堪能な兒童で、細字はそれ程でないといふ實例は吾人の屢々遭遇する所である。そこでよくよく此の間の消息を吟味して見ると、細字は大字に基礎を取るべきは勿論であるが、それが善美なる細字となるには、其の基礎に更に細字特有の書法（第三章第三節參照）を以つてしなければならぬのである。さうでなければ善美なる大字は到底善美なる細字には脫化せぬのである。

（二）書方手本中に載せられてある細字の手本を、單に臨書させるだけに止まるものがある。それも適當な方眼紙でも與へて練習させるならまだしも、只白紙上へ臨書させるだけのものさへある。何程手本が善美であるにしても、斯かる單純な方法で相當な成績を收めようといふのは、到底望み得べからざることである。人或は斯う考へるかも知れぬ。古人は單なる臨書によつて然かも細字に堪能になつたのである。熱心に練習さへすれば達し得ぬことはないと、如何にも其の通りである。然かしながら其の熱心といふことは、事實容易に惹き起し難いことである。只手本と白紙とを與へてサア書けといひつけただけでは、兒童は決して熱心に練習するものではない。兒童の興味と注意とを惹く仕事は書方以外他に澤山あるから、多くはそちらへ引きつけられてしまつて、餘程特殊の兒童でなければ、書方に熱心するものなどは見られないのである。又古人が單なる臨書によつて相當に之れを能くしたといふ其れには、非常に多くの時間を費やして居るといふ事實が必ず在るのである。今日では書方の爲めに幾何の時間を割き得るかといふと、それは極めて僅少な時間に過ぎないので、到底昔の樣に字を書く爲めに澤山の時間を費やして居るなどいふことは出來ないのである。

（三）書方手本以外に讀本や修身の教科書を見て、細字の練習をやらすといふことも、可也多くの人々によつて採られた方法である。之れは何でも數でこなせといふ考からである。それには幸に讀本や修身書などは、書體も大さも手頃な細字で書かれてあるから、直ちに之れを手本とするに重寶であるからである。然かしながら此の方法は單なる臨書である以上、只書方手本の細字の臨書法を幾分擴張したに過ぎないので、適切な指導法が成立するのでなければ、それ程有力な方法であるなどと評價するわけにはいかぬのである。殊に讀本や修身書が時に活版文字で出來て居るものを見て、

細字を練習させるなどいふことがあつたら、滑稽といふべきのみか、寧しろ大なる弊害を醸すものと謂はねばならぬ。

斯様に從來の毛筆細字練習の方法は甚だ有力でなかつたし、其の成績もまた甚だ相擧らなかつたのである。それにしても毛筆は大字の教授は兎も角、相當の時間練習さしてあるから、細字は幾分基礎を得て、將來發展すべき素地を有して居るのであるが、鉛筆やペンは毛筆細字の様に直接の基礎といふものを有たぬのである。殊に尋常一二年に鉛筆書方のみを課するとすれば、其の基礎となるべきものは全然ないのである。そして而かも今日の教育は、極めて僅少の時間で相當に字が書ける様にとの注文がつけられて居るのであるから、餘程經濟的な仕組を立てなければ、到底有力なものとはなれぬのである。茲に於てか、吾人は細字の練習には毛筆たると、鉛筆たると、ペンたるとを問はず、最も適切なる練習の形式を考案し、之れによつて練習させれば、自から其の技の上達する様な、有力な仕組のものを研究することの必要を極めて痛切に感ずるのである。

第二　横文字の例と漢字の特徴

硬筆書方練習の形式を研究するに方り、等しく鉛筆やペンを使用し、等しく細字である彼の横文字の練習形式が、如何様に仕組まれて居るかを參考することは必要なことである。今英語、獨逸語、佛蘭語其の他の横文字を使つて居る國々の書方練習帖の仕組を調べて見ると、何れも皆夫々に適當な練習形式を定めて使はして居るのである。そして其れによつて練習さした實際の成績は、如何にも立派なものである。吾が國に於いても、外國語の學習には同様の練習帖を使はして居るのであるが、さて漢字や假名の書寫に夫れ程堪能でない人で、横文字を大そう立派に書けるといふ例はいくらもあるのは、之れは思ふに用具の異なるのと、横文字の組立が漢字や假名と異なるからでもあらうが、又一面には横文字の練習に適當な形式が組立てられて居るといふことも、其の原因をなして居るとも考へねばならぬのである。

扨て横文字の練習形式は何れの國のものも必らず五線の中に收められて居て、其の各の字を組み立てる線の傾斜の角度と、其れの長さとは一字毎に其の五線内に嚴密に規定されて居り、この線は此所までこの點は此所へと、悉く一定の場所が定められて居るのである。それに横文字は元來其の特質として音標文字であるから、其の數も僅かに二十六の少數であり、一字の點畫も極めて少數であるから、之れが練習の形式を組み立てるにも、其の根本の條件を定めることが至つて容易なのである。只其の傾斜の角度に就いては、流儀によつて多少異なる所があるので、斜體と立體との區別を生ずるのであるが、其の角度は、獨逸文字の方は四十五度に傾斜さして書くべき斜體であり、英

語の方には同じく四十五度の斜體と、六十五度の斜體とがあるが、其の以外にもつと字體を立てゝ書くものもある。それを立體といつて居るが、それにも八十度の立體と、九十度の立體とがあつて、共に並び行はれて居るのである。然かし立體は近頃漸次すたれる傾向がある。

そこで横文字は前述の如く點畫が極めて少なく、字數も僅少である所から、之れが書寫の形式を組立てるのに容易であるのに比し、漢字はどうかといふと、漢字は之れを組み立てゝ居る點畫の種類がなかなか多いのと、漢字は其の特質として意標文字である所から、字の數も從つて非常に多く、殆んど萬を以つて數へる程である。無論今日では其の全部を授けねばならぬといふ譯ではなく、常用の漢字として千九百六十字を取り、其の中初等普通教育に用ひる字は僅々千三百五十九字に制限されてはあるけれども、それにしても横文字に比べては迚も比較にならぬ程多數を有して居るのである。殊に横文字の方は、點畫の方向と長さと位置とは、字數全體を通じてきちんと定めることが容易であるけれども、漢字の方は、其の點畫の方向も長さも位置も實にまち〳〵で、横文字の樣に、之れを纏めるとか統一するとかいふことは、殆んど不可能のことである。然からば漢字は其の點畫の方向、長さ、位置は書者の勝手に書いてよいものかといふと、そは決してさうではない。例へば此の字の此の畫は、此の方向に、これだけの長さに、此所へ力を與へて書かねばならぬとか、此の點は此の位置にかう打たねばならぬとかいふ、書寫上の規律はちやんと立つて居るのである。若し其の規律を無視して書いたとしたら、それは善美なる書としては承認されぬのである。言はゞ漢字は一字一字に夫々特有の規律を有つて居るのである。無論點畫の運筆上の規律と、點畫を組合して一字を作る場合の整形上の規律とには、甲乙相似の點があつて、兩者共に之れを若干の種類に纏めることは出來るので、それは既に第三章に於いて述べた所であるが、然かし其の種類は之れを横文字に比較して尙ほ極めて多いのみならず、横文字が五線を劃して總べての字を悉く此の中へ當て嵌め得る樣に、そんな簡單には行かぬのである。之れは意標文字の特質として致方のないことである。

斯くの如く横文字は五線が基となつて、二十六の字が悉く其の中に當て嵌められて、字形がちやんと定められたものであり、漢字は一字一字が別々に特有の組立を有つて居るので、其の間の繁簡の差は實に非常な者である。然かし其の由來が如何樣に異なつて居るにしても、茲に善美なる手本文字が出來た以上、それを模書さして練習させるに最も適切なる練習形式は、如何なる仕組のものであるべきかの研究に至つては、横文字も漢字も共に等しく細字であるといふ點から、兩者の間に共通の點がなければならぬのである。即ち横文字では五線上に書かれた善美なる手本に基づき、それと同樣に矢張り五線上に其の手本の骨書を、始は實線を以つて示した者、次には波線を以つて示

したものゝ上を渡書させ、其の次には單なる五線上に兒童自身の力を以つて書かせ、終には五線のない白紙上に書かすといふ樣に、其の間に自然的の段階を履ませる方法が一般に採られて、練習帖もさう仕組まれて居るのである。そこで自分は漢字の細字練習に於いても、之れに倣つて此の種の練習形式を組立てることが、極めて有効であると考へるのである。次項に於いて之れを述べよう。

第三　假名及び漢字の練習形式

前項に於いては横文字と漢字とを比較したのであるが、片假名及び平假名は、音標文字たる點に於いては横文字と同樣ではあるが、字體からいへば、片假名は漢字の一部を採つたものであり、平假名は漢字の草書から出たもので、二者共に漢字の系統に屬するものであるから、練習形式は漢字と全く同樣の形式に仕組むべきものである。茲に併せて之れを說明しよう。

(一)善美なる手本の必要

横文字でもさうであるが、假名や漢字に於いては殊に然かりで、細字の練習は先づ善美なる手本を示すことが最も大切なことである。このことは既に前項に於いて說明した所であるから、重複を避けて茲には省略する。

(二)右起と左起及び横書と縱書

今日は假名交り文をも歐文の如く横書にして、上から下へと書いて行く方法が大分流行して居る。數學に關する記述や、學生の筆記などは大部分それである。之れは邦文の中へ往々數字や横文字を交へて書く必要がある所から、自然に工夫されたものゝ樣であるが、邦文元來の書振としては縱書で、右から左へと書いて行くのが舊來の習慣である。然かし之れは書寫の技能の出來上つた人とか、又は未だ出來上らぬ人でも、何か答案を書くとか、若くは日用の成文を書くといふ樣な場合には、今日でも舊來の習慣に從つて右起縱書に書くのが穩當であると考へるが、さて書寫の技能を練習するといふ方法上の問題としては、何も右起縱書と限るわけはない。何でも比較的練習に便利な方法によつてやらすのが至當である。即ち手本に最も接近した位置から練習し始め、手腕が出來るに從つて段々手本から遠ざかるといふ仕組にして練習させることが、最も自然の方法であると謂はなければならぬ。即ち左起りの方法で練習させるがよいといふことになる。

又同一の字を反覆して練習させるのと、一字毎に別な字を練習させるのと、どちらがよいかといふと、これは勿論同一の字を數回反覆して練習させることの有効なるは、言ふまでもないことであるが、さて同一の字を反覆させるとしても、之れを縱に重ねて反覆させるのと、横に並べて反覆させるのと其の効果の差如何といふと、是も横に反覆させることが有効であると考へねばならぬ。何

ぜかといふと練習の方法としては、手本文字と自書の文字とを常に比較しつゝ進めて行かねばならぬのであるが、其の比較の便否からいふならば、縦に比較するよりは、横に比較することの便利であることは、眼球の構造が既に之れを證明して居るのである。即ち眼球は縦に運動するよりは横に運動し易く構造されて居るからである。それで横書練習を以て出發するのが最も適當であると謂はねばならぬのである。

然からば縦書の練習法は全然之れを顧慮しなくて宜しいかといふと、漢字固有の習慣が縦書であるといふ以上、縦書の書方をも練習させる必要はあるのである。殊に漢字と假名とを打交ぜた文の書方には、其の漢字と假名との釣合を整へねばならぬ必要もあり、單に一字一字の書方に熟しても、一行なり一頁なり纒つた書寫となつた場合、其所に又特別の書寫上の心得がなければならぬのであつて、之等は相當の練習を要する事柄であるからである。そして漢字は縦書が習慣であるとすれば、縦書で其の調子を練習させることが當然必要なこととなるのである。即ち練習形式には、横書練習と共に縦書練習をも仕組まねばならぬ必要がある。

又等しく縦書練習をやらすとしても、之れを左起に練習させるがよいか、右起りに練習させるがよいかといふ問題もあるが、漢字は右起りに書くのが習慣である以上、最後にはそれへ屆けねばならぬものではあるけれども、前にも述べた如く、練習としては成る可く手本に近い場所から練習させることが有利であるといふ立場から、そして又手本は前や右に置くよりは、左方に置く方が一層便利なるは勿論であるから、練習としては矢張り左起りにさせる方が有利なのである。

斯くの如く(一)一字一字の練習は左起りの横書で練習させ、(二)纒まつた一行の書振は左起りの縦書で練習させ、其れが略ぼ出來た所で(三)愈々清書といふ段になつては、右起縦書といふ普通の習慣通りに書かせるのが、方法として最も適當な順序であると考へるのである。

(三)骨書法と臨書法の適用

古來漢字の書方練習には、臨帖法と寫字法とが用ひられて居る。臨帖法といふのは、單に手本を見てそれを眞似て練習するので、最も簡單で最も行はれ易い方法ではあるが、なかなか成績の擧りにくい方法なのである。そこで方便として寫字法といふのが工夫されたのである。寫字法といふのは、一言でいへば手本によりすがる方法なので、手本文字の原形を其の儘模倣し得る樣にと仕組んだものである。そして其の方法が又(イ)骨書法(ロ)籠書法(ハ)肉書法の三種に分かれる。(イ)骨書法といふのは、白紙を手本に載せて、鉛筆なり細い毛筆なりで、手本文字點畫の中心となつて居る骨を寫し取らせ、然かる後手本を見ながら、其の骨書の上をたどつて肉づけて書く方法なのである。(ロ)籠書

法といふのは、骨書と同樣白紙を手本に載せて手本文字の點畫の外緣を寫し取らせ、所謂二重文字を作らせて、さて手本を見ながら、其の二重文字の中へ少しの空隙も殘さず、墨を塡充させる樣に筆を運ばせて、其の手加減を覺えさせる方法なのである。(ハ)肉書法といふのは、所謂透寫法ともいふので、白紙を手本の上に載せ、其の儘直ちに寫し書きをさせるのである。

以上の方法は、元來漢字の大字若しくは中字の練習法として案出されたもので、同じ毛筆にしても、細字となると、第二者即ち籠書法は既に適用することが出來ないのである。況して鉛筆やペンになると、點畫が非常に細いものになるから、其れを二重文字に寫し取ることは全く不可能なのでこれは問題にならぬ。第三者の肉書法は、硬筆の方では厚向きの用紙を用ひるのであるから、是れ亦自然行はれにくいことになる。殘つた第一者も、紙を載せて一々に其の骨を寫し取らすとすれば、是れ亦第三者肉書法と全く同樣に、行はれにくいのではあるが、其の骨書を印刷したものを與へるとすれば、此の方法は最も有効に之れを運用することが出來るのである。即ち嚴密に手本の細字から其の骨を寫し取つたものを出來得るだけ鮮明に印刷して與へれば、其の字形は全然手本文字と一致したものとなり、其の上を渡書させれば、遺憾なく手本文字に似せた練習をさせ得るのである。斯樣な方法によつて、此の骨書法は之れを硬筆細字の練習に適用すべきものと考へるのである。彼の

橫文字の練習には全然此の方法が採用されて居るのである。そして橫文字には、其の骨書に實線を以つて示したものと點線を以つて示したものとの二種を併用して居るのである。

さて漢字の骨書は之れを如何にすべきかといふと、矢張橫文字同樣に(一)實線のものと(二)點線のものとの二種を併用することが出來得るのみならず、其の實線のものも嚴密に言はば之れを二種に區別することが出來るのである。即ち(イ)漢字は橫文字に比して一層力の入れ所と、力の拔き所との變化に富んで居るのであるから、橫文字が力の入れ所を少しも表はさず、單に線の方向と長さと位置とを、何等變化なき實線を以つて表はすと全く同樣のものを、漢字でも之れを表示することが出來る以外に、(ロ)漢字は其の力の入れ所を明瞭に表はした骨書をも表示する事が出來るのである。否其の方が漢字としては最も直接的具體的なのである。さうして見ると漢字の骨書には之れを細別すると、(1)力の入れ所を表はした實線のもの、(2)力の入れ所を表はさぬ實線のもの、(3)點線を以つて表はしたものの三種となるのである。今吾人が練習形式を組み立つるに方り、此の三種を悉く採用すべきか如何と考ふるに、第一者は、是れ漢字の特質を最も直接明瞭に表示するものであるから、初學年から高學年に至るまで其の全部に通じて之れを適用すべきものであると考へるが、第二者は、初學年は勿論、中學年にも之れを用ふべからざるものと考へる。殊に尋常一二學年あたりに若し之れを

採用したら、力の入らぬ字を書く樣になつて、寧しろ一種の弊を生ずるものとさへ考へるのである が、高學年即ち尋常五年以上には之れを用ひることは有効であると考へる。第三者點線を以つて表はすものは、歐米に於いても今日では多少疑問を受けて居るので、之れは著るしく眼の衛生を害するとの理由から、人によつては全然之れを排斥して居るのである。余輩漢字の練習に於いても、研究の或時代には之れをも採用したこともあつたけれども、今日では之れは採用すべき程のものではないと考へて割愛したのである。

次に臨書法に至つては、單獨に此の方法のみによる練習が、其の成績が甚だ薄弱であることは、過去の歷史が明瞭に證明して居ることではあるけれども、書方練習の方法としては、之れを捨てるといふことは到底出來得べきことではないので、寧しろ之れは書方練習の本體とすべきものであらうと考へるが、然かし此の臨書法に屆けるまでの下準備を、相當に計畫し、それによつて基礎を作つてから、其の方法に訴へる樣に工夫したならば、臨帖法は大いに其の効を顯はし得るのである。そこで吾人の意見では、前上詳細に述べた所の骨書法と此の臨帖法とを巧みに結合する工夫を立てることが、練習形式の研究上重要なる問題であると考へるのである。

(四)模書と自書との組合

臨帖法は單に手本を見て書くのであるから、兒童の働く領域が大部分となるので、先づ之れを自書と名づくべきである。又骨書法は手本に依りすがつて其の上を忠實に渡り書きするので、兒童の働く領域が半減するから、之れを模書と名づくべきである。今練習上此の兩者を併用するに方つて、其の組合せに就いては餘程工夫して、其の進歩を自然的ならしめねばならぬ。假りに一頁を練習させるとして、其の左半分は全然模書に訴へ、右の半分は全部自書に任すといふ樣に、片寄つた組合法を取るとしたら、それが果して最も適當な方法であらうか。前にも述べた如く、元來模書は準備的の方法なので、何所までも方便的のものである。之れを用ひはするけれども、常に之れから引きはなして獨立自書の域に導き入れる工夫をせねばならぬ。それであるから、左半頁でも先づ模書に訴へたら、次には直に自書に導き、又模書に訴へては自書に導くといふ樣に、交互に兩者を適用する工夫を必要とする。そして右半頁には成るべく多く臨帖法による自書に訴へるといふ樣に、全體としては練習の目的たる自書を多くし、方便たる模書を少なくするといふ樣に仕組むことが適當であると考へるのである。

第四　練習形式の實例

前項に於いて、鉛筆書方練習形式の要件に基づき、之れを具體的に纏めた自分の考案に係る練習

形式の實例を示せば次の通りである。茲に擧げた例は、國語讀本卷三に準據した、尋常第二學年用の一節を抄出したものであるが、其の他の學年の分も、鉛筆細字練習用のものとしては、悉く此の形式を採用するのである。（ペンのものも大體は之れと同趣向のものではあるけれども、少しく體裁を異にする所がある。それはペン書方の部に掲載してある。）

尙ほ茲に引續いて之れが使用法を說明するのが便利なのであるけれども、それは次の第六節に於いて項を別にして詳述してあるから、茲には之れを略す。

次に淸書用紙のことに就いて一言しよう。前例各頁の最後に、淸書の一欄を設けてあるが、之れは此の頁の一行を練習し終つた最後に、兎も角も之れを淸書させるがよい、その當座の要求に應ずるものとして設けたものである。更に次の行以下三行なり四行なりを練習し終つた場合に、それを纏めて一紙面上に更めて淸書をさせることが、技能の發達上極めて有効なのである。これがためには練習帖と同じ寸法で同じ字詰同じ行數の方眼紙を別に用意して置く必要がある。即ち尋常一二學年用として八行十二字詰のもの、尋常三四年用として九行十三字詰のもの、尋常五六年用として十行十五字詰のものを特別に印刷して置くのである。

（右の頁）

本手	淸書	淸書	自書	淸書	自書	自書	淸書
左	左	左		左			
持	持	持		持			
通	通	通		通			
小	小	小		小			
二	二	二		二			
郎	郎	郎		郎			
正	正	正		正			
一	一	一		一			
海	海	海		海			
舟	舟	舟		舟			
毎	毎	毎		毎			
日	日	日		日			

（左の頁）

本手	淸書	淸書	自書	淸書	自書	自書	淸書
雨	雨	雨		雨			
高	高	高		高			
石	石	石		石			
方	方	方		方			
足	足	足		足			
手	手	手		手			
村	村	村		村			
水	水	水		水			
車	車	車		車			
長	長	長		長			
道	道	道		道			
右	右	右		右			

實際の練習帖

（實際の練習帖には、手本文字は黑刷とし、骨書三行は淺藍刷として、鉛筆で淸書するの便を圖り且つ手本が最も鮮明に見える樣にしてある）

第三節　教授を始める時期及び教授時數

練習形式による鉛筆書方の教授は尋常第一學年のどの時期から、始めるのが最も適當であるかといふ問題は、慥かに一考を要する問題である。今日の教育は尋常一年入學の翌日から、はや文字や算術を授ける樣なことはせぬ。少くとも一週間乃至十日間は、教科の時間割もなく、只だ一般に學校生活に慣らす仕事をやらねばならぬ。それが過ぎてからそろ〳〵授業に手を染めるので、文字の教授も始まる、計算も授けることになるのであるが、さて文字を授ければ、必らず其所に其れの書方といふ問題が生じて來る。其の時から練習形式を持ち出してよいかといふと、此の時期は尙ほ未

だ甚だ早いのである。何ぜかといふと、假令今日の兒童は、入學の以前に於いて既に鉛筆を手にし、文字も形取れば繪も畫くといふ樣に、兒童が文具の使用文字の書寫に親しんで居るものが可也多いとはいつても、試みに仔細に其の鉛筆の持ち方を觀察して見、其の書く所の文字の大さや形體は如何にて見ると、其の鉛筆の持ち方たるや殆んど野生的ともいふべきもので、文字の大さや形體は如何にもうぶ〳〵して居るので、先づ其の持方は十分に指導矯正を要するものであり、其の文字たるや大に緊縮させねばならぬものである。即ち形式に當嵌めて練習させるまでには、餘程迄陶冶を加へねばならぬものである。即ち讀方で文字教授を扱ふ場合に、之等重要なる仕事をなさねばならぬので、それが相當に出來てからでなければ、形式に當嵌めての練習は始め得ないのである。余輩の經驗を以つてすれば、之れが爲めには少なくとも第一學期の全部を必要とするのである。其の間は國語の教授に於いては、別に讀方だ書方だといつて時間を分けず、國語として讀本を中心にして、いろいろの仕事をする中に、書寫の仕事も併せ課しておいて、さて第二學期の始めから、そろ〳〵形式による練習を始めるのが最も適當であると考へるのである。

次には鉛筆書方の爲めに、毎週幾何の時間を割くべきかは實際上極めて重要な問題である。然かるに此の問題は鉛筆書方を課する方案の如何によつて、非常に異なるのであるが、今前述第一案即ち尋常第一二學年に於いては毛筆書方を全廢し、之れに代ふるに鉛筆書方のみを以つてし、且つ前に教材の選擇の章下に擧げたる如き教材を課するとして、吾人の意見を述ぶれば、尋常第一學年に於いては、第二學期から毎週二時を特設し、尋常第二學年に於いては毎週三時を必要とするのである。今其の然かる所以を少しく說明しよう。

尋常第一學年に於いては、教材として片假名が四十九字、數字が十字、濁音が二十字、半濁音が五字、漢字語句は全部で四十七字、計百三十一字用意されて居る。今一時限に平均四字宛取扱ふとして三十三時を要する。所で他方に於いて、一週幾時間宛書方を課していつたら、これだけの材料を取扱ひ得るかを打算して見ると、第二學期が先づ十二週、第三學期は九週あるとして、合せて二十一週となり、毎週二時間宛書方を課するとすれば計四十二時となる。此れだけの教授時數中に、三十三時間分の教材を取扱ふとすれば、差引九時間の餘裕を生ずることになるが、此の九時間は或は特別の淸書に充てたり、又は臨時の事故の爲めに休課となる等のこともあるから、それ等に充てるとすれば、先づ毎週二時間宛之れを課すれば、殆んど遺憾なき取扱をなし得るものである。

尋常第二學年に於いては、平假名語句が九十六字あるが、之れは一時限に平均六字宛取扱ふとして計十六時を要し、漢字語句が三百十二字ある、之れは一時限に平均五字宛取扱ふとして、計六十

三時を要し、總計七十九時を要することになる。而して他方教授時數はどれだけあるかといふと、第一學期が十一週、第二學期が十二週、第三學期が九週で、計三十二週となる。それで毎週三時宛とすれば總計九十六時となり、差引十七時の餘裕を生ずることになるが、之れは矢張り特別の清書とか、臨時の事故とかに充てるとすれば、先づ〳〵一週三時間宛書方を課するが、最も適當な處置となるのである。而して尋常第二學年に於いて、書方の爲めに毎週三時間を割くことは、教科案全體のわりふりの上から考へても、決して不可能のことではないのである。

以上は前に掲げた第一案の實施に就いて述べたのであるが、若し第二案を實行するとしたらどうするかといふと、其の教授時數が一週三時で、内二時は毛筆に充て、一時を鉛筆に充てるものとして考へるならば、茲に二種の方法があるのである。其の一は教材を半減又は三分の一に減じて、前同樣に一字一字の書方を丁寧に說明し指導を與へること。其の二は教材は其の儘にしておいて、說明指導の方をうんと略して、兎も角も其の全部を練習させるのである。說明指導を簡單にするといふと、教授法を甚だ輕視する樣にも感ぜられるが、元來余輩の仕組んだ練習形式なるものは、極端に言はゞ何等教師の說明指導なく、悉く兒童の自習に任かしておいても、單なる臨書法によるよりは數層の効果あるものとして工夫したものであるから、已むを得ない場合には、說明指導を極めて簡單にしてもよいのである。之れ骨書なるものは無言の說明指導者として、大に有力なる任務を盡すものであるからである。第三案たる讀方に附帶した鉛筆書方は、更に第六節に於いて特に之れを述べることにしてあるし、第四案たる毛筆書方の應用として鉛筆書方を課するものは、特に本節に於いて說明するまでもないことであるから省略する。

第四節　準備練習

尋一へ入學の當初から、形式による練習を課することの困難であることは既に述べた所で、練習形式の使用は第二學期の始めからにすることは相應はしいのである。そして第一學期中に讀方と書方とを分けず、讀方の教授中に文字の書方に關する諸般の準備をせねばならぬことも亦前節に於いて述べた所である。今本節に於いては其の準備に關する事項を分解し、一々に就いて之れを詳說したいのである。

想ふに、入學の當初から第一學期中に於いて行ふべき準備練習の仕事は、詳しくいへば三段に分かれるのである。第一は姿勢、腕法、執筆を教へ込むこと、第二基本點畫の運筆を授けて之れを練習させること、第三片假名を自由に書寫させることである。それで第一の姿勢、腕法、執筆のこと

は前節書法の部に於いて其の要領を詳述してある。之れを嚴格に授け之れを守らせる樣指導を與へ、毎時之れを矯正して終には牢乎たる習慣たらしむる樣に努力さへすればよいので、別に方法として此所に述ぶべきことはないのであるから、他の二項だけに就いて左に之れを述べることにする。

第一　最初期に於ける基本點畫の練習

今日の兒童は、入學以前に於いて既に鉛筆なり石筆なりを手にして、簡單な繪や字を書いて居ることは、殆んど普遍的の事實であるが、然かし其の繪なり字なりを分解して、之れが點畫を仔細に吟味して見ると、其の點畫は全く筆意のない單純な線で、所謂打込みとか、當りとか、拂ひとか、はねとか云ふものが一つもないのである。稀にそれのあるものがあつても、字としての法に適はぬ所の甚だ幼稚なものである。然かるに字を書くといふ以上、其の書寫の用具が鉛筆であるにしても、毛筆であるにしても、乃至はペンであるにしても、點畫に筆意を與へるといふことは、全く字其者に直屬した大切な要件であつて、筆意なき點畫は字としての價値を與へることが出來ないのである。そこで第一に先づ筆意ある點畫の書き表はしを授け、それに慣れさせることが必要なのである。所で此の筆意の教授は、其の要素たる基本の點畫に就いて之れを行ふことも出來るし、又纏まつた文字例へば片假名なり簡單な漢字なりによつて行ふことも出來るのであるが、尋一の初期に於いては、未だ片假名文字の學習も甚だ少ない時期であるから、之れを文字によつて與へるよりは、基本の點畫によつて與へることがより便宜なのである。

然からば片假名を組み立てゝ居る基本畫はどれだけあるかといふと、吾人は次の十五種を擧げるのである。

一　丨　丿　丶　レ　ヽ　ノ　フ　ㄱ　ノ　レ　ヘ　乀

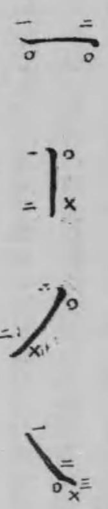
そこで此の十五種の基本畫の一々に就いて、尋一の初期に於いて悉く其の筆意を教授し練習すべきものであるかといふと、吾人は決してさうは考へぬのである。此の中横畫と縱畫と左斜畫と、右斜畫（右斜畫は此の十五種の中には加はつては居ないが、漢字の基本畫としては最も重大なるもの）との四種を特に選定して、此の場合之れに就いて特別に指導し練習させることが必要であると考へる。此の四種の畫は、實に基本畫中の基本畫であつて、これ等の運筆の要領を會得すれば、片假名なり漢字なりの大體の骨組は既に之れをよくしたものと謂つても差支ない程のものである。それであるから、此の四種の畫の運筆練習から入ることは、一方から言へば最も經濟的の方法であるとも言ひ得るのである。

そこで之れを實際に練習させる方法としては、尋常第一學年の初期に於いて、之れを二段に分けて取扱ふのがよいと考へる。

第一段の方法は、單に其の方向だけを練習させるので、筆意を少しも表はさぬのである。何ぜかといふと、横なり縦なり右斜なり左斜なりの方向に、自由に線を引き得る樣にする修養は、此の種の基本畫の書き方としては、最も重要なる、そして最も初めに來るべき要件であるが、入學當初の軟弱なる兒童は、此の事が尚ほ未だ確實にはなし得ぬものが多數にあるからである。今此の段階に於いて、兒童に書かすべき實例を示して見ると、次の通りなのである。

さて實際に之れを練習させる方法も亦二種に分かれる。一は單に之れを空書させることで、一は之れを實書させることである。之れを實書させることは、時ありて却つて一種の弊を誘ひ出す恐れがないでもないから、之れをさせることは如何であらうかとも考へるが、只餘り繰返して單なる空書のみをさせることは、單調に失し嫌厭を生じ易いことでもあるから、時に之れを實書させることがあつてもよいとも考へるのである。何れにしても、此の方向の練習は一に教師の模範によつて練習させるので、教師は先づ板上に横畫を引きながら、一二三四……の呼唱を唱へ、それに合して一本宛を引き、兒童には鉛筆を持つた手を出させ、其の模範に倣ひ、其の呼唱に合して之れを空書させて手の動かし方を練習させ、次いで縦畫も同樣にし、左斜、右斜の畫も同樣に練習させるのである。斯く空書によつて手の動きをそれぞれに練習させ、所定の習慣を與へた後、一二回は雜記帳の上に實書させ、机間を巡視して各兒の方向上の偏癖の有無を觀察し、若し著るしい癖のあるものは、適宜の指導を與へねばならぬ。然かし此の種の方法はさう長時間之れを繼續すべきものではない。

第二段の方法といふのは、其の畫に筆意をつけた引き方の練習で、次に示すが如きものを課するのである。



即ち第一段に示したものに比して、力を加ふべき部分と、力をぬくべき部分とを書き分けさせるので、之れを第一段のものに比べると、それは著るしく困難の度を增すものである。前上○印をつけた部分は力を加へ、×印の部分は力ぬくべき部分である。さて實際に之れを取扱ふ手續は、次の

五段に分けて行ふを便とする。

(一)筆意のない畫と、筆意のある畫との差異を明かに認めさせ、文字の書寫には筆意のある畫を作るべき必要あることを說明し、次いで筆意なき片假名文字と、筆意あるそれとの實例二三を、兩々比較板書して筆意の價値を痛切に認めさせるのである。

(二)横畫、縱畫、左斜、右斜の四畫を順次に其の運筆の要領を說明しつゝ、板上に之れが模範を示すこと。而して力を加へる要領としては、鉛筆を極めて短距離の間引き下げて一點を打つべきことを、特に明瞭に理解させねばならぬ。然からざれば、多くの兒童は單に垂直に、恰かも錐で穴を穿つが如き要領で鉛筆を押すのを見る。又稀には其の反對に長過ぎる點を打つものもある。何れも甚だよくない書方であるから、適切な指導を與へねばならぬ。

(三)次には先づ空書によつて練習させるがよい。そして此の空書練習は、單に兒童に手を動かさせるだけでなく、　教師は其の各畫を引くに適當な運筆上の氣勢を前例圖解に示した如く、一二の合圖によつて唱へ示し、兒童にも之れを摸唱させて手を動かせることが有効である。例へば第一の横畫は、前例に數字を記入したが如く、二氣勢を以つて書くがよいので、第二の縱畫も第三の左斜畫も、同樣二氣勢を以つて書き、第四の右斜畫は、三氣勢を以つて書くがよいのである。

經驗上第四の斜畫を三氣勢を以つて畫くことは、兒童の最も困難とする所である。されば最も適切に、第一氣勢の部輕く當りをつけ、第二氣勢の部まで段々强く下げること、第三氣勢の部靜かに右方に拂ふその要領を會得させねばならぬ。

(四)次いで之れを實書に訴へるのであるが、此の場合特に姿勢、腕法、執筆を正しくさせてから、簿上に實書させるのである。さて實書の場合には、前上空書の際授けた氣勢の唱呼を以つて、教師板上に模範を示しながら、兒童にも氣勢を唱へさせつつ書かすがよい。又兒童の書く大さは、固より銘々に異なるのではあるが、餘り小さいのはよくないので、大方一寸位の長さに引かして練習させるのが適當であるから、此の標準を豫じめ指示して置くを必要とする。それから一回に凡そ五本位を續けて引かせるがよい。一回に一本だけしか引かせないといふのでは、練習の効を收め難いのである。次に

(五)批正を與へる。批正は例へば第一の横畫を五本續けて書かしたら、直ちに机間を巡視して、共通に拙劣なる個所を看取り、板上で批正を與へ、更に反覆して同一のものを又五本引かせてから、次の縱畫に就いても同樣の方法によつて批正を與へ、順次に第三の左斜畫、第四の右斜畫

に及ぶ。

尙ほ少しく熟練した時期からは、兒童各自の自己批正を奬勵するがよい。只此の方法は最初からはやらせ難いもので、多少自由に書き得る樣になつてからでなければならぬのである。

以上は此の基本畫の運筆法を始めて授ける場合の取扱に就いて述べたのであるが、此の仕事は其の性質として極めて無味單調なものである。所が一方に於ては此の時期の兒童は字を書くことには大なる興味を有つて居るもので、字を書き得た場合には少からぬ誇りを感じ、早く字が書ける樣になりたいとの希望を有つて居るわけであるから、さう長く此の種の仕事のみを課して居るわけにはいかぬのである。そこで大體要領を會得したと見たら、直ぐと片假名の書方を始めるがよい。

第二　片假名の自由書寫練習

茲に自由書寫練習といふのは、形式によらない書方の練習といふ意味なので、彼の兒童の好き勝手に任せて、何でも書かせるといふ樣な意味のものではない。其の材料は讀本中から採り、讀本の取扱に附帶して、讀方で授けた文字の書方を授け、それを單なる白紙上に練習させるのである。例へば國語讀本で第一頁にハナを授けたら、其の場合ハの字はどう書くか、ナの字はどう書くかと、必らず授けねばならぬし、第二頁にハト、マメ、マスを授けたとすれば、トマメスの字の運筆順から、筆意及び整形上の心得を一通りは授けねばならぬ。此の場合最初から吾人が前節に於いて述べた樣な、練習形式の帳簿を與へ、形式に當て嵌めた練習をさせることは、之れを兒童の手指の發達に照して尙ほ未だ甚だ早きを感ずるのである。それで入學の當初から、第一學期間中は普通の白紙帳簿上に、普通より少し大きな方一寸位の大さに、思ひ切つた暢達した練習をさせることが、後に五分方眼の形式に導き入れる準備として適當なことである。

それで第一學期中に、國語讀本はどこまでを授け終るべき配當になつて居るかといふと、第二十五頁へチマの課まで進むべきことゝなつて居て、そこまで進めばそれで片假名五十音が全部完結するので、其の次には五十音表が提出されて居る。そして其の間に新字を授ける語句としては、どんなものが採られてあるかといふと、次の通りである。•印をつけた字が新出文字なのである。

ハナ　ハト　マメ　マス　ミノ　カサ　カラカサ　キマス　ウシ　アリマス　モノサシ　ヒノシ
オミヤ　オテラ　ヤクバ　イヌ　シロイイヌ　ネコ　ニヒキ　サル　カキノタネヲカニニヤリマシタ　メヲダセ　キニナレ　ミツケテトリマシタ　ハチ　ワケ　カゼガフイテヨイココロモチデス　デンデンムシムシ　エヲカイテキマス　ネエサン　ソバ　ホタル　ツユ　ヘチマ

以上讀本の進展に連れ、既習文字の練習と、新字の書方教授とをせねばならぬのであるが、今此

の時期に於ける新字の書方教授として、履むべき普通の順序を述ぶれば凡そ次の通りである。

(一)運筆順　正しき運筆順を授けること。蓋し運筆の順序は、漢字にありては區區なるものもないではないけれども、片假名ではそれはちやんと一定して居るのであるが、若し之れに關し何等教授する所なく、全然兒童の勝手に任せて書かして見るならば、それは實に區々樣々である。例へばハの字は右を先に左を後に書いたり、ナの字は縱畫を書いてから横畫を書いたりするのである。殊にカコヨの如きは、隨分骨折つて敎へても、カの字は第二畫を先きに書いたり、コの字は第二畫を第一畫に續けて、右から左へ運んだり、ヨの字は第三畫を第一畫の縱畫につゞけて右から左へ運んで、第二畫を最後に書いたりするのである。所で運筆順なるものは、其の字の形體を整へる上にも、極めて重要なる關係のあるものであるから、漢字では古來からそれが八釜敷いはれて居るのである。それであるから、書方の仕事殊に尋常一年の初期に於いては、最も嚴密に正しい運筆順を躾け込む必要があるのである。それで之れを覺えさせる爲めには、數回空書させることが有効なのである。

(二)運筆法　次には各點畫の運筆法を領解させること。元來鉛筆は毛筆程に運筆法が込み入つては居らぬのである。この事は既に第三章第四節のペン及び鉛筆の書法中、第一片假名及び漢字基本畫の運筆の部に詳述したのであるが、然かし鉛筆には鉛筆に固有の運筆法があるので、それに準據して書いた字と、然らずして勝手に書いた字とを比べて見ると、字としての價値が大に異なるのである。殊に兒童の自然に書く字を觀ると、多くは筆意のない單純な運筆で書いて居る。從つて字に勢もなければ整正もない。それで此の點に關して、最も適切な指導を與へねばならぬ。吾人先きに書法の部で擧げた基本畫の運筆法なるものは、之れが說明の資料として用意したものである。即ち教師は之れによつて最も明り易く說明を與へると共に、白墨を以つて板上に範書を示し、兒童をして先づ知識としての理解を與へると共に、範例を直觀させねばならぬ。尙ほ此の運筆法も運筆の順と等しく教師の示範に連れて數回之れを空書させるがよい。

(三)整形法　次いで整形上の心得を會得させる。毛筆の大字にあつては、整形のことは書寫上極めて大切なことであるが、鉛筆の字は大きいといつても五分方眼位に過ぎないのであるから、毛筆程に八釜敷いはなくてもよいことではあるけれども、然かし一向之れに無頓着に書いてよいといふことは決してない。たゞ整形上のことは此の時期の兒童にさう詳しいことを說明しても、悉く會得させることは困難であるから、其の字を書くに最も重要なる點一つか二つを、明り易く說明して與へる位でよいのである。これも第三章第五節の第一に於いて、片假名の整形とし

て其の全部を說明してあるが、それは稍詳しく書いてあるのであるから、其の中から必要なだけの材料を取つて說明を與へるのである。

尙ほ之れを說示する方法としては、單に說明を與へるだけでは駄目である。板上に全兒童が明瞭に見得る程の大さに範書を示し、之れに赤色チョークを以つて形の整へ方を圖解して與へることが有効である。即ち例へばハの字の如く、全形を三角形に作るべきものには、赤チョークで其の外側に三角の枠をかけて其の形を示し、又ヨの字の如く横分位を正しくすべき字は、其の心得を赤のチョークの横線で、其の點畫の上を色取つて示すといふ風にするのである。

以上運筆と整形とは、文字を書く上の二大要件であるから、假令尋常一年の初步と雖ども其の程度相應には之れを理解させ、且つ之れを書き表はし得る樣指導せねばならぬ。而して前項に於いて述べたる所は、運筆整形共に、何れもこれ正しく作る所以の說明を與へるものとして述べたものであるが、それの理解を徹底させる爲めには、正しく作つたものと、拙劣なるものとを比較して說示することが一層有効であるから、常に正しいものを說明したあとには、敎師は其の拙ないものをも板上に模書して、正しいものと比較させて其の拙劣なる個所を指摘し、以つて兒童の誤まりに陷ゐることを、豫じめ防ぐ樣にするがよい。然かし其の拙劣なるものを、何時までも板上に保留して置いて、久しく兒童の眼に觸れさして置くことは、寧しろ一種の弊害を生ずる恐れがあるから、說明が終らば直ちに之れを拭ひ去るがよいのである。

(四) 練習と批正　運筆の順序も覺えさせ、運筆の方法も悟らせ、整形上の心得も會得さした次には、今度は之れを簿上に實際に書かすのであるが、此の場合一段と姿勢、腕法、執筆を正しくさせ、尙ほ前に基本畫練習の場合にも述べた通り、少し大形に書かして練習させることが望ましいのである。若し自然に放擲して置くと、兒童の多くは事實極めて小さくチクチクと書く風がある。この場合には方便として一寸方眼位の大さに書かせたい。之れが爲めには敎師は豫じめ鐵筆版にても其の大さの手本を刷つて置いて、標準として各兒に與へるがよい。而して兒童の手が尙ほ未だ運筆に慣れない中は、其の手本の上を渡書させることは望ましくないことであるが、第一學期も半位を經過して、一通り筆意ある運筆に慣れて來た頃からは、漸次其の手本の上を渡書させる方法を取るがよい。之れやがて第二學期からは、五分方眼大の練習形式を與へて練習させる豫定であつて、渡書を以つて出發させる樣に仕組んであるから、其れの準備練習ともなつて都合がよいのである。

又練習と批正とは互に交錯して行ふべきことであるが、最初は先づ一字を書かしたら、速かに

机間巡視によつて共通の誤謬や拙劣な個所を發見し、板上に於いて適切な批正を與へ、續いて數個を連書させ、其の間は絶えず机間を巡視して各兒に批正を與へる。此の場合教師は赤の鉛筆を持つて居て、運筆に關し整形に關し、赤を以て批正を與へるがよい。斯くて一つの字を四字乃至五字位を練習さしたら、次の字に移つて同樣の取扱をするのである。尙ほ練習の終期に於いて、數人の兒童を出して白墨を以つて板上に書かせ、相互に比較して批評させることなど、教式の變化としても、又は兒童の文字觀察の力を練るとしても、共に有効なのである。

(正)清書　清書は新字を四字乃至五字を授け終つた後に、之れを一行に纒め、それを數行繰返して書かせ、一枚の書寫物としての體裁を具へたものにさせるがよい。之れが爲めには、一寸方眼を刷入した清書紙を用意しておいて、それに清書をさせるのである。尙ほ清書は暗書をさせることは甚だ望ましいことではあるけれども、此の時期の兒童には、そは困難のことであるから、清書の爲めには兒童に書かすものと、同じ字詰同じ大さの手本を印刷して與へ、それを見て清書させることにするがよい。

以上第一學期間に於ける自由書寫練習は、總べて第二學期以後練習形式に當嵌めて練習させるときの準備練習であるが、此の準備練習の間に於いて、書方に關し、兒童には次の先入觀念をしつかりと植ゑつける樣にせねばならぬ。即ち(一)字にはそれぞれ定まつた運筆の順序があるもので、勝手に書くべきものでない。(二)筆を運ぶには筆意といふものがある。終始單一な運筆は決して善美なる字を書く所以の方法ではない。(三)何れの字も正しく美しく見えるには、其の形をよく整へねばならぬものである。勝手に書いたとてよく見える字にはならない。(四)字を書く場合に、姿勢、腕法、執筆は之れを嚴守せねばならぬ。不正なる姿勢、腕法、執筆では決して善美なる字は書けない。多くは字に一種の癖がつく。(五)字を習ふには決して粗雜であつてはならぬ。極めて眞面目に出來るだけ丁寧に書くべきものである。丁寧に稽古した十字の値打は、粗雜に書いた百字にも優ること。(六)清書は出來得るだけ綺麗にすべきものである。消したり補筆したり、又汚ない手で白紙を汚す等は慎しむべきことであることを、是非とも知らせねばならぬ。而して此等の躾は出發の當初に於いて、教師がうんと努力し適切に之れを植ゑつければ、其の後は大に樂になるのであるが、若し初步の時期に之等を怠り、一旦惡い習慣がついたとなると、なかなか矯正の困難なことであるから、特に此の場合に於いて之れを述べて置くのである。

第五節　練習形式による教授

尋常第一學年第一學期に於いて、片假名全部に亘つて自由書寫による準備練習を終へたる以上、第二學期からは練習形式に當て嵌めての鉛筆書方練習を始め、以後引續いて、同一の形式によつて練習させるのであるから、此の形式による練習は、鉛筆書方練習の本體と謂ふべきものである。而して其の吾人の主張に係る組立に關しては、既に本章第二節に於いて詳述した所であり、其の雛形をも例示したのである。今其の形式の練習帖によつて實際に取扱ふ順序方法を述べるに方り、便宜の爲め左に尋常第一學年に於ける、漢字練習の部の初頁の實例を掲げ、之れによつて說明することにする。(他の學年は一單元一頁であるが、尋一に限り一單元二頁としてある。)

23

(右の頁)

手本	自書	自書	自書	自書	自書	自書	清書
大							
小							
木							
人							
犬							
川							
口							
日							
子							
月							
上							
中							

(左の頁)

手本	淺書	淺書	自書	自書	手本	淺書	自書
大	大	大			大	大	
小	小	小			小	小	
木	木	木			木	木	
人	人	人			人	人	
犬	犬	犬			犬	犬	
川	川	川			川	川	
口	口	口			口	口	
日	日	日			日	日	
子	子	子			子	子	
月	月	月			月	月	
上	上	上			上	上	
中	中	中			中	中	

さて此の練習帖を始めて使はせる初頭に方つて、先づ兒童に此の練習帖組立の趣意と使用法とに關し、よくよく領解させねばならぬのである。(一)組立の趣意といふのは、細字の練習は單に手本を見て練習するだけでは、上達はなかなか困難なものである。それで此の帖の如く手本もあり、又其の手本の字の骨を取つて示した骨書もあつて、練習上大そう便宜に出來て居る。それで斯ういふものによつて練習すれば、速く上達することが出來るから、之れを使用するのであることを領解させねばならぬ。

(二)それから使用法といふのは(イ)此の帖は左の頁から使ひ始めて右の頁に移り、最後の欄に清書するものなること、(ロ)但し左の頁は同一の字を繰返して、左から右へ横書にして練習し、右の頁は左の行から縱書にして練習し、順次に右の行に移つて行くものであること。(ハ)又淺書の部の字は手本の字から骨を取り、力の入れ所を一段强く現はしてあるものであるから、それをよく看取つて其の上を渡つて書いて、よく手加減を覺えねばならぬこと。(ニ)自書の欄は總べて白欄にしてある。此の部分は銘々が自分の力で書いて見るべき部である。即ち骨書を渡書して覺えた手加減で、そこへ書いて見ること。(ホ)所々に手本を入れてあるのは、それを見て書く爲めのみならず、自分で書いたものと手本とを比べて見るのに都合のよい樣に用意してあるのであるから、何時も其れと比較して見るべきものである等のことを、最も明瞭に領解さしてから使ひ始めさすべきである。若し使用法に

關する理解を缺き、無理解無頓着に使つて居るのでは、十分の効を收め難いのである。

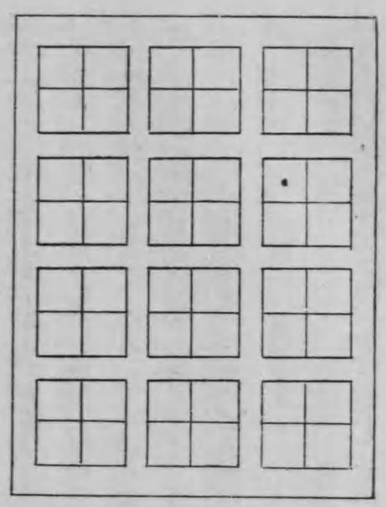
次に此の左と右の二頁の練習豫定時數は、そは鉛筆書方の時間を特設してやる場合と、讀方に附帶してやる場合とで大に異なるのであるが、今之れを特設した時間で扱ふものとしての時間の配當をいふならば、此の二頁を二時限で扱ふことが、經驗上丁度よいのである。そして尋一では毛筆を全廢したとすれば、鉛筆書方の爲めに一週二時を配當することが最も都合のよい事情であるから、此の二頁は丁度一週間分の教材となるのであり、一年全體の分量も丁度よい程になつて居る。斯くの如く之れを二時限の分量として、毎時間の教材配當をどう區切るのが最もよいかといふと、左の頁と右の頁とに分けて配當する案も立つけれども、さうすると始めの時間に十二字も說明を與へなければならぬことになつて、それは事實不適當であるし、又寧しろ不可能のことである。それで左右に通じて上下二段に分けて配當するのが最も適當して居る。さうすると、一時間に說明を與ふべき字は六字だけで、其の分量も丁度適當して居るし、又教師の說明と兒童の自働とが相半ばして組合ふことにもなつて、實際仕事をするとしては、確にやりよいのである。今さういふ配當に基づいての實際の取扱方を左に述べて見よう。

第一　說明示範

前掲の實例に就いて言へば、第一時限に於いて教授する文字は「大小木人大川」の六字である。此等の文字は國語讀本卷二の(三)キクノハナと(五)カンガヘモノと(六)犬ノヨクバリの課に於いて既に授けた文字である。其の讀方は勿論書方としても、之れが運筆の順序や運筆法、並に整形法の大要は讀方に於いて既に授け終はつた文字であるが、今書方に於いて所定の練習帖により、形式に當嵌めての練習をさせようといふのが仕事である。そこで之れを取扱ふに方りては、先づ其の讀方と運筆の順序とを復習し、次いで之れより運筆の方法と整形上の心得とを特に授くべき旨の目的指示の下に、先づ第一字たる大の字から之れが說明と示範とを始めるのである。而して之れが爲めには次の頁に示す如き三行四字詰の方五寸位の、正方形内に十字線を劃した小黑板を用意して置くことが大そう便利なのである。

先づ第一の方形内に、大の字を範書するのであるが、鉛筆書方の模範を示すとしては、白墨を使用するのが最も重實である。何ぜかといふと、白墨は其の質鉛筆に似て一層軟かく、點畫の表はれが最もよく鉛筆に似通つて居るからである。而して範書に先だち、方形内十字線の縱の中心線上に、赤チョークを以つて線を引いて中心線を明示し、それを目當に大の字の各點畫の位置を示すのである。即ち第一畫は左右に同じ力を與へ、横中心線の少しく上に、縱中心線で左右に等しく分割され

る位置に引き、第二畫は起筆部に力を與へ、最初は縱中心線上に引き下げ、第一畫との交叉點あたりから、漸次左下へ彎曲させ、終筆部は方形下の隅に向けて勢よく拂ふべく、第三畫は第一、二畫の交叉部から筆を起し、起筆部は輕く當りをつけ、それより勢よく右下の隅へ引き下げ、十分に力を與へてから右方に拂ふべきことの說明を與へつゝ實際に範書を示すのである。



以上運筆の要領を說明しつゝ範書を示した上で、今度は其の字の形をどう整へるかの整形上の心得を說示するのであるが、此の大の字は大體外形を三角形に整へれば形がよく整ふ字である。そこで方形內に範書した字に向つて、其の字の外緣を辿つて赤堅で三角形の枠をかけて見せるのである。それであるから、教師の範書は此の三角の枠をかけた場合、丁度其の枠の中へよくはまる樣に、教師は最初からよく注意して書かねばならず、又教案を立てる前、此の字は整形法をどう說明しようかといふ書法は、豫じめ調査してよく其の材料を握つて居らなければならぬのである。そこで此の外形を圍つて見せた所で、繼つて各點畫の長さや方向は最初から其の外形をよく心得て居て書くべきことの注意を與へねばならぬ。即ち第一畫は三角の上部に位すべき畫であるから、餘り長く作つてはよくないし、第二畫の終筆は三角形の基底左の部に、第三畫の終筆は同上右の部に向けて引く用意がなければならぬことを心得させるのである。

尙ほ以上正しき書方の範書と說明とを與へた後、今度は多くの兒童の誤り易い點、又は拙劣な點を豫想し、之れをも板上に摸書して、之れを教師の正しい範書と比較觀察さして、其の誤謬拙劣に陷ゐることを豫防することが必要である。但し其の誤謬拙劣なる摸書を、長く板上に止めておくことのよくないことは既に述べた所である。一旦示した後は直ちに拭ひ去るべきである。

第二　練習批正

以上說明と示範とによつて、大の字を書く上の運筆並に整形に關する知識は相當に明かになつたのである。さて次には愈々之れを實書させるのであるが、其の第一段の仕事は、最左側の手本の直ぐ右側に接して居る骨書の上を渡書させるのである。此の骨書は前にも述べた如く、手本文字の骨を取つて表はしたものであるから、其の字形も大さも全然手本の字と等しいのみならず、運筆上力の入れ所も一段太く濃くして、夫々に明示してあるのであるから、兒童が最初に動かす手を、手本

通りに導くものとしては、最も適當のものである、即ち其の上面を一回乃至二回渡書させて、大體の手加減を覺えさせるのである。鉛筆は毛筆と異なり、骨書の上を二回も三回も渡書しても、尙ほ骨書の字體が明瞭になつて居るものであるから、同一骨書を二三回渡書させることが出來るのであるけれども、餘り同一のものの上を反覆渡書させることは、嫌厭も來し易いし、時間も多く要するし、又紙を破る慮もあるから、先づ二回位に止めて次の行に移るがよい。即ち其の次にある新らしい骨書の上をも、又二回同樣に渡書をさせる。

それで二行の骨書の上を、都合四回渡書するので、先づ大體の要領が手に入つたのであるから、今度は其の次の自書の白欄へ、兒童自身の力で書かして見る。そしてそれを第二の手本即ち中央に挿入してある手本と比較さして見て、拙劣な點を發見させ、それを直して次の自書の白欄に又一字を自書させる。今度は其の自書を直ぐ其の右側の手本文字と比較さして、其の及ばぬ點、過ぎたる點、力の入れ加減等につき、十分に自己批正をやらしてそれを直させるのである。

此の自己批正は、中央の手本と比べて直しを入れるものであるから、此の際兒童の眼は一層深く手本の中に入つて、よく手本文字の運筆や形體を看取して、其の字の書方に就いて一層よく領解する點があるのである。然かし之れを經驗に徵するに、多くの兒童は第一の自書は先づ大體手本文字の大さに近く書くが、第二の自書は大抵は少し小さく書く樣である。即ち兒童の手は段々に縮むのである。この手が次第に縮むといふことは、吾々自身が毛筆習字をする場合の經驗に照らして見ても、這般の消息を窺ひ知ることが出來るので、兒童としては誠に無理でないことゝ思ふのである。

そこで第三の骨書の上を、又々二回渡書をさせる。そして自己批正によつて得た書寫觀念を、更に其の渡書によつて一層適切に規制さして、玆に一層完全なる領解を得させ、そしてから今度は次の自書の欄に十分注意して、獨立した書寫をさせるのである。

以上左の頁は同一の大の字に就いて、左起横書の練習法によつて渡書が三行で六字、自書が三字合計九字を書かせるので、先づ兒童の手に收め得べき修得は大抵收め得ることゝ信ずるのである。勿論左頁最後の自書欄に書いた兒童の成績が、其の左右に刷り入られて居る手本の文字に比して、甚だ相遠いことは事實であるけれども、之れは固より兒童の程度として當然のことである。只練習の態度が眞面目を缺いて居る結果、無雜作ななぐり書をするものが時としてはないでもないから、是れは嚴格に取締をして適當な注意と奬勵とを與へなければならぬのである。尙ほ兒童が渡書及び自書に從事して居る間、敎師は絶えず机間巡視をなし、共通の誤謬拙劣な點を發見した場合には、一同に筆をおかせ、板上に於いて適切な批正を與へ、其の點をよく承知さした上で、又々繼續して

練習させるのである。

次いで小の字以下川の字に至るまでを授けるのであるが、之れが取扱は全く大の字に等しいのであるから之れを省略する。

以上左頁の六字に就いて、左起横書の方法で、骨書の導きと自書とによつて練習さした次には、右の頁は今度は「大小木人犬川」の六字を、縦書によつて練習させるのであるが、此の場合教師は別に板上に之れが範書を示す必要がある。即ち教師は再び白堊を以つて其の六字を續けて、板上に書いて見せるのである。但し此の場合の範書は、運筆や整形の模範を示す意味ではない、此の六字をつゞけて書く場合の態度や、書寫の速度調子など、一字一字の取扱では示しかねて居た方面の模範を示すのである。されば一同をして筆を置かせ、深くそれに注目さして觀察させねばならぬ。尙ほ此の模範書は一行だけに止めず、出來得べくば黑板の右の部に一行、左の部に一行を示して、左右何れの側の兒童にも、よくよく觀察させる樣にすることが望ましいことである。それがすんでからは、左側の手本に近接した行から、順次右方へ練習を續けさせるのであるが、最初は先づ左方三行だけを書くべく命じ、其の間は絶えず机間を巡視して個人毎に指導を與へると共に、共通の誤謬拙劣の點を發見したならば、又々板上で批正を與へ、兒童には其の三行目の自書に向つて、十分なる自己批正をさせてから、殘りの自書三行の書寫を命じ、此の際も机間を巡視して、前同樣個人指導と共通の誤謬拙劣の個所の板上批正とを與へる。そして最後の清書の欄は白欄の儘に殘して置かせる。

以上は上段六字の取扱の方法に就いて述べたのであるが、第二時限に於いては、下段六字に就いて前同樣の取扱をなすのであるから、それは記述を省略する。只最後清書の欄は此の時間の最後に於いてなさしめるのであるが、其は次の項に於いて說明することにする。

第三　清　書

清書は二樣に分けてやらせるのである。其の一は本練習帖の最後に設けてある清書欄にさせるものゝ、其の二は特別に用意してある清書紙にさせるのである。

其の一、練習帖の最後にさせるものは、此の頁上下段共に練習を終へた時、即ち第二時限の終に於いてさせるのであるが、此の場合は右の頁練習中、個人毎に又は共通に與へられた批正の點を特に回想し、十分緊張した態度でさせる樣に導かねばならぬ。それが爲めには、練習に引續き直ちに清書をさせるのは、一般に成績がよくないのである。暫時手指を憩め、其の間に板上小黑板の示範を再び觀察させ、或は銘々が特に指導された點や、共通に批正された要點等をよく回想さしてから、

清書に着手させるがよい。そして清書の後は全部の練習帖を集め其の清書の欄だけに對し、赤鉛筆を以つて訂正を與へ、評語若くは評點を與へて返すのである。

其の二、特別に用意してある清書紙にさせる清書といふのは、本練習帖と全く同樣の方眼白紙を別に用意しておいて、それに清書をさせるので、之れが寧しろ本當の清書といふべきものである。さて其の清書紙に清書をさせるには、此の「大小木人犬川に口日子月上中」の十二字を一行としたものを、全紙面八行全部に繰返して書かせることも出來るのではあるが、其の一枚を書くには約一時間を要するので、全體の時間數の割當上それは出來かねることであるから、次の頁の練習を終へた後、其の二行を繰返して書かせるか、又は三頁練習を終へた所で、三行を繰返して書かせるか、尙ほ四頁練習を終へた後に其の四行を繰返して書かせる樣にすることが、時間の關係上便宜なのであり、成績物としても體裁がよく整ふのである。

次に此の清書は、望むらくは之れを暗書させたいのであるけれども、何分毛筆大字とは異なり、字數が多くて一々之れを暗んじさせることが困難なことであり、殊に尋一二の如き初學年にあつては一層困難なことであるから、先づ手本を見させて清書をさせることを以つて、一般的の方法とせねばならぬのである。然かし尋常三學年以上の學級にあつては、清書すべき文字を筆意なき字體で板書して示し、兒童銘々の修得した力によつて、筆意をつけた字として清書をさせる方法を取ることとは望ましいことである。

斯くの如くしてなしたる清書は、別に訂正を加へることなく、單に評語若くは評點を附して返附し、最も優良なるものは教室內の壁面にある成績物貼附板に掲げて之れを賞揚し、他の兒童の奮勵に資する樣にするがよい。

第六節　讀方に附帶した鉛筆書方

吾人の案に從へば、尋常第一二學年の毛筆書方は之れを廢し、之れに代ふるに鉛筆書方を以つてし、毛筆は尋常第三學年から之れを課するのである。さうすると鉛筆書方は之れを中絕してしまふものかといふと、さうではない。尋三四では之れを讀方に附帶して授ける樣に仕組むことが甚だ便利である。又有効であることは、既に書方教科課程案の章下に詳述したことである。如何にも今日の書方はどうしても硬筆書方の系統を樹立せねばならぬ。之れは確かに時勢の要求である。之れを中絕させる譯にはいかぬ。殊に尋常第五六學年では、ペン書方の練習をもさせねばならぬ。さうすると尋常第一二學年の鉛筆書方と、尋常第五六學年のペン書方とを繼續させる中繼としても、尋常

第三四學年の鉛筆書方を、なんとか工夫せねばならぬことは、硬筆書方系統の上からも必要なのであるし、又鉛筆やペンで細字を書く技能は、兒童の學校生活上の實用としても直接必要なのである。斯くの如く時勢の要求と兒童の實生活とに必要缺くべからざる鉛筆書方を、讀方中の書取に結び付けて、之れが練習を仕組むことが、最も自然的で又最も便利であり、經濟的であることも亦前既に述べた所である。今此の趣意の下に、左に讀方に附帶しての鉛筆書方に關し少しく述べて見たいのである。

(一)教材の選擇排列　教材の選擇排列に關しては、既に本章第一節に詳述し教材の全部をも掲載したことであるから、再び茲に之れを述べる必要を認めぬのであるが、只既に讀方に附帶させ、之れと結合して取扱ふ以上、讀方で授けた新字又は其の新字を使つて出來て居る所の語句を以つて教材に充てることが、一層必要であり又取扱上便宜であるばかりでなく、讀方其者の爲めに考へて見ても其の新字なり語句なりを數回反覆正しく美しく、之れが書方を練習させることであるから、從つて之れを記憶するに極めて便利なので、讀方の仕事としても其の價値決して鮮なくないのである。

(二)練習の形式　練習の形式に關しても、矢張り尋常第一二學年に用ひたものと全然同樣の形式のものを用ひるのである。只方眼が幾分小さくなり、從つて行數字詰が幾分增すの差あるのみで、之れも既に述べた所であるから說明は省略する。

(三)其の取扱法　以上の二項はすべて尋常第一二學年と等しいのであるが、さて之れが取扱方に至つては、特設の時間で扱ふものとは、餘程異なる所がなければならぬのである。

第一、其の取扱の精粗といふ點から言ふと、とても尋一二に取扱つた樣に丁寧な取扱をして居るわけにはいかぬのである。なぜかといふと、尋常一二年では特設の時間に於いて授けるのであるから、一字一字に就いて餘程まで精細な指導が出來得るのであるけれども、讀方に附帶した取扱は、讀方教授の時間中文字の取扱や、書取の一部として從來の仕事を今少し擴張して、正書美書まで屆けようといふのであるから、とても十分の時間を充てるわけにはいかぬ。それであるから、教師の說明指導は極めて簡單でなければならぬ。然かし簡單であるといふことは、强ち其の効果を甚だしく低減するといふわけではない。吾人の仕組んだ練習形式は、之れも既に述べた如く、極端に言はゞ何等教師の說明指導がなくとも、其の骨書自身が、即ち教師の說明指導を具體化した仕組のものであるから、何等の說明指導を與へず、單に其の上を渡書させるだけでも、相當に其の効果を留め得るものなのである。殊に尋常三四年となれば、教師の說明指導は簡單でも、兒童の眼と耳とは尋一二に比して數段の進步をして居るのであるから、必ずや相當の成績は收め得るのである。

第二、讀方教授中のどの時期に於いて之れを取扱ふかといふと、それは其の人の執る讀方教授法の如何によつて異なるものではあるけれども、今吾人が日常實際に執る所の方法を其の儘に述べて見るならば、尋常第一二學年では時間を特設して扱ふのであるから、必ずしも讀本の進度と並行はし兼ねるが、讀方に附帶した書方練習は、何時も讀本の進度と相並行させねばならぬのである、さうなると、讀本の文章によつては新字の提出の多いものと少ないものとあり、又時によつては何も新字のない課もあるが、新字のない時でも普通の書取を課することは、勿論讀方當然の任務であるが、正美書としての書方は其の課にはないのである。然かし實際に於いて最も多くの課は、數個の新字提出があるので、書方が自然附帶されるのである。

それで、例へば國語讀本卷五二中村君といふ課を例に取つて言ふと、此の課に提出されて居る新字は、當　徒　敎　室　級　君　冬　問の八字であるが、吾人は此の新字を含んだ語句として、當番　生徒　敎室　級君　冬　學問を選んで、之れを練習帖に載せて居るのである。さて此の一課を四時間で取扱ふとすると、大體第一時には一課の通讀と事實の把捉とを主眼とし、第二時には文意に即しつゝ語句の吟味に主きを置き、第三時には全文の文章法的取扱と達讀練習とを目的とし、第四時には總練習として扱ふ樣に考へる。さうすると、文章の取扱は第一時に於いて、新字の讀方と其の書方を授けることが當然附帶するが、然かし此の時期の書方は、單に筆順を授け、其の字は如何にして組み立てる字であるかといふこと位に止めねばならぬ。第二時の語句の吟味といふ所では、無論漢字語句だけではない、讀方としては假名語句でも大に其の意義を吟味すべきものがあり、漢字語句であつても、其の意義が極めて明瞭で、何等取扱を要しないものもないではないけれども、此の時間は語句の吟味が、一半の重なる仕事となつて居る時間であるから、此の時間に書方の練習をさせるのが、最も適當であると考へる。然かし此の時間の一部分たる十分か十五分の時間で、一頁全部を悉く書かせることは、事實不可能である。それで此の時間には、左の四行だけを書かせ、第四時總練習の時間に於いて、右の四行を書かせる樣にするのである。

さて僅少の時間に、兎も角も十一の字を七行書くのであるから、なかなか容易のことではないが、敎師から說明を與へる字は、此の十一字中の全くの新字たる、當徒敎室級君冬問の八字だけである。それぞれの字に就いて、極めて簡單なる說明を與へるのである。即ち始め四字位を一纏めにして說明を與へ、先づそれを左起横書によつて練習させる。次に殘りの四字に就いて同樣の取扱をする。說明の程度は、例へば「當」の字に就いては、よく字心を整へ横分位に注意すべきこと、「徒」の字は偏と旁との割合に注意し、且つ上狹く下廣く作るべきと、「敎」の字も同樣なること、「室」の字も「當」の

字と全く等しく、「級」の字は「教」の字に等しい。それから「君」の字は横分位に注意し、且つ字心をよく整ふべきこと、「冬」の字も字心を整へ、左右の斜畫を長く作ること「問」の字は縱分位と横分位とを共に注意すべく、而して左の縱畫を短かく、右の縱畫を長く作るべきこと位なので、說明と共に範書に對し、圖解又は色チョークを以つて其の注意すべき部分を指示するのである。

篤四時に於ける右四行の練習は、左起縱書として、續けて練習をさせるのである、次に淸書に關しては、尋一二の部に述べたと全く同樣に、練習帖の最後の淸書のみならず、新語句三行位の練習が終つたあとで、特別の方眼紙を與へてさせるがよい。其の爲めには約三十分位の時間は要するが、之れは讀方の時間中に差繰をつけるか、又は毛筆書方の時間の中から之れを割いてやらせるか、已むを得ざれば家庭作業とするのである。

第七節　用具の製法及び選定

鉛筆書方の用具として入用なものを擧げて見ると、第一が鉛筆、第二が用紙である。此の二種は必須缺くべからざるものであるが、其の他に尙ほ附屬品ともいふべきものを擧げると、第三消壓護、下敷、小刀、鉛筆削箱などがある。さて此等の用具が如何なる材料によつて、如何にして製造されるものであるかといふことに關し、一通りの知識を有することは、教授者として必要なことであり、又どういふものを選んで使用することが、教授上最も便宜であるかといふことについて知つて居る必要がある。左に之れを述べよう。

第一　鉛　筆

鉛筆は其の昔始めて作り出された時は、墨心には鉛の小桿を用ひたものである。それであるから鉛の筆と名づけたのである。それが段々發達し變遷して、今日では鉛は用ひなくなつて、それに代へるに石墨を以つてすることになつたけれども、其の名稱は敢て石墨筆とか墨筆とかいはなくて、矢張り最初の名稱を其の儘使用して居るのである。

(一)鉛筆の製法　鉛筆製法の工程は(イ)墨心の製造、(ロ)軸木の製作、(ハ)仕上の三段に分かれる。左に順次之れを說明しよう。

(イ)墨心の製造　石墨の原礦は塊狀をなして居るもので、其の質は純粹のものと、他の物質を混入したものとある。鉛筆の墨心を作るに用ひるものは、其の質最も純粹なものを選ばねばならぬ。さうでないと、書寫中時々砂の微粉などが紙に引掛つて、石墨粉末の紙面に附着する作用を妨げ、且つ紙面を傷づける恐れがある。又石墨のみで作つた墨心は、其の硬度が餘り軟かに過ぎるものであ

るから、それに適量の粘土を混ぜて作るのである。此の粘土を混合するのは、鉛筆の硬度を自由にする所以で、粘土混合の割合が多ければ硬いものとなり、少なければ軟かいものになるのである。而して鉛筆は使用の目的によつて、種々なる硬度のものを必要とするのであるから、此の粘土を混ぜることは鉛筆製造上重要なる事項なのである。

それで塊狀になつて居る石墨の原礦と、粘土の原礦とを何れも別々に之れを精製して、粉末となし、所要の硬度を得るに適當なる割合に石墨と粘土との粉末を混合し、水を加へてよく之れを混ぜ、こねまはして粘稠なものにする。若し墨色を純墨なものにしたい時には、其の中に油煙をも加へるのである。其の三種の混合物を壓搾器に入れて、うんと壓搾を加へると、餘分の水は搾り出されて、粘稠の度の一層强い塊となる。此の粘塊物を、墨心大の小孔を有する器械の中に入れ、强い壓力を加へると、其の粘塊物が其の小孔から押し出されて、細長い線香の樣なものになる。然かし其の小桿は、尙ほ未だ幾分水氣を含んで居るから、其の儘直ぐに軸木に嵌める譯にはいかぬ、そこでそれを靜かに乾かして、固くしてから墨心の長さに切るのである。

(ロ)軸木の製作　軸木に用ひる主なるものは、赤松・水松(アフラヂ)である。其の角材を、長七寸幅三寸厚二分程の小板に挽き割り、それを穿孔器械にかけて其の表面に墨心を挿入すべき半圓形の小溝を穿つのである。之れを溝附(ミゾヅケ)といつて居る。其の小溝の中へ前に乾燥さしてあつた墨心をはめ込んで、それを膠で附けるのである。それから別に同寸法の溝附をした板を作つて置いて、それを裏板として當てると、墨心半圓形の露出部が、其の小溝に丁度よく嵌つて、墨心全部を二枚の板で包むことになる。そして其の裏板をも膠附けにする。さうすると、恰かも一枚の板の切口から小孔を穿ち、それへ墨心を挿入して膠でしつかりと附着さしたと同じ物になるので、之れを切口から見ると、四分厚の板の中へ、縱に墨心を挿し込んだ形に見えるのである。其の二枚貼の板を器械にかけて、墨心が中心になる樣に表裏から圓く削ると其の板が終に數本の小圓桿に分割されて、其の一本一本が眞中に墨心を有する鉛筆となるのである。

(ハ)仕上　斯くして出來た鉛筆は、外見尙ほ甚だ粗雜に見えるのであるから、軸木の表面にワニスを塗つたり、又木口を綺麗に切斷したり、一方に消護謨をはめたり、押銘をしたりして仕上をなし、仕上げが出來ると、十二本を六角形に括つて帶をさせ、其の束六本を半クロースと唱へて、之れをボール箱に入れ、其の箱二個を一クロースと稱して、鉛筆取引の單位として居るのである。

(二)鉛筆の種類　鉛筆は使用の目的によつて其の硬度を異にすべく、硬度の差は粘土混入の度合によることは既に述べた所である。かういふ關係から、今日作り出されて居る鉛筆には、十數種ある

ので、それがH印、F印、B印に區別されて居る。B印の鉛筆は其の質が柔軟で、色が一番黒いし、H印のものは其の質が堅硬で、色も淡いのである。それからF印の鉛筆は、此の二者の中間に位して居るものである。而してB印には其の硬度に又五階級あり、H印に四階級、F印に二階級ある。今之れが用途及び硬度を示せば上記の通りである。此の順記に就いて之れを通覽すれば4Hから5Hに至る間に、硬度の如何に相異なるかは明瞭に窺ひ知ることが出來る。

4H	機械製圖用	最も硬い
3H	機械製圖用	次に硬い
2H	機械製圖用及び輪廓用	硬い
1H	輪廓用	稍硬い
1F	下圖用	硬い
2F	光線用	硬い
HB	下圖其他一般に用ふ	中位に硬い
2B	陰影を施すに使ふ	軟かい
2B	同上	更に軟かい
3B	同上	尚更に軟かい
4B	同上	非常に軟かい
5B	同上	最も軟かい

(三)書方用としての選定　以上十二種の中に就いて、書方用としては其の何れを採用すべきかは、實際上重要なる問題である。惟ふに其の兩極端なる4H並に5Bの何れも不適當であることは、極めて明瞭である。なぜかといふと、4Hの方は餘り硬過ぎて、點畫が細堅に過ぎ、且つ筆意を表はすには不適當であるからである。之れに反し、5Bの方は筆意を表はすには適當であるけれども、餘り軟かに過ぎて、始終其の尖端を手入しなければならぬので、殆んど其の煩に堪へぬのである。以下段々に詮議して來て見ると、Hの種類に屬するもの、及びFの種類に屬するものは、何れも硬きに過ぎて適當でない。2Bからは2Bに至る三種類が、比較的適當して居ることを知り、就中BHが最も適當して居ることを感ずるのであるから、余輩は之れのみを主に使用して居る。尚ほ此のHBは他の筆記用書取用にも主として用ひられて居る鉛筆であるから、管理上からも最も重寶なのである。

第二　西洋紙

鉛筆で日本紙に字を書くことは素より出來ないことはないけれども、西洋紙に書くのに比べて甚だ不便であつて、然かも價が大そう高くなるのである。それで鉛筆書方練習の用紙といへば、全く西洋紙にきまつて居るといつてもよろしい。さて西洋紙はどんな材料をどんな方法で作つたものであるか、又それにはどんな種類があるかに就いて其の大要を述べて見よう。

(一)西洋紙の製法　西洋紙の製法は、之れを(1)原料、(2)漉方、(3)製造力の三項に分つて說明しよう。

(1)原料　西洋紙の原料は植物纖維で、其の主なるものは、破布、藁、及び木材の三種である。破布には木綿、リネン、麻などあるが、就中木綿の破布が最も多く使はれる。藁は我が國では稻の藁を用ひ、歐米では麥の藁を使ふ。木材の種類は唐檜、樅、松などの針葉樹が主なるものである。我が國では專ばら內地產の樅、栂、北海道產の椴松(トドマツ)、蝦夷松の四種を使用する。木材の製紙原料をパ

ルプと稱するので、北海道や樺太には其のパルプを製造する會社が多く設けられて居る。而してパルプは之れを大別すれば二種となる。一は器械的パルプと稱するもので、單に木材を打碎いたもの、二は化學的パルプと稱するもので、藥品で打碎いて、更に亞硫酸瓦斯の溶液で處分し、木材中に含有せるリグネンを溶解さして、其の纖維のみを殘したもので、此の方は値段も高いのである。そして化學的パルプと破布との混入の如何によりて、紙質に上下を生ずるのである。破布、藁及び木材から製紙の原料を製するは、各多少異なる所はあるけれども、何れにも共通の要點を擧ぐれば、(一)截斷、(二)除塵、(三)蒸煮、(四)漂泊の四工程である。

(2)漉方　西洋紙を漉くにも、手漉法と機械漉法とあるけれども、多量に漉出すのは無論機械漉である。機械漉は紙漉機にかけて漉く法で、原料から出來上りまでずつと連續して漉出す機械があつて、それが四つの部分に分かれて居る、(イ)原料調製部、(ロ)漉網部、(ハ)乾燥部、(ニ)光澤附部、(ホ)仕上である。左に其の各に就いて要點を述べよう。

(二)原料調製部　此の部は製紙の原料となるものを適當に處理する部分で、パルプを水で溶き、之れに數種の補助材料を注加する。之れ單にパルプのみで紙を漉出したとすると、其の紙質が如何にも粗鬆であつて、一向緊縮せず、そしてインキを受けると直ちに吸收して、あたりへ擴散する。所謂にじんでしまつてとても字が書けないのである。それで其の質を締める爲めに、適當な補助材料を加へる必要が生ずるのである。補助材料として第一に加へるものは白土である。之れ白土は纖維の孔隙を塡充して、紙の透明の度を減じ、紙面を平滑にして印刷に便利にし、又之れが爲めに紙の重量をも增すからである。其の白土を加へて回轉力によつてよく攪伴して、パルプと白土とをよく混合させ、第二にサイズと明礬とを加へる。サイズといふのは、松脂を曹達灰で處理したもので、所謂樹脂石鹼なのである。之れを明礬と共に加へると、明礬はサイズを沈澱さして、紙面の孔隙を塞ぎ、紙質の吸水性を防ぎ、且つ耐水性を强くするので、インキを受けた場合、其の滲入を防ぎ、筆を走らせるにも、印刷をするにも便利になるのである。第三には澱粉を注加する。澱粉は粘着劑として使用するので、紙面のケバ立つのを防ぎ、紙に强さを與へ、且つ揉みに耐える力を增すためである。かういふ目的であるから、澱粉を注加するには、之れを水で溶き、それに蒸氣を通して糊として紙料に混合するのである。第四に加へるものは色料である。色料を加へる目的には二種ある。一は紙を純白にする爲めで、一は所要の色例へば赤桃青綠色の紙にする爲めである。純白にする爲めには青色の色料を用ひるのである。之れパルプは普通純白には漂白されず、多少黃色を帶びて居るものであるから、之れを純白にする爲めには、補色の青を用ひるのである。又赤なり黃なり青な

り綠なりの色紙を漉くには、夫々の色料を加へて染色するのである。

(ロ)漉網部　此の部は製紙上最も重要な部分で、大小數十のロールが水平に並列されて居り、それに接觸して上部に精細な布目の樣な黃銅製の金網があつて、絕えず回轉して居る。其の上へ淸淨白色の細末纖維の原料が流れて出て、網と共に進んで、其の間に横の振動をも受ける樣に裝置されて居るので、纖維は縱横によく搦み合ふのである。それから水分は網目を通して下へ垂れ、金網の上には調製された原料のみが殘つて、紙の層を構成する。次に壓搾ロールといふ一組乃至三組の毛布を貼つたロールがあつて、紙層は此のロールの間を通る中に、含有して居た餘分の水は搾り取られて、紙は段々に堅くなつて行くのである。

(ハ)乾燥部　此の部は多數の乾燥圓筒から出來て居り、乾燥圓筒は鐵製で表面平滑に仕上げられたものが、上下二段に配列されて居る。紙はそれ等の乾燥圓筒の面に接觸して、圓筒の廻轉に伴ひ進行して居る間に、圓筒內蒸氣熱のために、濕紙は全く乾燥されて製紙となるのである。

(ニ)光澤附部(ツヤツケ)　乾燥された紙は、紙面が尙ほ粗糙であるから、光澤附機械を通過さして光澤を附ける。光澤機(カレンダー)は冷剛鑄鐵製のロールを數本積み重ねた機械で、ロールの壓力と摩擦作用とで光澤を附けるのである。光澤が附くと印刷も筆の運びも一層鮮明に出來るのである。紙が光澤機から出ると、卷取裝置によつて卷き取られて、普通のものは其の儘使はれるが、上等の印刷紙や外觀の美を尙ぶものは、更に强光澤機にかけて再び光澤を附けるのである。そして强光澤機は冷剛鑄鐵製のロールと、紙或は木綿を高壓して作つたロールとを交互に積み重ね、硬質と彈力質とのロールで、交互に摩擦して强光澤を出すのである。

(ホ)仕上　紙の仕上げには二種ある。一は卷取紙とするもので、一は平判紙とするものである。卷取紙といふのは、一枚一枚には截斷しなくて、或分量ずうつと續いたものに仕上げるのである。此の紙の使用の目的は、新聞とか雜誌とか多量に印刷するものは、今日では印刷を迅速ならしむる必要上、輪轉印刷機を使用することになつて居るが、其の使用に應ずる爲めに作り出すのである。即ち普通の光澤機から送り出されたものを、更に卷取機にかけて仕上卷取を行ふのである。此の際紙は所要の紙幅に切斷され、適當の堅さに卷き直されて、各用途に適する樣仕上げるのである。

平判紙といふのは、普通の光澤機で光澤を附けた後、截斷器(カッター)によつて縱横共に所要の寸法に截斷して、一枚一枚の紙にしたものである。所要の寸法は使用の目的によつて如何樣にも自由なる寸法を與へ得るのではあるが、普通市場へ送り出すものには、菊判といふのと四六判といふのがある。菊判といふのは縱二尺一寸横三尺一寸の廣さで、其の一枚から菊判形の本の用紙が十六枚、即ち三

十二頁を取り得る寸法を有して居るのである。それから四六判といふのは、縦二尺六寸横三尺六寸の廣さで、其の一枚から四六形の本の用紙が三十二枚、即ち六十四頁を取り得るのであるし、又四六倍判形の雜誌即ち大形の雜誌であると十六枚即ち三十二頁を取り得るのである。

それから菊判も四六判も、以上の如き廣さの紙五百枚を一括したものを一嗹と稱し、それが賣買上の單位となつて居るのである。それで平判紙は截斷機で截斷されると、それが女工の手によつて不良紙を選り別けた後、薄向のものは五百枚を數へて一嗹とし、厚向のものは二百五十枚を數へて半嗹とし、一層厚向のものは百二十五枚を數へて四半嗹とし、それを包紙で包裝して一包とし、之れに夫々紙類の商標を貼付して荷造を行ふのである。

序に紙の斤量のことを一言しよう。西洋紙には例へば四十斤だとか、八十五斤だとか、百二十五斤だとかいふことがある。之れは一嗹の目方を言ふので、例へば四十斤の紙といへば、壹斤は百六十匁であるから、其の紙は五百枚で六貫四百目あるといふことである。それで斤量の少ない紙は概して薄く、斤量の多い紙は概して厚いものであるけれども、斤量と厚さとは必ずしも並行するものでない。薄手の紙で斤量の多いものもあれば、厚手の紙で斤量の少ないものもある。普通書籍に使はれて居る紙は、四十斤から六十斤位のもので、雜誌の表紙などに使はれて居る紙は、八十斤から九十斤位のものが先づ普通である。

(3)製造力　機械漉で紙を漉出す力はどれ位のものであるかといふと、前に述べた樣に、原料調製部から光澤附部まで連續して機械が働くので、其の製造高は一分間に四百尺、即ち約七十間、即ち一町餘の長さを漉出すのである。其の幅は所要の寸法によつて種々あるが、大きなものになると百八十六吋、即ち一丈五尺餘のものもある。夫々の幅で前記の樣に、一分間四百尺を漉出さすとすると、一時間に菊判ならば十六嗹、四六判ならば約十五嗹を漉出さすことゝなる。そして菊判一嗹の價假りに五圓のものを漉くとすると、其の器械一時間の働きが八十圓となり、一日十二時間絶えず働いたとすると、九百六十圓先づザアッと一臺一日千圓の生産力を有つて居るのである。百八十六吋大のものとなると、菊版八つに切れるから、それの八倍即ち八千圓の力を有つて居ることになるのである。器械の生産力の大なるに驚かざるを得ない。

(二)西洋紙の種類　西洋紙は其の原料なる破布、藁、器械的パルプ、化學的パルプの配合の割合の如何によつて、品質上幾多の種類を生じ、又其の斤量の如何によつても、幾多の種類を形作る。そして之等は何れも其の値段を定める根底となるものであるが、今之れを使用の目的から其の種類を分けて見ると、今日吾々の日常使用して居る紙を次の八種類に分けることが出來るのである。即ち

(1)筆記用紙、(2)印刷用紙、(3)畫學用紙、(4)吸取紙、(5)加工紙、(6)包紙、(7)薄葉紙、(8)板紙となるので、それが通常西洋紙の種類といはれて居るのである。

(1)筆記用紙　ライテング、ペーパーと稱するもので、ペンのよくきく紙として製出されたものである。原料は器械的パルプと、化學的パルプと、破布と藁とを適當に用ひ、それに光澤と硬さを與へるサイズを混じ、更に塡料を適當に入れて、インキがにじまぬ樣、然かし成るべく乾きの速き樣にとの用意を以つて作つたものである。洋罫紙及びレターペーパーなどが其の主なるものである。ペン書用の紙は此の種でなければならぬのである。

(2)印刷用紙　印刷用に供する目的を以つて製出されるもので、之れが最も多量に製造されるのである。新聞、雜誌、書籍等の用紙は皆それである。而して此の用紙は其の種類最も多いのであるが、之れを大別して、ザラ紙と上等紙とに分ける。ザラ紙といふのは、新聞紙及び紙質の劣等なる雜誌等に用ひるもので、上等紙とは主に書籍其の他善美なる印刷用に使用するものである。原料は破布化學的パルプ等を多く混入したものである。

(3)畫學紙　圖畫を畫くに用ひるもので、其の種類多々ある。原料は他の種類に比し藁を多く使用し、概して厚向に漉き出すのである。

(4)吸取紙　インキの吸取に用ひる紙で、紙質の極めて粗鬆なものである。原料は器械的パルプを多くし、一切糊及びサイズ、塡料等を用ひず、しかも厚向に漉出すのである。

(5)加工紙　雜紙の口繪などに用ひる光澤あるアートペーパーの如き種類で、之れは一旦漉き出した紙に、更に特別の加工をして、强く光澤をつけたもので、印刷が極めて鮮明に出來る樣作り出したものである。

(6)包紙　諸般の製品を包む紙として作り出すもので、强靱なのが最大要件である。原料としてはクラフトと稱する特別のパルプを使用するのである。クラフトといふのは、化學的パルプの半製品とも言ふべきもので、化學的パルプの製造法即ち木材を亞硫酸瓦斯の溶液で處分する際、中途で其の作用を止めて作り出した原料なのである。

(7)薄葉紙　雜誌の口繪の薄い覆紙とか、卷煙草の紙とかいふ特別に薄い種類の紙をいふのである。之れは原料並に漉方に特別の方法を要するのである。

(8)板紙　馬糞紙とか、寫眞の臺紙とかいふ特に厚い種類の紙をいふので、此の種の紙は、皆幾枚かの薄い紙を別々に漉き出して、それを最後に一つに合せ、糊で粘合して一枚の厚いものにつぎ合して作るのである。馬糞紙の原料は重に藁を用ひ、漂白を略して作るものである。

(三)用紙の選定　鉛筆書方用紙として、如何なる紙が最も適當であるか、其の品質を選定することは、實際上重要なことである。之れが選定の條件を考へて見ると、第一鉛筆は其の用具の特徴として、摩擦によつて墨心の粉末を紙上に移して行くものであるから、其の紙面の寧しろ粗雜のものが適當なのである。第二其の色は敢て純白でなければならぬといふ譯ではないが、兎も角も白色でなければならぬ。第三相當な厚さがなければならぬ。餘り薄いものは墨痕紙背に通つて、裏面の書寫に不便である。

かう考へると、前記各種類中、筆記用紙、印刷紙、畫學紙の三種類中に就いて選擇しなければならぬのであるが、インキのよくさく樣にとの目的で作つた筆記用紙は、鉛筆用としては其の品質光澤共に却つて不適當である。印刷用紙の方は筆記用紙も殆んど同一で、餘り適當して居らぬ。寧ろ下等品たるザラ紙の方が適當するのである。然かしザラ其の儘では未だ完全ではない。次に畫學紙は餘り厚過ぎて價も亦不廉であるから、之れを用ひ難いのである。斯う考へて來ると、ザラ紙に畫學紙の漉方を加味し、紙面が適當に粗糙で、且つ厚みも適當な混合漉方のものが適して居るといふことになる。

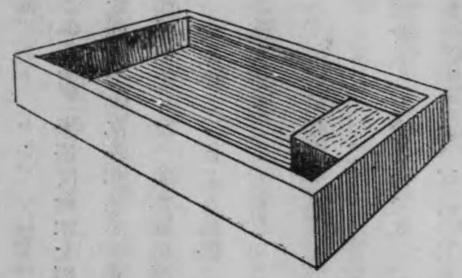
第三　附屬品

「小刀、鉛筆削箱、下敷、消護謨」

(一)小刀　鉛筆は軸木を削つて墨心を出し、それを適當な形に整へて字を書くべき道具であるから、當然小刀の必要がある。小刀には色々の種類があるが、普通鉛筆を削るのに使はれて居るものに、西洋のナイフ、我が國の所謂小刀と切出小刀とが主である。ナイフは兩刃であるから兒童には使はせにくいし、小刀も鉛筆を削るものとしては餘り便宜でない。切出小刀は一番使ひよく、又手入にも便利であるし、殊に手工を課してある學校では、尋常三年から手工の爲めに切出小刀を與へるのであるから、それを直ちに鉛筆削にも使はせるが便宜なのである。其の磨き方なども、手工で授けられたものによつて、兒童銘々に手入をさせるがよい。切出小刀も刃がつきると、一向にうまく削れなくて、無理に削るとボキ〳〵墨心を折つてしまふから、相當によく切れる樣に手入をさせておかねばならぬ。又削方も墨心を細長く金釘の樣に露出させる兒童もあるが、之れは書方用のものとしてはよくない。書方では軸木の削面五分、墨心の露出二分位が適當である。それで段々書いて居ると、墨心がへつて行くが、それが一分五厘以下位になつたら、又軸木を削りて墨心を出す樣にさせる。而して墨心の尖端は餘り細く尖ら

すのは却つてよくない。少しく丸味ある所でとめるがよいのである。切出小刀の使ひ方と共に、鉛筆の削り方は適切に指導せねばならぬ。

(二)鉛筆削箱　鉛筆を手入すれば、軸木の削屑と墨心の粉末とが出る。それをやたらに室内に撒き散らすと不潔となる。殊に墨心の粉末は其の色黑くて物を汚し易い。それで是非共鉛筆削箱を備へねばならぬ。それには教室用として四寸四方深さ一寸位の大形の鉛筆削箱を數個備へつけておいて、磨滅するに從ひ順々に出て、其の削箱で鉛筆を削らせることもよいが、管理上の便利からいふと、兒童銘々に小形のもの一個宛を持たせる方がよいのである。銘々に持たすものには、坊間種々なるものが販賣されて居る樣であるけれども、何もさう高い金錢を拂つて買ふには及ばない。自分は礦物標本用の小形の箱、縱三寸幅二寸深八分位のものを買ひ入れ、それに八分角を八分の長さの立方體に切つて、緣の一邊へ打ちつけて與へ、尋常第三年から六年卒業迄使はしたこともある。それで澤山である。又尋常五六年には手工で木工を課するならば、其の兒童に之れを作らせることは、木工の教材としては頗る適



當であり、そしてそれを尋三の兒童に與へる樣にすれば、極めて安價に重寶なものが得られるのである。尙ほ四十人なり五十人なりの兒童のはき出す削屑は、集めればなかなかの分量となる。それを受け入れる爲めに、教室に備付の大きな屑箱一個を必要とする。それがないとつひ机のまはりへ屑を散らして、教室を汚がす恐れがある。

(三)下敷　鉛筆は毛筆やペンと異なり、極めて硬い墨心を隨分强い力で押しつけ、摩擦によつて粉末を紙面に移して字を書くのであり、そして紙は寧しろ軟かい質のものを用ひる方がよいのであるから、練習紙の下へ適當の下敷を置いて書かせないと、墨壓が紙背を凸起さして裏面の書寫に頗る不便を感ずるのである。そこで下敷としては如何なるものが適當であるかといふと、先づ其の厚さが相當に厚いものでなければならぬ。普通に帳簿の表紙に用ひる厚紙などは、先づ適當のものである。殊に美濃紙の厚紙は其の厚さが半紙のよりも一層厚くて適當であると考へる。只厚紙の缺點としては、矢張り墨壓を受けて凹凸を生じ、鉛筆の運びが滑かに行かぬことである。それで今日坊間に賣つて居るものには、ボール紙製のものもあり、又ブリキ製のものもあるが、何れも多少の缺點あるを免れない。殊にブリキは一旦折れるとなかなか元形には回らないので、甚だ使ひにくくなる。自分が現在使つて居るものは、バルカナルハーバーと稱する、木と綿とを原料として製したものださ

うであるが、其の質が極めて堅く、いくら鉛筆を使つても決して墨靨の痕がつかないので、裏面の書寫にも便利なのである。厚さも美濃紙の厚紙よりももつと厚く、そして其の質が非常に堅いものである。從つて使用期限は殆んど無限といつてよろしい。只菊判一枚の價が拾五錢もするので、其の安からざることが缺點である。然かし使用期限が無限であるといふ點から、又他の筆記帳使用の場合の下敷としても使はせるといふ點から考へると、結局經濟的の品物であるとも考へる。此の品は元來下敷用のものとして作つたものではなく、旅行用のカバンなどを作る材料として、大判形に作り出したものを小形に切つて使用したものであるから、其の質の堅牢なことと、大さを自由に切り得ることは言ふまでもないことである。

(四)消護謨　圖畫とは違つて、書方では成るべく消護謨を使はせたくはないのであるが、然かし絶對に使はせないといふ譯にもいかぬ。練習中は兎も角も、淸書といふ場合若し其の出來の甚だしく拙ないものがあつたり、又は誤まつて書いたものがあつた場合に、綺麗にそれを消し去つて、書き直させることは已むを得ないことである。消護謨の材料は熱帶地方に繁茂する一種の植物の幹に傷をつけ、恰かも內地の漆を搾り取ると同樣に、乳狀の汁を採集し、それを日光若くは熱に當てゝ、蒸發乾燥させた原料に、硫黃を混ぜて適當に熱するのである。さうするとそこに物理的化學的の著るしい變化を起して、其の性質を一層良好なものにするのである。そして護謨の彈力性が更に著しく增加するのである。此の硫黃を加へることの多少と、又其の溫度の加減によつて、其の硬さを異にするのである。軟性のものは少量の硫黃を含有するもので、例へば護謨管であるとか、自轉車自動車の輪であるとか、上靴であるとか、其の他種々なる玩弄物などを製するに用ひる。消護謨も此の軟性護謨の一種に屬するものである。硬性のものは、櫛であるとか、種々の板類及び電氣の絶緣器等を作るに用ひる。

軟性の護謨は、强い日光の下で、濕潤なる空氣の作用を受けると、其の害を受けること甚だしいもので、其の質が硬く變化するものであるから、軟性護謨はよく乾燥した、そして冷暗な室に保存して置かねばならぬ。消護謨も使用後は筆入の中へ入れて、よく蓋をしめて置く樣注意せねばならぬ。そして消護謨は其の質の極めて柔軟なものを選ばなければならぬ。なぜかといふと、消護謨が鉛筆の墨を消し去るといふ作用は、全然器械的なので、護謨が紙面を摩擦するに從ひ、護謨の實質が細片となつて紙上の墨粉を搦め取るのであるのに、若し護謨が硬いものであると、護謨の方が細片とはならず、却つて紙の纖維層を破りてそれを剝ぎ落すことになり、それが爲めに甚だしく紙質を損する恐れがあるからである。

ペン字と性格

筆蹟と品性との間に必須的の關係あることは、東洋傳來の信仰であるが、ペン書にも矢張それが言はれて居る。然かもきはどく說明されて居る。彼はペンの筆蹟觀察の方法に關して、種々なる見點を定めてある。一字一字に就いては、文字の骨と肉、形と勢、高さと長さ、直と斜、廣と狹などいふ點から調べて居り、又連續した書寫に就いては、行間の廣狹、直行と斜行、濁と濁、輕と重などの點から見て、筆者の性格を判斷しようとして居る。そして其の結論に、こんなことが言はれて居る。強い感情を有する時に書いた字は行が尻上りになるか、若くは正反對に尻下りになる。例へば非常に喜びの情を以つて居た時の字は尻上りになる。慾氣の強い人の字は殊にそれがひどい。それから心配事のある人や、失意の境遇にある人の字は、尻が下がる。又氣の轉々變り易い人の書は、行がうれ〳〵して行の中心が整つてない云々と。

第六章　ペン書方教授

ペンは鉛筆と共に硬筆の系統に屬して居る用具であるから、之れが書方教授上の諸問題は、之れを毛筆書方教授に比すれば、其の間に非常なる差異を有するけれども、之れを鉛筆書方教授に比すると、其の間甚だ相似た所が多いのである。然からばペン書の教授は特に研究する程のものがないかといふと決してさうではない。鉛筆とペンとの用具が互に相異なる所があるだけ、それだけ之れが取扱上の諸問題も亦相異なる所があるのである。左に順序を立てゝペン書方教授上の諸問題に就いて聊か卑見を述べよう。

第一節　教授を始める時期及び時數

ペン書方を何學年の何れの時期から課するがよいかは、實施上重要な問題である。若し强ひて之れを課しようといふならば、尋常一學年の鉛筆書方を課する時期、即ち第二學期の始めからでも課することが出來よう。毛筆は其の用具が極めて軟弱で、尋常一二年生の手腕では到底支配し切れるものではなく、其の用具も亦複雜多種で、管理上の困難を伴ふ爲に、到底此の時期の兒童には不適

當であるから、之れは尋常第三學年になつてから課するがよいことは既に述べた所である。然かるにペンの方は其の用具が金屬製の硬い性質の道具であるから、之れを毛筆に比べて其の支配し易い點に於いては、殆んど比較にはならぬのである。それであるから、强ひて課しようといふならば、尋常第一學年からでも課することが出來るのである。現に外國では、一年生にもペンで字を書くことはちやんと練習さして居るのである。

然かしながら、それが最も適當な方法であるかどうかを考へて見ると、吾人は尙ほ早きに失することを感ずるのである。なぜかといふと、ペンはインキを使ふものであつて、インキなるものは餘程注意して使はないと、直ぐに罎をひつくり返して、其所らあたりをめちや〳〵に汚損し易いことは、吾々日常の經驗に照して明かなることである。されば諸外國では、机の構造上此のインキ罎を入れる裝置は、最も適當に工夫されてあるので、机をどう搖り動かしても、インキ罎は決して倒れたり、又は逆さまになつたりしない樣に工夫されて居るのである。最も完備した裝置のものは、教室掃除の際、其の下を掃く爲めに、其の机を丸で横に倒してしまつても、インキ罎の口はちやんと上の方へ向いて居る樣にさへ工夫されて居るのである。所が吾が邦ではどうであるかといふと、机にインキスタンドを取附けてあるものといふのは、今日の所では甚だ少ないので、大方は坊間に賣つて居る一オンス入れの罎を買つて來て、其の儘机面の前方の一隅に置いて蓋を開いて使つて居るので、甚だ不安定なのである。使ふ本人は假りに十分用心した所で、其所を通る他の兒童が往々手を觸れたり、袖を引つかけたりして、わけもなくひつくりかへして、其所らあたりを臺無に汚ごすことは、決して珍らしくないのである。吾が校で新調の机は、正六分厚さの机面であるが、其の前面右の一隅に、一オンス入のインキ罎を入れる爲めに、其の罎の直徑より幾分大きな圓形をくり拔き、下部は眞鍮の板金で底を張つてある。そこへインキ罎を入れると、全長の終半分近くは入つて居るので、餘程安定にはなるが、それでも尋五以上でありながら隨分ひつくり返すのである。それであるから、管理上の點から考へて見て、ペンは到底初學年の兒童には使はせにくいものと謂はねばならぬのである。此の點から考へると、鉛筆は最も適當な用具であるから、尋常一二年では鉛筆書方單用を最も適當とすることは既に述べた所である。

更にペン書方を、尋常三年又は四年から課しようといふ考の人も少なくないのであるが、吾人は之れ亦尙早きに失すると考へるのである。なぜかといふと、ペンに於ける運筆の呼吸は、之れを毛筆に比べれば素より容易であるけれども、之れを鉛筆に比べてはなかなか困難なのである。即ちペンは極めて輕快な筆の運びを必要とするのであるが、輕快に筆を運ぶことは餘程手指の發達した後

でないと出來にくいのである。毛筆細字の運筆も亦輕快を尙ぶのであるが、其の成績が一般に甚だよくないのは、矢張此の輕快な運筆を能くしないからなので、毛筆はペンに比べて一層困難なのである。それで尋三四に於いて、大字で毛筆の用筆法をうんと練習さして、それが兎も角も一通り手に入つた後でなければ、細字は持出すべきものではないので、どうしても毛筆細字の練習は尋常五年からでなければならぬのである。之れと同樣の趣意を以つて、ペンの方も、鉛筆で相當に練習さして、硬筆の書方に餘程迄熟練してから、初めて課する樣にすることがよいのである。それで鉛筆書方の部で述べた樣に、尋常一二年では鉛筆書方のみを課し、尋常三年から毛筆大字を課するが、鉛筆も讀方に附帶させ繼續して之れを課し、兩系統を對立さして置いて、さて尋常五學年になつてから、鉛筆をやめてペン書方を課する樣にするがよいと考へるのである。

さうすると、鉛筆で書き熟れて居た調子が、直ちにペン書の方に働いて大にペンの練習を助けることになるし、又毛筆で練習さして居た大字の書方も、間接ながらペンの練習に寄與する關係ともなり、而已ならず、尋五から毛筆の方でも細字の練習を始めることにもなるから、細字として兩々相輔けるといふ關係が、其所に戊り立つて大に便宜となるのである。

次に教授時數はどうかといふ問題であるが、之れは前にも述べた如く、書方の爲めに毎週どれだけの時間數を配當し得るかによつて大に異なるのである。惟ふに何れの學校に於ても一週四時を配當し得る學校はあるまい。多くとも三時間が限度であらう。それでも三時間を配當し得るならば、其の中の一時間をペン書方の爲めに割いて、毛筆を二時間だけ課することにするのが最も適當であると考へる。我が校では尋五六は一週二時間しか配當されぬが、斯ういふ事情であつたら、其の中一時間なり半時間なりをペンに割くことは、到底出來ぬのである。毛筆は之れを課する以上、一週二時間は練習させるでなければ、迚も一通りの成績さへ擧げられぬのである。さうするとペンの爲めには割くべき時間がないのであるから、已むを得ず、ペンは矢張り讀方に附帶さして、尋三四に於いて鉛筆を讀方に附帶して練習させたと、大體に於いて同樣の方法を以つて練習させる樣に立案しなければならぬのである。しかし、幾分異なる所もなければならぬ。其のことに就いては更に次節に於いて說明することにする。

第二節　讀方に附帶した取扱

尋常第五學年からペン書方を課するとして、之れが爲め特別に時間を割くことが出來ない場合、既に述べた如く大體に於いては、尋常第三四學年に於ける鉛筆書方と同樣に、之れを讀方に附帶さ

せ、讀方の仕事の一部即ち文字の取扱を少しく擴張して、正書練習の方法を立てることは、前學年に於ける鉛筆書方の後を承けて、硬筆書方の系統を樹立させる上からも最も自然的の聯絡を保つことゝなり、又讀方教授其者の爲めにも、極めて適切な仕事を課することゝなる。即ち讀方で授けた新字や、其の新字を以つて組立てた語句を、正しく眞面目に、そして具案的の練習法を取ることであるから、文字の書方を上達させるだけではなく、一般に最も不成績とされて居る文字の記憶を確かにするの効をも同時に收め得ることは、余輩の經驗上之れを確認して居るのである。

さてペン書方を讀方に附帶さして之れを課することは、時間の都合上已むを得ざる實施の方法なのであつて、尋三四に於いては鉛筆を以つて書かして居たものを只ペンに代へただけのものと考へるのは未だよくない。假令ペンは鉛筆と共に硬筆に屬して居るとはいつても、其の用具が既に異なつて居り、從つて用筆の方法運筆の調子が餘程異なる所があるので、矢張ペン書にはペンに固有の教授事項がなければならぬのである。この事は實際に其の事に從へば、誰人も必らず衝き當る問題なので、それは丁度毛筆書方には、毛筆に固有の教授事項があり、鉛筆書方には鉛筆に固有の教授事項があるのと同樣なのである。鉛筆や毛筆は特別の時間を設けて取扱ふのであるから、隨分秩序正しく仕事を運んで行き得るので、全く遺漏なきを期することが出來るが、ペン書はそれとは異なつて、最初から讀本に附帶して取扱ふことになつて居り、且つは前學年迄は鉛筆や毛筆で相當に熟れて居るといふ所から、動もするとペンの方は甚だ不用意に取扱を始め易い弊があるのである。然かし假令讀本に附帶してやるとはいつても、それは方法上の便宜に基づいたもので、ペン書にはペン書固有の教授系統があるのであるから、嚴密に之れを踐んで實行する樣に、周到なる用意を加へることが必要なのである。

然からばペン書方教授の研究問題はどんなことであるかといふと、其の詳細は次節以下に順次に詳述するとして、茲には單に其の綱目だけを列擧して見ようにに、先づ(一)ペン書に必要なる用具の使用法を授けること、(二)ペン書に適當なる姿勢、腕法、執筆の方法を授けること、(三)ペン書に特有の運筆の要領を授けること、(四)適當なる教材を選擇し排列すること、(五)ペン書に最も適當な練習形式を組立てること、(六)文字の整形法を授けること、(七)毎時間に於ける實際取扱の方法を定めること、(八)ペン書に必要なる用具の製法及び選定に關する諸項である。以下順次に之れを說明しよう。

第三節　用具使用法の教授

ペン書を有効に練習させようとするには、先づ其の用具に關して相當の知識を有たしめなければ

ならぬ。何ぜかといふと、用具と其の手蹟の表現とは、密接不離の關係あるもので、用具に關して正當に領解することは、其の用具を最も正當に働かす所以であり、用具の正當なる働きは、其の筆者の書寫能力を遺憾なく發揮させる所以であるからである。恰も彼の手工に於ける材料や工具に關する知識が、製作に及ぼす關係の極めて深いものであるから、手工教授に於いては、其の材料と工具に關しては、必ず明瞭な理解を與へることを努めると全く同樣である。

さて兒童にペン書用具の使用法を適當に授けようといふには、教師は其の用具の製法に關し十分なる知識を有たねばならぬのであるが、それは便宜上第八節に於いて特に說明するとして、玆には差當り兒童に領解させねばならぬ必要のある事柄だけに就いて、左に項を分けて說明しよう。

第一　ペン先及びペン軸

ペン先及びペン軸の選定に關しては、其の製法と共に第八節に於いて說明するが、さて此の品が適當として選定され、各兒に持たしめたからには、先づ何よりも先きに其の各部の名稱を授けねばならぬ。この名稱を知ることは、爾後教師が說明を與へるにも、兒童が其の說明を聽取するにも、極めて便利なことである。今ペンについて普通に唱へて居る名稱を圖示すれば次の通りである。

ペン先は金屬を以つて作つたもので、腹の部にふくらみを與へ、且つ溝をつけて作つてある。このふくらみの個所は、其所にインキを蓄へて置く部分で、恰も毛筆の腹部に墨水を貯へて置くと同樣なのである。溝は腹部の中央と左右のニップの間にも用意されて居るが、之れはペンに彈力を與へ、且つインキの流出を滑らかにさせる爲めである。それでペンが字を書くに最も直接に働く部分は頭であつて、此の部分が紙面に接すると、腹部から鑽溝を通じて頭に貫流して居るインキが、頭の幅だけに紙面に移つて、其所に點畫を現はすのである。それであるから、左右のニップ間にある溝の接觸斷面に錆を生じ、或は久しき使用の結果、左右のニップが幾分にても左右に開いた時は、ペンの頭が必ず左右に廣がつて、紙に接する場面が廣くなり、從つて點畫の幅が大となるのである。このことは新しきペンを以つて數時間書寫を連續して見ると、始めの部分と終りの部分とで、點畫の幅が異なり、爲めに全體としての調子が整はないものとなることは、日常吾々の親しく經驗して

居る通りである。而已ならず、頭が廣くなればインキの流出も其の分量を增す所から、腹部の貯へも忽ちにして盡き、度々ペン先をインキ罎中に浸すの手數が加はるのである。

斯くの如くペン先には錆を生ずることが最も有害であるから、新に作つたものには錆止めとして、ワニスを塗つてある。此のワニスは脂肪質のものであるから、新らしいペン先を其の儘インキ罎の中に浸すと、インキが珠狀をなして腹部にかたまり、頭部までは浸さず、それで字を書いても、インキが紙面に移らぬのである。それであるから、新らしいペン先を使ふときは、濕布で腹面を一度拭き取るか、又は舌頭を以つて濕を與へてからインキをつけるがよいし、又使用後は必らず之れを拭つて置く樣に注意せねばならぬ。若しインキの殘滓の附着したまゝ放擲して置くと、忽ち錆を生じてペンの壽命を短かくするのである。

第二　インキの附け方

インキの附け方も適當でなければならぬ。若し腹部の鑽溝にも達せず、左右ニップの半分位迄しか附けなくて字を書くと、書けないことはないけれども、インキの流れがわるくて、潤澤な書寫が出來ず、且つインキをつけかへる手數のみ增して、時間の不經濟となること甚だしいのである。之れに反して、腹を越して腰のあたりまでも罎の中まで浸すと、インキが腹部の凹陷部に充滿して、其の流出が過度となるのみか、僅か許りの書寫顫動によつても、インキの水滴が紙面に落下して、思はぬ失敗を來すことが往々にしてあるのである。それで最も適當なる附け方は、腹部の鑽溝の中程か、若しくは其の鑽溝が辛うじて匿れる位の部分まで浸すがよいのである。さうすると、インキの流出も適當で、時間も可也長く書け、其の上インキの水滴が落下するなどの心配はないのである。

第三　ペンの使ひ方

ペンの使ひ方として最も大切なことは、左右のニップを聊かの偏依なく、全く均等に輕く紙面に接しさせることである。それが幾分にても右或は左に偏すると、其の紙面に接した部分のみ働くことになつて、點畫の現はれが醜くなるのみならず、一種不愉快な軌(キシ)りの音を發し、紙を傷つけ、インキを飛ばしたりするし、又一方のニップのみを強く使ふのであるから、其の部の磨滅が早く、ペンの壽命を縮める原因ともなるのである。

然かるにペンの尖頭は如何にも細小な部分であり、且つインキをつけると一樣に黑色となつてしまふので、肉眼を以つては、左右のニップが果して平分に紙面に接して居るかどうかといふことは、見別け難いのであるが、しかし此のことは肉眼を以つて見別ける必要はない。若し偏依した場合には、必ず不快な軌り音を生ずるのであるから、其の音に注意すれば直ちに之れを感知することが出

來るし、又點畫の現はれに注意すれば之れを知ることが出來る。偏依した時の點畫の現はれは、平分に接したときの現はれに比して、廣い狹いの區別が段々逆になつて來るし、又ペンの運びが甚だ澁晦となるのである。

それで兒童にこのことを領解させる爲めには、ペン先を色々の恰好にして紙面に接しさせ、筆を運ばして經驗させるがよい。即ち著るしく左に偏せしめ、それから段々と右へ傾けて來ると、その間に一旦は必らず平分の階級があり、それが左右に偏した場合との軌りの音、運筆の調子、點畫の現はれの區別が自から明瞭に認識することが出來るのである。

尙ほペン先各部の名稱から、インキの附け方及びペンの使ひ方に至るまで、之れを實際に取扱ふ場合に於いては、實物によつて說明すること固より必要ではあるけれども、如何せんペンは細小な道具で、四五間隔つた位置からは到底之れを觀察することが出來ないから、圖解を以つて之れを補ふこと當然ではあるが、其の上に、ブリキを以つて一尺五寸程の大きな模型を作り、之れによつて說明することが最も便利である。

第四　インキの使ひ方

インキは先にも述べた如く、動もすればひつくり返し易く、其所らあたりを汚し易い材料であるから、之れが使用に十分注意させねばならぬ。一體インキ罎を使はせる以上、少くとも其の机面の右上の一隅に罎の半高以上を嵌め込むべき設備を作らねばならぬのであるが、舊來の机にして此の設備なき場合には、其の置き場所は餘り右端に失せず、それかといつて中央では使ひにくいから、中央と右端との中程位に置かすがよい。それから蓋を取り去る場合、コルクが往々口に固着して取りにくい、無理に拔き取らうとする時、度を失してひつくり返すことが往々にしてある。豫じめ注意を與へねばならぬ。又罎內インキの分量は、何時も前述の如く、ペンの腹部鑽溝の全部を浸すに、十分なる高さに保持されねばならぬ。若しそれ以下に減つた場合には、勢ひペンの頭を罎の底に衝きあてねばならなくなり、さうなるとペン頭を毀傷するだけではない、底に溜まつて居る滓や塵埃が頭に附着して、忽ち書寫作用を害することになる。そこで罎內には常に一定の分量を保たせる爲めに、インキを補給する用意が必要である。即ち大形のインキ罎を用意して置いて、不足したものに絕えず足してやらねばならず、そしてペンを罎中へ浸すときは、決して底を衝かない樣にといふ注意を拂はせ、遂にはそれが習慣となる樣に訓練しなければならぬのである。

それから腐敗したインキは殆んど書寫に堪へないものであるから、之れを鑑別する知識を與へねばならぬ。インキが腐ると、第一に底面にどろどろした滓が溜まつて來るし、第二に罎を一方に傾

けて、インキの接觸して居た内面を透視すると、其の面に何等の色を留めず、透明なものとなつてしまふ。それから第三にそれで字を書いても、其のインキ固有の墨色がなくなるのみか、往々にしてにじみが出來て、甚だ不快な墨色を呈する樣になるのである。斯うなつたら、其の全部を棄て、罎を水洗してよく内部を拭き取つて、新らしいインキを入れてやる樣にせねばならぬ。

又假令腐敗しないインキでも、度々ペン先を浸すと、其のペンには必らず若干の滓を殘し、それが度重なるに從つて、インキの流出を妨げ、頭の働きを妨害することになるから、時々綺麗に之を拭き取る注意を與へねばならぬのである。

第五　紙の使ひ方

ペンで横文字を書く人が、往々にして用紙の底邊を、机邊に對して約十三度位傾けて書いて居るのを見て、ペンはあの樣にして使ふべきものだと速斷し、ペン書は紙を傾けて使ふがよいといふ人もあり、又之れを實行して居る人もあるが、之れは少しく事情を考へねばならぬ問題である。ペンの委勢腕法執筆は書法の部に於いて既に述べたことであるが、腕法は大體提腕式にすべきである。さて提腕式にすると、下膊の肉塊を支點とし手指を動かすのであるから、若し手指を自然に動かすならば、其の肉塊を支點とし、手の長さを半徑として、圓形に運動するのである。それであるから、横文字の場合には、其の一行が此の圓形運動中の或一區劃に該當することになる。尤も圓形運動中の一區劃は弧線狀であるし、横文字の一行は直線ではあるが、此の弧線運動を直線形にかへるのは、支點たる肉塊の僅か許りの加減で、直ちに調節することが出來るので、極めて易々たることである。然かるに用紙を机邊と平行の位置に置いて書寫する場合の運動關係を吟味して見ると、直線を保つて横に書寫しようとするには、一字を運ぶ毎に、肉塊支點の位置を一々變へて行かねばならぬので、此の調節は、之れを前者に比して稍困難なのであるから、横文字書寫の場合には、比較的容易なる方法を採つて、紙を傾けて置いて書くのである。

さて邦文の書寫に就いて考へて見ると、今日では邦文かとても、横書法も隨分多く採用されて居るのであるから、其の横書の場合には横文字同樣に用紙を傾けて書かすのが便所ではあるけれども、邦文は尙ほ縱書を以つて本體として居るのであるから、其の縱書としての場合を考へて見ると、用紙を傾けて置くことは言ふまでもなく不合理なのである。何となれば、縱書の場合は、嚴密に言へば一字毎に肉塊支點の位置を縱に移して行かねばならぬので、縱垂直の運動によつて書いて行くべきものなのである。實際吾々が縱に連續して書寫する場合、四五字を書く間は肉塊支點を固定さしておいて、執筆した指の屈伸によつて調節しつゝ進めて居るのではあるが、眞意義をいへば實に

前述の通りなのである。其の方法は毛筆で中字即ち一寸四方位の字を提腕で縱に書く場合には、ちやんと行はれるのである。即ち一字を書く毎に紙を上げるか、然からざれば肉塊支點を下げて書寫を進めるのである。即ち邦文のペン書は紙を傾けることなく、机邊と並行させて置いて書かすことにせねばならぬのである。

所が茲に問題がある。總じて細字の書寫は、用具が鉛筆であらうが、ペンであらうが、將又毛筆であらうが、吾人の組立てゝ居る練習形式は、左半分は横書の練習法を取らせ、右半分は縱書の練習法を取らすことにしてある。さうすると、横書の場合には用紙を傾けて書かせ、縱書の場合には机邊と並行の位置に置いて書かすといふ、兩樣の方法を併せ用ひねばならぬことになるのであるが、然かも前述の理論は横書に最も適當なる方法と、縱書に最も適當なる方法とを、各別々に考へて述べたので大體からいへば、兩者の間にさう大した差別を有するのではない。所で紙を眞直に置いて横書にするのは、さう困難ではないが、紙を傾けて置いて縱書にすることは可也書きにくいのである。そして一冊の練習帖によつて、横書と縱書とを相次いで練習させる場合、始めは紙を傾け、次には紙を眞直にして練習させるなど、態々複雜な約束を設けることは、却つて不得策なので、寧しろ何れかの一方に定めて躾けるが得策である。さうなると、前述の趣意から考へて縱書本位の、邦文書寫に於いては、横縱何れの場合にも、總べて紙は眞直に置かして書かす樣に習慣附けるのがよいことになる。吾人は正に之れに從つて居るのである。

、次に用紙を置く位置は、正面より少しく右方に置いて、右の眼の下に文字が出來て行く樣にさせるがよいのである。甚だしく右方に偏すると斜視の弊に陷ゐり易い。

第六　吸取紙の使ひ方

ペン書の用紙は、假令インキの吸取も良好なるものを選んだにせよ、毛筆で日本紙に書いたものに比べると、なかなか吸取が遲くて、若しうつかり手や物と觸れると、忽ちインキが横走りして紙面を汚し易いものである。同じことにも、横書ならば書き終つた行は、上の方にあつて手を觸れる心配がないから、最後の行の最終四五の字だけに吸取紙を當てればよいのであるが、右起りの縱書でなると、一行毎に最後の四五字位は吸取紙を當てねばならぬ。かういふ事情であるから、ペン書には吸取紙は離すべからざる必要品である。所が吸取紙は極めて柔かな漉方の紙であるから、保存上周到な注意が必要であるのみならず、其の使用法に關しても、適當の指導を與へねばならぬ。若し無指導に使はしたとしたら、兒童の多くは吸取紙の一隅を摘んで、食指の指腹で强く押しつけたり、又は吸取紙を書寫物の上に載せて置いて、掌で上からバタバタ　打つたりするのである。總べて吸取紙は漉目の柔かいので、好くインキを吸取るものであるのに、不注意に指腹で强

く壓したり、掌で打つたりすると、段々質が硬くなつて、吸取が不完全になる。それでも構はずに使つて居ると、終にはインキを吸取らなくて、却つて左右に散らして、書寫物を汚してしまふことになる。それであるから、吸取紙の使ひ方は、之れを書寫物の上に輕く載せ、一隅は必ず左手の指腹で押へて置いて移動を防ぎ、右手の無名手と小指との指背で輕く摩擦して吸取らすか、若くは左の指で吸取紙を輕く摘んで紙上に載せ、小指の指腹で一個所を押へて移動を防ぎ、拇指の側面か食指中指の指腹で輕くこすつて吸取らす方法を授けねばならぬ。して其の吸取紙の大さも、練習帖内に挿み込めば丁度よく入る位のものにして與へるがよい。餘り大き過ぎると緣に裂目がつき易いし、餘り小さ過ぎると使用上不便である。

ペン拭には海綿に水を含ましたものを使ふものもあり、羅紗の布片で拭くものもあり、鹿のなめし革を使ふものもあり、單に木綿や金巾の小さな布片を用ひるものもある。何れにてもよろしい。又其の使ひ方も別に說明すべき程のこともないが、只ペンに並行して縱に拭き取らす樣にすることが必要な注意である。此の際よく布片の纖維がペンの鑽溝に引つ懸つて居て、次回にペンを使ふ場合に甚だしくインキの流出作用を妨げることがあるから、拭取る際よく其れを吟味して置くべきことを注意せねばならぬ。

第四節　運筆の基本教授

吾人曩に尋常第一學年に於いて第二學期から特設の鉛筆書方を始めるに方りて、最初から片假名文字を書かすことはしなくて、先づ之れが基本練習として縱横右斜左斜の四畫の、筆意のない單なる方向だけの練習を課し、次いで筆意ある同上の運筆を練習させ、それから片假名文字の自由なる書寫をなさしめ、斯くして一通り基本點畫や片假名の書寫を練習さしてから、始めて練習形式により正式の練習に導き入れることの必要なることを、鉛筆書方の部（第五章第五節）に於いて既に述べた所である。又尋常第三學年に至つて始めて毛筆書方を課する場合にも、最初から現に使用して居る手本の、比較的複雜な字を書かせるのは方法上得策でない、此の場合に於いても亦相當に基本練習の階級を設け、一通り毛筆の運筆に就いての理解と習得とを與へてから、手本文字練習に移る樣にすべきことも、吾人は毛筆書方教授の爲めには常に之れを主張して居るのである。

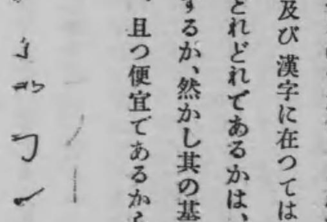
さて尋常第五學年になつて、ペン書方を始めるに方つては、此の基本教授の問題は之れを如何にすべきか、實際上一考を要する問題である。鳥渡考へると、字を書くことは既に尋常第一學年から第四學年に至るまで、永年の間鉛筆に毛筆に、それぞれ練習さして來たので、兒童は餘程まで之れ

を能くして居るのであるから、ペン書を始めるからとて、之れが基本教授などは全然省略してもよろしいかのごとく感ぜられぬでもないが、然かし一層深く考へて見ると、吾人は矢張其の必要を感ずるのである。否それをやることが、其の技能の習得上大に經濟的な方法であると考へるのである。殊に前既に述べた如く、毛筆と鉛筆とペンとは、等しく之れ字を書く用具として採用されて居るものではあるが、其の材料及び構造が甚だ相異なつて居る所から、之れが用筆法の要領も亦大に異なる所あるので、其の間互に相助け相依る所ないではないけれども、何れも特別に修練する必要があるのである。それであるから、鉛筆並に毛筆が、假名や漢字の性質上、基本練習を特設するの必要と價値がある以上、假令ペンは進んだ學年になつてから始めるものではあつても、それ等と全く同樣に、矢張一通りは確實に基本教授を與へて、ペンはこんな風に使ふものである、斯うして書くべきものであるといふことの、基礎的理解と收得とをさしてから、適當な形式によつて數多くの字に當らせて、それを練習させる樣に仕組むことが、其の熟練を一層高めさせることになるのである。左に此の基本教授の仕組に就いて、順を追うて說明しよう。

第一　基本畫及び基本文字

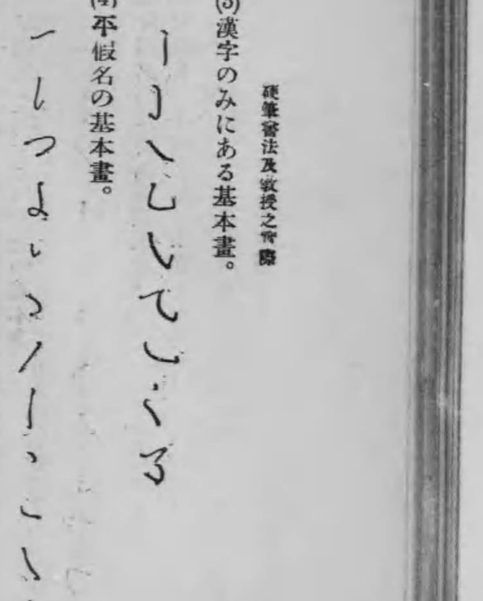
(一)基本畫　基本教授の仕組を考へるに方つては、片假名、平假名及び漢字の基本畫及び基本文字を吟味することは、方法上極めて必要なことである。元來平假名は其の字體が漢字の草書かち發生して居る字であり、漢字は楷書と草書とで甚だしく點畫の形狀と運筆とを異にして居るのであるから、とても同一には考へられぬので、先づ平假名は平假名だけに特別に其の基本畫を吟味しなければならぬのである。然かるに片假名は元來楷書の漢字の或一部分を取つて出來た字であるから、點畫の形も運筆の要領も全く漢字の楷書と同一なのである。それであるから、之れは兩者共通に吟味することが出來るのである。そこで片假名及び漢字に在つては、どれどれを以つて基本畫とするか、又平假名の基本畫と見做すべきものはどれどれであるかは、第三章第四節に於いて既に詳細に述べたことであるから、茲には之れを省略するが、然かし其の基本畫の種類を茲に列擧することは、基本教授の方法を組織する上に必要であり、且つ便宜であるから、左に再び之れを擧示しよう。

(1)片假名と漢字とに共通の基本畫。



(2)片假名のみにある基本畫。

(3)漢字のみにある基本畫。

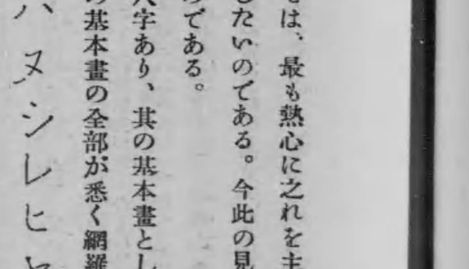


(4)平假名の基本畫。

以上は片假名、漢字並に平假名の基本畫の全部である。今ペンの運筆法を授けるに方つて、之れだけの點畫に就いて其の運筆の要領を授けることは、方法上の第一歩ではあるが、之れの運筆法さへ授ければ、五十近くの假名なり、千數百の漢字なりを、直ちに之れを能くすることが出來るかといふとさうではない。

(二)基本文字　以上は單なる基本畫として之れを擧げたのみで、それが或文字の部分となつて用ひられ、其の文字の一部分として使はれた場合に、そこに新たに生命を生ずるのであるから、第二歩の仕組としては、それが文字の一部として使はれた場合の練習を與へることは、矢張り必要であり、それが書寫作用としては寧しろ一層必要なのである。そこで之れ等の點畫を要素として居る文字を吟味して、其の字の書方を練習させることが、書寫能力の基礎を作るとしては極めて有効なので、此の案は吾人毛筆大字の教授に於いては、最も熱心に之れを主張して居るのであるが、ペンの書方に於いても、毛筆同樣に之れを高唱したいのである。今此の見地から片假名、平假名及び漢字の基本文字を吟味して見ると次の通りなのである。

(1)片假名　片假名は全部で四十八字あり、其の基本畫として數ふべきものは前述の通り十五あるが、次の十七字で、其の基本畫の全部が悉く網羅されるのである。



今尋常第五學年生に、ペンで片假名の書方を練習させるに方りては、尋常第一學年でやつた樣に、其の四十八字を片端から一字一字に練習させるなどの必要はない。此の十七字だけを確實に練習させるならば、それで片假名の運筆は其の全部を習得することが出來るのである。殊に其の整形法の如きは、尋一から尋四までの間に、鉛筆及び毛筆で授け、且つ練習さしたものと何等の變りはないのであるから、此の場合特別に其の全部を取扱ふ必要はないのである。それで主に運筆上の要領を基本的に習得させ、形の整へ方は此の代表文字に就いて一通り說き示せばそれでよいのである。

(2)平假名　平假名は、全部で是も四十八字あるが、片假名と同樣の趣意で、基本畫としては十七を數へ、それが次の十七字中に悉く含まれて居るのである。

にしかなふやさくへのせそこよりちぬる

これだけの平假名さへ練習させれば、全部を代表させることが出來るのである。整形法に關しても全く片假名と同樣である。

(3)漢　字　漢字は今日小學校で用ひるものは、千三百五十九字を以つて數へられて居て、片假名や平假名に比べては頗る多數に上つては居るけれども、之れが基本畫を吟味して見ると、ペン書のものとしては既に述べた如く、僅かに二十二に過ぎないので、それだけの基本畫の運筆を練習させる文字としては吾人は左の十七を擧げたいのである。

十 人 六 火 江 小 守 力 衣 目 子 北 戈 九 心 女 部

即ちこれだけの文字の中に、二十二の基本畫が悉く含まれて居るので、此の字の書方をさへ習得すれば、千數百の漢字は悉く其の運筆を能くするといふわけなのである。それかといつてペン書は此の十七字の練習に止めてよい、他の字は一つも書かせるには及ばないなんどといふわけではないが、凡そペンの運筆の基礎を作るとしてはこれで澤山だといふので、一般の寫寫に熟れさせるとしては、無論此の上に讀本で授けた新字や語句、其の他特別に用意した材料を多數に練習させればならぬのである。それは更に後節に於いて詳述する。

第二　臂の練習

ペン書方の基本教授は、何を目的として取扱ふものであるか、其の要旨とする所如何といふに、それはペンの使ひ方に關する基礎的の知識と技能とを授けるにあるのである。即ち第三章第三節の末節に於いて既に說明した通り、(一)入筆の角度は、作るべき點畫の方向に近い方角から入れること、(二)筆心の通路は直線的に運ぶべきこと、(三)運筆の呼吸は最も輕快なるべく、決して鈍重であつてはならぬことの三點である。即ちこのことに關し、說明によつて先づ知識としての理解を與へ、次いで前項に揭げた基本畫及び基本文字によつて、實際の練習をさせて、兎も角も技能の基本練習をさせることにあるのである。而して知識としての理解をさせるには、前學年迄に授けた鉛筆や毛筆のそれと比較して說示することが、方法上最も適切なのであり、之れが練習も亦適當な方法によらねばならぬのであるが、其のことは次に之れを述べることにしよう。

ペンの用筆法教授の要點として、三個條を數へた中の前二個條、即ち入筆の角度と筆心の通路とは說明と圖解とによつて明らかに之れを領解させ得ることであるが、第三者の運筆の輕快であるべきことは、言語の說明を以つては到底領解させ難いことであり、況して圖解を以つて示すことは全く不可能のことである。それでこれはどうしても教師の適切な示範によつて敎へ込むより外に方法

がないのである。而して示範は教師が單に之れを書いて見せるといふだけではなく、之れを書く時の呼吸を、それに適當した呼唱によつて示すことが最も有効なのである。何ぜかといふと、ペンは書寫の速度の速きを尙ぶもので、其の速度はそれに相當した合圖によつて之れを示すと、兒童は之れを耳にし、それに應じて手指を動かして、それに一致させることによつて體得するからである。即ち例へば同一の方向に向け、反覆して五本の線を引く場合、教師は之れを引く速さを、一、二、三、四、五と呼唱し、其れに合せて一線宛を引いて、其の速さと之れが書振の模範を示し、それに合せて兒童各自にも同樣に線を引かすのである。斯くしてペン書に最も適當した速度呼吸を體得させるので、換言すればペン書に適當する樣に臂をならすのである。

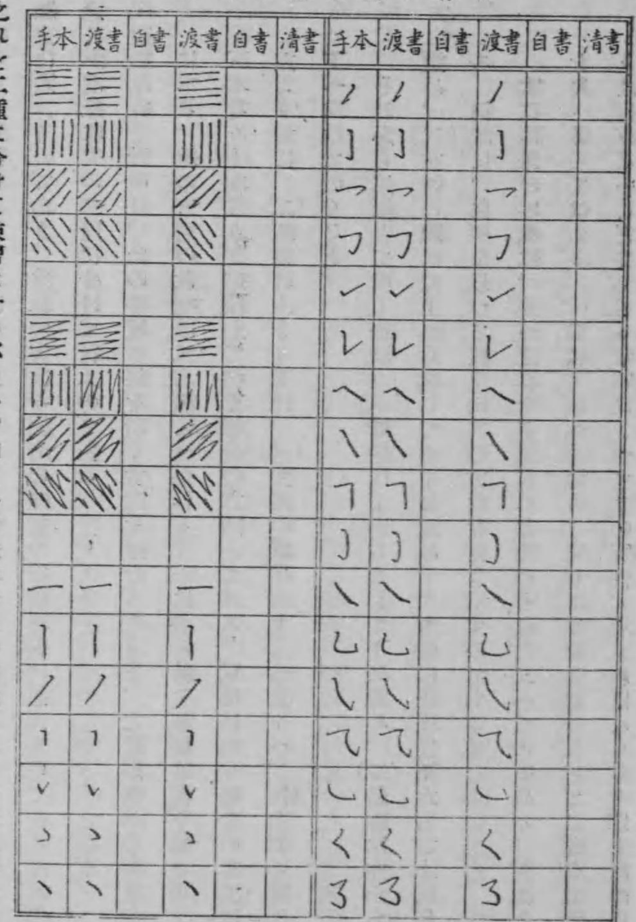
一體此の臂をならすことは、毛筆の書方に於いても極めて必要を感ずることで、吾人は毛筆大字の書方の基本練習として、其れの有効なることは常に主張して居る所であるが、ペンの書方にありても、毛筆と同樣に矢張り其れの必要と價値とを認めるのである。このことは等しくペンを使つて居る横文字の練習にあつても、甚だ重要視されて居るのである。尤も横文字の方は點畫は、吾が草書や平假名の點畫によく似通つた性質のものであつて、楷書や片假名の點畫とは甚だ相異なつて居るのであるけれども、其れの書方に於いては、臂を動かす速さが、餘程重大な條件として考へられて居るので、西洋人が英習字を敎へる場合には、臂の練習として其の右臂を極めて速く動かす練習を課するである。其の法は先づ正しくペンを執り、腕法を構へさせる、其の腕法は提腕式のものであるから、右前臂の下面を机上に載せ、手首の部と肘に近き肉塊の部とで支へさせるのであるが、手首の方はほんの輕く机面に觸れさせるだけで、肉塊部を支點とし、右臂全部を極めて迅速に前後に動かしつゝ、ペン先で小さな圓を空書させるのである。横文字の書方では、決して指だけを屈伸させるのではない、それで敎師は其の速さをワン　ツウ　スリー……ナイン　テンと呼唱をつけ、兒童は其れに合せて一呼唱に小圓一個宛を書くので、次第に熟練するに從つて呼唱の速さを高めるのであるが、結局どれ位の速さ迄進むべきものと考へられて居るかといふと、一分間に先づ三百を書き得る樣にならなければ、臂の動きが十分であるといはれぬとして居る。最も之れは十分發達した大人に就いての話で、小學や中學の程度のことではないが、然かし小學でも中學でも、其の程度相應の速さの臂の練習は課せられて居るのである。

所が吾が日本人の英習字には、此の速度を高める意味の臂の練習は一向考へられず、單に線の方向や位置の練習にのみ止まつて居るので、肝腎な臂の動きの根本的修練が缺けて居るから、どうしても達者な横文字は書き得ないのである。西洋人の書いた横文字と、日本人の書いた横文字とを比

べて見ると、西洋人の方はどこかに筆の達者な所があり、其の書風がちやんと整つて居て、日本人の書いたものに比べては、どこか品位もあり熟練も見えて居る。之れは他にもいろいろ原因があらうが、此の嚴格な素養の有無が與つて力あるものといはなければならないのである。

そこで此の横文字の例を吾が漢字や假名の書方に當てはめて考へて見るのに、横文字は線の方向が殆んど一方にきまつて居るので、立體風の文字ならば、水平線に對し何れの字も其の主線が皆直角に近い方向に引かれるのであり、斜體風の文字ならば、それが六十度に交叉する樣に書くべきものとなつて居るのである。それであるから、横文字の方では、前述の如く小さな圓形を其の主線の方向に迅速に書くことの練習を與へれば、それが直接に本字の書寫に役立つといふ關係であるが、吾が漢字や假名は、之れを組立てゝ居る點畫の方向は、横文字の樣にしかく單方的ではない、頗る多方的で、一字一字に勝手な方向を取つて居るのである。然かし之れを概括して見ると、大體は米字形に八方の方向を有して居るのである。そこで横文字の例の如く、圓を書くこと一つでは、この八方向の線の引き方を各適切に練習させることには餘り緣遠いことであるから、それを分解して、少くとも次に掲げる如くに、横、縱、左斜、右斜の四方向の線を引くことを、特別に仕組む必要を感ずるのである。そして其の各の線について、臂を動かす速さを段々に高めて練習させる樣に、仕事を進めて行きたいのである。此の趣意に基づいて、左に一層詳かに之れが取扱の方法を述べて見よう。

習練の畫本基ひ及線



この縱、横、右斜、左斜の四線も之れを二種に分けて練習させるがよい。即ち一は一本一本の直線として、一は連續した曲線とし

てゞある。前に掲げた練習形式の初頭に示したものがそれであるが、之れ直線の方は漢字や片假名の點畫に通ふものであり、曲線の方は平假名の點畫や行書草書に通ふものであるからである。而して之れが取扱は次の二段に分けて行ふのである。

(1)說明示範　說明は、此の各種の線を引く方向を授けることと、之れが運筆の呼吸を授けることにある。線の方向の教授は又二種に分かれる。一は各の線を單獨に引く場合の方向と、一は五本なり十本なりを連續して引く場合の方向とである。單獨に引く場合の方向は、(一)横線は左より右に、(二)縱線は上より下に、(三)左斜の線は右上から左下へ、(四)右斜の線は左上から右下へ向けて引くこと。

それから連續して引く線は、(一)横線は上から起して下に進め、(二)縱線は左から起して右に進め、(三)左斜の線は左上から起して右下に進め、(四)右斜の線は左下から右上に進めるのである。同時に、白墨を以つて板上に其の方向を書き示すのである。

次に運筆の呼吸は、先づ之れを毛筆及び鉛筆のそれに比べての差異を、言葉を以つて說明を與へるのではあるが、前にも述べた通り、之れは單なる說明だけでは適切に領解させることは出來ない。どうしても示範によつて其の實例を示さねばならぬ。即ち教師は白墨を以つて板上に其の呼吸を書き表はして見せなければならぬのである。さて其の方法も、最初からペンのものだけを示すのではない。毛筆のものと比較し、毛筆はこんな風に運ぶが、ペンでは斯うと兩者を比べて書き示し、又鉛筆のものとも比較して書き示すのである。尙ほ始めはペンの運筆呼吸も、比較的ゆつくりしたもので書き示すをよしとするが、段々に其の呼吸を速め、それを適切な合圖によつて。其の輕快な運筆の模範を示すのである。そして其の數は一線を十回宛繰返すのが最も都合がよいと考へる。

此の完全な運筆呼吸によつて模範を示す場合、兒童をしてそれに倣つて空書をさせて、臂の練習をさせるがよい。此の場合兒童にも、教師の合圖に合して一、二、三、四……の呼唱を小さな聲で唱へさせつゝ、空書模倣をさせるがよいのである。

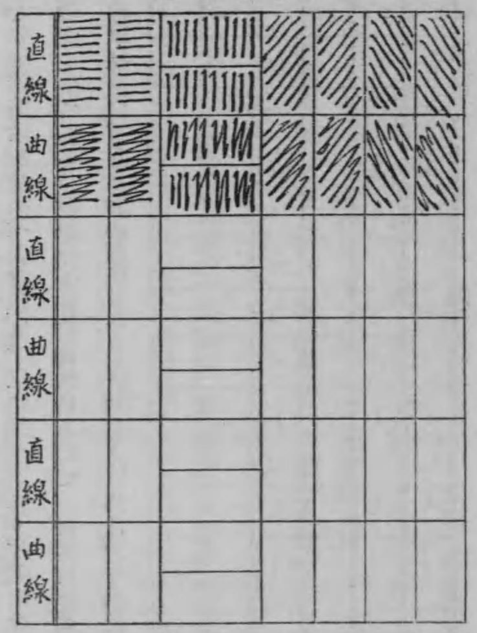
(2)練習批正　空書模倣によつて一通りの領解を與へた後には、引續き實際にペンを執つて之れを書く練習をさせ、それを批正する仕事に移るのであるが、此の場合第一に姿勢を正し、腕法を整へ、且つ執筆を適當ならしむることが必要なのである。殊にペンの執筆は、毛筆に比べては其の形を異にし、鉛筆に比べては把力を異にするものであるから、一人一人に其の執り方を檢閲して、必ず適法のものたらしめ、そして其の執筆法を嚴守すべきことを諭さねば

ならぬ。

第二に練習の第一歩として、形式による練習をさせるので、前掲練習形式に示した如く、手本と渡書自書の各欄とを具へた練習紙を與へ、各自に周到なる注意の下に、同一の線を繰返して、左起横書の練習をさせるのである。然かし此の練習形式による練習は、運筆の呼吸を覺えさせるよりは、寧しろ一は線を引く方向の練習で、一は其の方向に於ける連續した線の引き方を覺えさせることが、主なる仕事としてやらすのであり、又練習帖組立の便宜から、一方眼内に五線だけを刷入したのである。即ち之れによつて比較的ゆつくり筆を運ばせて、前述の仕事を丁寧にさせるのである。

第三には、練習の第二歩として自由なる練習をさせるのである。此の自由練習は單なる白紙上に、全然自由に書かせること固より妨げないことではあるけれども、ペン書實際の書寫物は、罫紙に書くものも多いし、且つは、一定の寸法内にそれに適當する線の引き方を練習させることは、ペン書の字をよく整へさせる臂の練習としては、比較的便宜であると考へるから、吾人は此の自由練習にありても、尚ほ茲に掲げる様な輪廓ある練習紙を與へ、其の範圍内に於いて自由に練習させる様にしたいのである。本例は直線曲線共に一欄宛之れが練習

運筆練習紙



書きをしたものを示したのである。而して之れが練習の場合、最初の中は教師は常に運筆呼吸の合圖を示し、兒童は之れに倣つて自からも小聲を以つて呼唱を唱へつゝ、其の呼唱と手指の動きとが、全然相一致する様に練習させるのである。而して教師の示す呼吸の合圖は、練習の進むに從ひ段々に之れを速めて、終にはペンの輕快なる運筆に適當な度合にまで進めるのである、尚ほ一段の練習を終る毎に之れを巡視して適切なる批正を與へねばならぬ。

以上は基本教授の場合のものとしての説明であるが、斯くの如くにして一通りペン運筆の呼吸を心得さした後には、次に述べるが如き基本畫の運筆教授、基本文字の運筆教授に移つて行くので、

それも一通りすんで、愈々本當に手本によるペン書の練習を始め、之れを進めて行く場合に、毎時間矢張り此の練習紙によつて、線の引き方と運筆の呼吸を、一通り宛練習さしてから、手本の練習に入る樣に、之れを運用することが有効なのである。

第三　基本畫の取扱

基本畫として特別に取扱ふべき種類は、既に掲げた如く片假名及び漢字楷書のもの二十四個、平假名のもの十七個である。前者は大體直線的のもので、後者は曲線的のものである。さて是等基本畫を特別に取扱ふに方り、其の要旨とする所如何といふに、それは前上各基本畫につき、ペン書としての入筆の方向、當りの附け方、屈折部のペンの使ひ方、彎曲部のペンの運び方、趨の部のペンの使ひ方、終筆の際のペンの使ひ方等に就いて、水平運動と上下運動との工合を領解させ、尙ほ各基本畫の運筆の呼吸を悟らせるにあるのである。

平假名基本畫の練習紙

清書	自書	渡書	自書	渡書	手本

次にこれだけの材料を凡そ、どれだけの時間で教授するものであるかといふと、ペン書方のために特に時間を設けて扱ふとしても、又は讀本に附帶して扱ふとしても、大體に於いて今日尙ほ毛筆書方を課して居る以上、さう澤山の時間を費やす餘裕は發見されぬのであるから、先づ片假名漢字のもの二十四個は之れを二時間位で取扱ひ、平假名のもの十七は之れを一時間で取扱ふ位の豫定でやらねばならぬ。只基本畫は外見極めて簡單なものであるからといつて、之れを全然兒童の自習などに任して、表面的皮相的の練習に終らしむる樣なことあつてはならぬ。外見は簡單であつても、最も基礎的のものであるから、比較的丁寧に取扱ひ、必ずや適切に領解させる所がなくてはならぬのである。それで之れが取扱も亦次の二段に分けて行ふがよい。

(1) 説明示範　一時間分の材料十二乃至十七の基本畫を、大體二つに分け、六乃至八を一經めとして説明を與へる。そして其の説明は毛筆や鉛筆の用筆法と比較して、ペン書としての各點畫の運筆法に關し、先づ知識としての理解を與へねばならぬのである。即ち前にも述べた如く、各點畫毎に筆を何れの方向から入れて、どう當りをつけるか、又は當りなしに直ちに引き出

すべきものか、屈折部は筆をどう折つて曲げるか、彎曲部はどう注意して、どんなにペンを引きまはして作るべきか、趨の部はペン先をどう使ひ、どんなにしてはねるものであるか、終筆部はどんな調子にペンを止めるのであるか、又入筆かち終筆まで、一つの基本畫の全體に亘つて、ペンを運ぶ呼吸はどんな風にすべきものであるかに關して說明を與へるのである。(用筆法說明の材料は第三章第四節參照)

尙ほ以上の說明と共に板上に之れが範例を示すのである。さて示範用の書寫材料は何を用ひるかといふと、鉛筆書の場合には白堊が最も適當な材料であることを述べたが、ペン書では之れを理論的にいへば一尺近くもある大形のペン、即ち四五間を離れて居ても明瞭に見える樣なペンを持ち、板上に紙を揭げて置いて、それに書いて見せるのが最もよいことゝいはねばならぬのではあるけれども、そんな大きなペンは賣品には無論ないし、又之れを手製して見た所で、とてもインキなり墨汁なりを支持して、小さい實用のペンの樣な調子に汁が流れ出るものでもないから、矢張白堊を用ひて書き示すのが最も簡便である。

そこで白堊によつて、矢張り始は說明に伴つてゆつくりと書き示して、兒童が理解に便利な樣にするのであるが、此の際正しい模範を最も適切明瞭に領解させるには、誤つた運筆で書いたものや、拙ない運筆で書いたものをも同時に併せ書き示して、兩者を比較させることが有効である。それが濟んでからは、今度はよく運筆の呼吸を整へた模範を書き示し、且つそれに適當な速さの呼唱をつけて示すのである。基本畫は纏まつた一字とはちがつて、言はゞ斷片的のものではあるけれども、凡そペンで書くといふ以上、運筆の極めて輕快ならんことを期するのであるから、矢張り其の呼吸を呼唱によつて表示するのがよい。そして此の際兒童にも其の呼唱に合せて空書練習をさせるのである。

(2)練習批正　六乃至八の基本畫に就いて、前上の手續によつて說明、示範、空書を終つた以上、今度は先づそれだけの分量を、練習形式によつて實際に練習させるのであるが、練習に入るに先だち、姿勢、腕法、執筆は最も嚴正に之れを守らせ、苟も不正なるものがあつたらば、必らず之れを矯正せねばならぬ。殊に執筆の要領は最も適當に執らせねばならぬのである。

基本畫は極めて簡單なものであるから、同一のものを繰返して橫に練習させる必要は認めぬ。最初から縱に異なるものを連續して書かすがよい。それで第一分節だけに對し、第一の渡書をさせる。此の場合敎師は適當な呼唱を與へ、之れに合して練習させ、次の自書欄以下は、或は呼唱を與へ、或は自由に書かせるのである。斯くて第二分節も前同樣に說明示範を

與へた後に、練習批正を行ふのである。批正は兒童自書の際、絶えず机間を巡視して、誤れるもの拙なるものを發見したならば、個人毎に、或は板上に指示して共通に批正を與へ、何れも正しき運筆を心得させる樣に努力せねばならぬのである。

斯くの如く直線的曲線的兩種の基本畫全部を取扱つた最後の歸結として、各兒童に是非とも會得さすべき重要なる事項は、ペン書きの輕快迅速なる運筆の要領である。即ちペン書きはこんな風の調子に書くものである。毛筆とは斯うちがふ、また鉛筆とは此所が斯う違ふといふことを、明かに區別させねばならぬのである。基本畫の取扱は、單り各基本畫の用筆法を授けるだけではない、此の調子を明瞭に會得させることをも目的として考へねばならぬのである。又前項に於いて述べた臂の練習は、教授の最初期に於いて丁寧な取扱をする以外、手本練習の場合になつても、毎時間の始め若干の時間は、矢張之れを練習させるものとして說明したのであるが、此の基本畫の方はさうまでするには及ばないと考へる。ペン書教授に入つた初期に於いて、前述の如く十分丁寧な取扱をしただけでよろしいと考へるが、只手本練習の場合、手本の或頁に某種の基本畫が比較的多く現はれて居る時には、それを抽き出して特別に練習さしてから、手本の方へ入るといふ樣な方法は幾分有効であるから、基本練習として之れを仕組むことあつてもよろしいと考へるのである。

第四　基本文字の取扱

基本文字として吾人の選擇したものは、片假名に十七字、平假名に十七字、それに漢字にも十七字あつて、それは既に前項にも掲げたことでもあり、又茲に挿入してある練習形式内にも之れを示してある。さて此等の基本文字を取扱ふ教授上の要旨としては、如何なることを目的とすべきものであるかといふと、それは次の如くである。

前項に述べた基本畫の方は、ペンの使ひ方を授けることが要旨であつたが、其の基本畫なるものは、單獨にそれだけを書く時と、それが或文字の部分となつて居るものを書く時とで、餘程調子の異なる所があるものである。即ち基本畫によつて字を組立てるといふ以上、其の一字内の各點畫相互の間に、主從とか輕重とかの新な

紙習練字文本基名假片

書清	書自	波書	書自	波書	本手
				ニ	ニ
				ノ	ノ
				リ	リ
				ソ	ソ
				ト	ト
				ウ	ウ
				ハ	ハ
				ヌ	ヌ
				シ	シ
				レ	レ
				ヒ	ヒ
				ヤ	ヤ
				マ	マ
				オ	オ
				カ	カ
				ヘ	ヘ
				井	井

る關係が生ずるのであり、又二個以上多數の文字を連續して書くといふ以上、其の文字相互の間に統一的關係が新たに生ずるのである。

そこで基本文字の取扱は、此の單獨な一文字として書く場合の運筆の呼吸と、連續して書く場合の字形、字行の整へ方を會得させることを以つて要旨とせねばならぬのである。それで此の基本文字の練習によつて、ペンは大體こんな調子にかういふ心得を以つて書くべきものであるといふことを會得させねばならぬのである。斯くて基本文字の練習は、基本練習の最後のものとして取扱はれる最も重大な任務を有して居るものであると同時に、次に來るべき手本文字の練習に對し、最も直接の基礎となるわけであるから、從つて最も適切に之れを授け、又最も確實有

紙習練字文本基名假平

清書	自書	渡書	自書	渡書	手本
		に		に	に
		し		し	し
		か		か	か
		な		な	な
		ふ		ふ	ふ
		や		や	や
		さ		さ	さ
		く		く	く
		へ		へ	へ
		の		の	の
		せ		せ	せ
		そ		そ	そ
		こ		こ	こ
		より		より	より
		ちる		ちる	ちる

効に練習させねばならぬのである。

次に之れを取扱ふ時間はといふと、片假名十七字及び平假名十七字は、各之れを一時間で練習させ、漢字十七字には二時間を充てねばならぬのである。それから之れを取扱ふ方法は矢張り次の二段に分けて行ふがよい。

(1)說明示範　先づ片假名及び平假名各十七字を、何れも一時間宛に扱ふに方りては、之れを二乃至三分節にわけて扱ふがよいし、漢字の方は一字毎に扱つて行くが便宜である。そこで是等基本文字は、假令運筆の基本練習を目的として課するものであるとはいへ、凡そ文字となつた以上、其の組立即ち各點畫相互の組合せに關する說明、即ち所謂整形上のことをも合せ說明しなければならぬのである。

そこで說明の要點は次の三つに分かれる。(一)基本畫の運筆に關し、(二)纏まつた一字としての運筆及び整形に關し、(三)連續した書寫物としての心得といふ三點に就いて取扱はねばならぬのである。實際の取扱に於いては、基本畫の運筆は前項に於いて既に授けたことであるから、兒童の記憶を喚起すればよいのであるが、纏まつた一字としての取扱に關しては點畫の主從輕重の區別と、それの運筆呼吸とは最も明瞭適切に說示しなければならぬのである。之

れが爲めには、毛筆及び鉛筆のそれとペン書としてのそれとを、互に比較說示することは、ペン書のものを一層明瞭ならしむる所以である。

尙ほ前上の說明と共に、板上に於いて之れが範例を示すのである。示範の用具に關しては、矢張り基本畫取扱の部に述べた如く、白堊を以て示すことが最も簡便なのである。

斯く適當に分節して取扱ひ、何れも十七字全體を授け終つた後には、今度は一行なり一頁なり、全體としての統一的書寫に關する基礎觀念を與へねばならぬのである。このことは此の基本文字教授の終局の目的であるとも考へねばならぬのである。(說明の材料は第三章第六節參照)

又一字一字の示範も、一行全體の示範も、單に正しきもの、美なるものだけを示すよりは、之れを拙劣なるものと比較して示すことが一層適切に之れを會得させることが出來るのである。就中一つ一つの文字に關しては、ペン書として力の入れ所を適當ならしむること、及び全體の書寫としては大小方向の統一は、ペン書の上に最も必要なことであるが、それが兒童には最も誤られ易く、又最も拙劣なのである。此の二種は十分に注意して說示する必要があることを經驗して居る。

紙習練字文本基漢字

清書	自書	渡書	自書	渡書	本手
		十		十	十
		人		人	人
		六		六	六
		火		火	火
		江		江	江
		小		小	小
		守		守	守
		力		力	力
		衣		衣	衣
		目		目	目
		子		子	子
		北		北	北
		戈		戈	戈
		九		九	九
		心		心	心
		女		女	女
		部		部	部

次に臂の練習や基本畫の練習には、運筆の呼吸を呼唱によつて表示するがよいと說いたが、それが基本文字となると、點畫が段々に込み入つたものになるから、一々之れを呼唱に表はすことは困難である。若し强ひて之れを表はさうとすると、却つて混雜してしまふのであるから、之れはよす方がよい。然かしながら、ペン書である以上、運筆の呼吸は努めて輕快でなければならぬのであるから、臂の練習として修練さした力を、出來得るだけ應用させる樣に指導せねばならぬのである。

(2)練習批正　各分節の說明示範を終へるに從ひ、其の分だけを練習形式に當て嵌めて、實際に練

習させるのであるが、此の際前二項にも述べたと同様に、先づ第一に姿勢、腕法、執筆を整へ、ペンの潤筆を適當にしてから書かすのである。

さて練習は縦書にさせるか横書にさせるかは一考を要する問題である。前項基本畫の練習にあつては、簡單な點畫であるから、最初から縦書にさせるがよいとした。然かるに基本文字となると、兎も角も本式に字を書くので、殊にペン書の調子を確かと植ゑ込まねばならぬ重要な仕事をするので、一つの字でも念入りに之れを練習させて、適切な批正を與へ、是非とも會得させねばならぬのであるから、之れは横に同一の字を繰返して、渡書と自書とを交互にさせる方法を取るがよいと考へる。但し最後の清書の一欄は之れを殘して置いて、最後にはそれを縦書にさせるのである。

兒童練習中は机間を巡視して、個人毎に適切な批正を與へると共に、共通に拙劣なる點を發見した場合には、板上で共通に批正を與へるがよいし、又自書の欄に、兒童の自力を以つて書いたものは、必らず手本と嚴密に比較さして、十分に自己批正をやらす様に方法を授け、且つ之れを奬勵するがよい。

斯くして第二分節以下も同様に取扱ひ、十七字全體を練習さした後には、最終の清書の欄に縦書をさせ、統一的書寫に關する技能を、出來得るだけ實現させる様に努めさせねばならぬ。

尚ほ此の十七字の基本文字は、單にペン書の初期に於いて、前述の如く比較的丁寧な教授を行ひ、且つ練習させるのみならず、臂の練習たる各種の線の引き方と共に、爾後手本文字の練習の時期になつても、毎時間手本文字の練習に入る前、一通り之れを練習させ、ペン書の小手調をさしてから、本當の練習に入る様に方法を仕組むことが有効であると考へる。

以上臂の練習から基本畫、基本文字の練習に至るまでの全體を、縦に通じて之れが取扱の要旨とする所を概括して見ると、(一)先づ線によつて各方向に手指を自由に動かすことを練習すると共に、(二)ペン書運筆の速度の特別陶冶を加へ、又(三)基本畫によつてペンの使ひ方の根本觀念を授けると共に、(四)運筆呼吸の基礎を作り、(五)基本文字の練習によつてペン書全體の書寫の調子を整へる様に、仕事を進め來つたので、結局ペンの使ひ方、ペン運筆の調子をよく會得させて、ペン書寫の基礎を作らうといふ仕組みなのである。斯くして後引續き多數の手本文字に接せしめて、ペン書の熟練を得させようといふのである。

第五節　教材の選擇排列

第一　選擇の範圍

今日現行の毛筆手本は、片假名、平假名及び數字は其の全部を採つてあるが、漢字は讀本で授けた多數のものゝ中から、若干の成語成文を採つてあるので、其の全部を練習させる仕組にはなつて居らぬ。之れに對し鉛筆書方の方では、讀本で授けた文字は、片假名、平假名、數字は勿論、漢字も其の全部を練習させる樣に仕組むがよいといふことは、既に鉛筆書方教材選擇の章下に述べた所である。ペン書の方はどうかといふと、其の用具の性質が鉛筆と同系統のものであり、字體の小さいことからいふと、鉛筆以上であるから、素より讀本で授けた新字は、其の全部を取扱ふ樣に仕組むことが適當なのである。然かしペンにはペン固有の用筆法があつて、特別な取扱をせねばならぬ必要も感ずるので、此の點からいふと、何か代表的模式的の字でも選んで、それによつてうんと教へ込む方が得策であるかの樣にも感ぜられるのではあるが、それは吾人ペン書に入つた當初に於いて、基本教授として臂の練習から基本畫、基本文字の練習を極めて重要視して述べたのである。いざ讀本の文字語句を扱ふといふことになつたらば、一字を殘さず全部を練習させる樣に仕組むことは、單に其の字の書方に習熟させるだけではなく、書取としての價値をも併せ收めて、其の字の書方の記憶を助けるといふ重大な價値もあるので、此の點から考へると、これは國語教授の全系統から見てさうすることが大に得策なことであると考へるのである。

尙ほ其の教材の取り方に關し、鉛筆の方では一に讀本に隷屬させて、單に讀本で授けた新字、それを使つて出來て居る語句を主とし、少數の短文を加へて置いたのであるが、ペンの方では鉛筆と等しく、讀本に隷屬させることを以つて本體として、讀本で授けた新字語句を課することは勿論であるが、其れ以外に尙ほ日常生活に必須なるもの、價値あるものを取り入れることをも併せ考へる必要がある。何ぜかといふと、尋五六は小學での最上級であり、やがて小學教育の終了期に近づくのであるから、段々實用的に教へ込むといふことを忘れてはならないのである。殊にペンは既に述べた如く、全然實用的のものであるからである。即ち例へば修身科で授けた格言であるとか、訓言であるとか、又は勅語詔書の御本文であるとかいふものを取つて、之れが書方を練習させることは、一層其の學習の効果を深からしむることゝなるのである。又讀本には教へなくとも、生活上必須なる文字語句、例へば書翰用語であるとか、商業用語であるとか、普通の人名地名であるとかいふ類のものをも取つて課する樣にする必要をも感ずるのである。即ち鉛筆書方に比べて、一層其の範圍

を擴張せねばならぬのである。それでかういふ教材を採ることになると、當然假名交り文を練習させることになるが、漢字だけを練習させるのに比べて、假名交り文となると、そこに書方の上に一つの必要な調子が生ずるので、之れを會得させることが亦書方の仕事としては大切なことである。又書翰用語も單に切々の語句を取扱ふだけではない。纏まつた一文をも取扱ふことになるが、さうなると、假名交り文となる以外に書翰文には實用上、禮儀上、書翰文特有の書振りがあるので、それ等に關する心得の一班を授けることは、之れ綴方の仕事といふよりは、寧しろ書方の仕事であると考へる方が相應はしいのである。

以上は文字文章に關しての方面であるが、更に楷行の書體の方面と、縱書、横書の書振の方面からも一考を要する問題があるのである。先づ書體の方からいふと、尋四までは毛筆の方でも、楷書だけであるが、鋭筆の方でも無論さうである。それが毛筆の方では、尋五になると初頭先づ行書教授が始まり、可也長期間それを練習させて、行書の基礎を作る樣に用意されて居る。そこでペンの方では、此の毛筆教授の計畫に順應して仕組むことが、技能の收得上最も便利なのであるから、尋五になつて始めてペン書を課する場合には、無論楷書から入らねばならぬのではあるけれども、少しく進んでは行書をも課する樣にせねばならぬのである。殊にペンは何所までも實用本位のものであり、行書は楷書よりも實用上多く使はれるといふ以上、此の問題は決して輕々に附することの出來ない問題である。

第二　其の排列

前述の如く、ペン書教材の範圍は、(一)文字、語句、文章、(二)書體、(三)縱書、横書の三方面に分かれて居るのであるが、今其の各に就いて之れが排列上の意見を述べて見よう。先づ文字、語句、文章の排列に關しては、讀本から採つたものは、固より其の讀本の進程に並行して、其の書方を練習させる樣に排列せねばならぬのである。否ペン書の爲めに特別の時間を設けることは、多くの學校に於いては今日尚ほ事情の許さないものが多いことであらう。それが爲め讀本教授に含め、讀方の仕事の一部として課するものが多いことであらうと考へて見ると、これは全然讀本の進程と一致さすべきものとなるのである。それから讀本以外修身などから取つた格言、訓言、勅語、詔書の類は、修身科で其の教材を取扱つた其の時期に、其の書方を練習させるといふ樣に排列すべきことも自然の要求である。又此の種のものはペン書の時間を特設してある場合はよいが、それがない場合には、之れを讀方の中へ持ち込むといふのも、讀本の爲めに困ることであるから、之れは修身の仕事に移し、修身の時間中に練習させるのが寧しろよいと考へる。又修身にも其の時間を見出し難いといふ

事情であるならば、已むを得ぬ之れは家庭作業としてやらす様にするのである。次に日常須知の文字語句は、元來何に聯絡して選擇したといふわけでもない、廣く一般的のものとして特に取入れたものであるから、之れが排當の時期も、讀本に聯絡して取つた材料が比較的少ない場合に、之れを塡加して練習させる様に時期を考へるとか、又學期末或は學年末といふ時期に排當するがよい。若し其の時期讀本に聯絡した材料が多くて、此の種のものを取扱つて居ることが出來難いとふ事情に迫つた場合には、適宜之れを家庭作業に移すとか、又は休暇中の宿題として練習させるのに都合よい時期に排當しておくのがよい。

書體の方で、行書は何時頃から課すべきか、又楷書の練習との組合せをどうするがよいか等に就いては、前にも多少述べた如く、尋五になつて毛筆の方では最初から行書を始め、引續いて七單元も課する様に手本が編纂されてある。大體一週一單元の見當で進めるのであるから、七週を要する。それで毛筆で兎も角も行書を一通り授け終つた後でなければ、ペンの方では行書を始めぬがよい。早くとも第七週以後でなければならぬ。それで行書を始めた當初は、暫時連續してそれを練習させ、其の後は楷書と交互に課する様に仕組むのがよい。尚ほ吾人國語讀本に聯絡したペン書練習の材料は、次項に於いて尋常五六學年の分だけを示してあり、それに楷行の組合せをも示してある。

縱書、横書の排當に關しては、尋五の初期ペン書を課するや否や、直ちに横書をも練習させるのは混雜を招き易い。ペンは之れが使用法を會得するのには、相當の時期を要するのである。それで練習の横書は別として、纏まつた書寫物を横書にすることは、可也ペンのこなしに慣れてからでないと扱ひにくいものであるから、先づ尋五第二學期の半頃から、段々と始め、尋六になつてからは、次第に其の分量を增して行く様に考へるがよい。然かしそれかといつて、今日横書を以つて本體とすることは、尚ほ早きに過ぎるとおもふ。矢張り縱書を本體として練習させる様に考へねばならぬのである。

第三　字の大さ及び字詰

鉛筆の字は其の最も大なるものを五分方眼とし、其の最も小なるものは四分方眼とし、其の間に四分五厘のものをも設けて三段に區別し、尋一二は五分方眼、尋三四は四分五厘方眼、尋五以上は四分方眼とし、それより小さな字は書かせぬがよいことは既に說明した所である。之れに比べてペンの方はどうであるかといふと、ペンの方は一層方眼を縮め、小さな字として練習させることが却つて適當であることを經驗して居る。尚ほ之れを用具の特徵と、臂手指の運動の關係から考へて見ても、鉛筆のよりは一段小さくすることが適當であることを知るのである。なぜかといふと、ペン

は其の頭が頗る鋭利に出來て居るものであるから、細い線を書くとしては、毛筆は勿論鉛筆よりも一層適當の用具であり、又臂や手指を動かす關係は、前臂の基脚部の肉塊を支點とし、手指の屈伸を共働さして書くものとされて居るのではあるけれども、大部分は手指の屈伸によつて書かれるのであり、殊に點畫の細かな部分は、殆んど手指の屈伸によつて書かれるのである。

斯くの如く手指の屈伸が主なる運動であるとすると、其の運動の範圍は極めて狹く局限されるのであるから、小さな字の方が却つて書きよいといふことになる。之れを吾々の實際の經驗に問うて見ても、ペンで五分方眼の字を書くのと、三分方眼の字を書くのと、何れが書きよいかといふと、それは三分方眼の方が餘程書きよいのである。五分方眼となると、それは臂を大きく動かさねばならぬことゝなり、臂を大きく動かして、そして細い線をよく調整しようといふことはなかなか困難なことである。

それでは尋常五年に始めてペン書を課する當初の方眼は、どれ位のものを適當とするかといふと、吾人の經驗では三分五厘方眼が丁度よいと考へて居る。三分五厘方眼といへば、毛筆細字用のものとしては、とても小さ過ぎて用ひられぬ程の大さであり、鉛筆書のものとしても適當はして居らぬが、ペン書のものとしては先づ大きな方である。それからペン書のものとして小なる方眼はどれ位のものかといふと、世上實際に用ひて居る原稿紙などは、二分五厘方眼のものなどが最も手に嵌つて書きよいものであるから、多く其の程度のものが用ひられて居るけれども、小學校用のものとしては三分方眼のものに止めたいのである。してその間を二階段に分けるがよいと考へる。即ち三分五厘方眼のものと、三分方眼のものとである。學年との關係は尋常五年では三分五厘のもの、尋常六年以上高等科に至るまでは、通じて三分のものを用ひたいのである。

一紙面上に於ける行數と字詰とは、鉛筆練習帖と同じく菊判形のものを用ひるとして、前記の方眼を其の紙面へ配置して見ると、三分五厘方眼のものは十二行十七字詰のものとなり、三分方眼のものは十四行二十字詰となるのである。

第四　國語讀本に聯絡した教材

以上述べたる趣意により、國語讀本に準據して選擇し排列した、尋常第五學年用及び第六學年用ペン書の教材を擧げると次の通りである。

尋常第五學年

（卷の九に聯絡したもの。）

古時計雞鳴朝日業廻邊辺屬屬移殊幹肉

勅命既俄危敷皮上總養雞氣持綿毛物置
待ちかねたる雞ども我先にと走り出づ
保護容易例蝶枯葉裏警戒色蜂惡味惡臭
國利民福志研究讀政治關開係精神葬式
瀧壯觀波紋遊覽若葉空氣小鳥道端清水
將卒正義防戰破感歎最後萬感胸手帶劍
いやそれには及ばん閣下の劍は軍人の
魂として少しも名譽を傷つけなかつた
乃木大將水師營彈丸謝防備厚意受領別
金鯵然代價有用持主品物高下需要供給
昨日田植都合骨折仕合今朝御安心夏休
精米會社社長降照忠實推頭取負擔輕珍
年來の貯金を資本として商店を開いた
繁昌して町でも屈指の財産家となつた
麥莖穗飛散仕事掛聲腕汗打續眞赤追逃

軍艦銃起床傳令規律特別衛兵敬禮乘員
驛紅葉溫泉通過濱街道辨當越原野沼帆
支度身輕當番引張驚石安工場看板店飾

(行)ぢいさん今年六十の
坂を越えたる足もとに
大いなる石横たへて
なほ怠らずこつ〳〵と
何をか常に刻みゐる
めがねを掛けてはつぴ着て

(行)今朝遠足にとく起きて
石屋の前を通りしに
廣き工場にたゞ一人
安ぢいさんは一心に
毘沙門天を刻みゐる
めがねを掛けてはつぴ着て

星寶宝石位置變線速小態想像産傍姉親
白馬登山山脈頂上霧付雪溪雄大眼前競
日本晴天氣熱延誠隣昨夜飛込眞青空甘
北風黑馬戰爭砲彈乘馬先頭白煙姿萬歲

(行)昨日は美しきお話の本御送り下され誠に有難く存じ候あの中にて一番面白き話をよくおぼえ置き來週學校にて話し方の時間に話し同級の人々を驚かさんと樂しみ居り候

九月二十日

(行)先日遊びに上り候節御約束致し候三毛の子猫もはや大きくなり候事と存じ候近き中に頂きに上りたく候に付き何日頃がよろしく候や御知らせ下されたく御願ひ申し上候

九月二十日

(行)拜啓昨年僕の學校より君の學校へ御轉任なされ候佐野先生先頃より御病氣の由承はり候早速御見舞に參上致したく存じ候へども御住所不明にて困り居り候若し御承知に候はゞ御手數ながら至急御報知下されたく願ひ上げ候　草々

(行)

芝區櫻木町五番地
吉野萬吉樣

小石川區林町二番地
下田英太郎

九月二十日

水兵戰役軍艦高千穗手紙差出恥銳海戰
攻擊御恩親切心願感心御奏職務働敬禮

(行)こらどうした命が惜しくなつたか妻子がこひしくなつたか軍人となつていくさに出たのを男子の面目とも思はず其の有樣は何事だ兵士の恥は艦の恥艦の恥は帝國の恥だぞ

それは餘りな御言葉です私には妻も子もありません私も日本男子です何で命を惜しみませうどうぞ之を御覽下さい

道雄衆議院議員總選擧候補者投票豫定
選擧權棄適當信用趣意國民恥級長後任

(行)當選スルシナイハ別ニシテメイ〳〵自分ノ適任ト信ジテキル人ニ投票スルノガホンタウノ選擧トイフモノダ世間ニハイロ〳〵ノ事情ノ爲ニ或ハ信用モシナイ人ニ投票シタリ或ハ棄權シテシマツタリスル人モアルガソンナ事ヲスルノハ選擧ノ趣意ニソムイテキル國民トシテ恥ヅベキ事ダ(横書練習)

(卷十に聯絡せるもの)

停車場達皇太后到御遺物舊旧御殿坪盡
尽取扱青年團征服建設經過密書興奮面
仕事持場境内從事無責任規約參觀歸途
久々馬市危險周圍家族背直段處処別封

(行)煙臺守嵐附救遂漕呑進退波浪肖像畫面

(行)私はとても人の死ぬのをじつと見ては居られませんさあ行きませう命を捨てゝかかつたら敎へないことはありますまい

朝霧野路人影谷間寄運河地形起伏地層
掘割連結此處浦國家事業凡八億費應用

(行)かゝる切る掘る運ぶ誰も彼も一心不亂に働くので仕事は豫期以上にはかどり九時頃にはもう數坪の地面が新しく開かれた力藏さんのひいてゐたけやきの大木も見事に根本から切倒された

(行)緣先自然燒付歎息困難罵唯離皿尙精巧

(行)建物銀行預金定期當座期限拂拂貸附差上下左右前後月火水木金土東西南北春夏秋冬府縣郡市町村戸主父母兄弟夫婦姉妹老幼朋友親戚知人近所貧富商業廣告取引案内荷造貨物運搬貿易稅關倉庫保險案内註文販賣特約船積陸揚送狀通知領收計算勘定損害配當公債

(行)銀行の預金には定期預金といふのと當座預金といふのがある當座の方は何時でも引出すことが出來るが定期の方は預けた日から半年とか一年とかきまつた期限が來ないと引出す事が出來ない

通信無線電信證明飼養奬勵普通往復豫

飛行移動見覺獲物援兵傳令任務目的地
旅僧門口留守迎榮泊姿矢梅松櫻失禮奪

(行)駒とめて袖打拂ふかけもなし
　佐野のわたりの雪の夕暮

山はさけ海はあせなん世なりとも
　君に二心われあらめやも

暇理非明沙汰汝返禮授諸侍訴訟裁斷斷
京城總督府洋館煉瓦發展編入規則交替
合圖坑底電燈活動不思議崩採炭燃出更
生活輪入羊毛機械原料綿花製品豚總額

(行)冬の朝日のさす軒下に
　俵あむ手のいそがしけなる
父と母とに暇を告けて
勇みて出づる我が家の門
　こずゑ明るき林を行けば

やぶかうじの實木の根に赤く
霜柱たつやぶかけの路
ふめばざぶ〳〵銀みだる
耕地整理のあとうつくしく
並ぶ田の面に氷きらめき
新道づたひ車重げに
ひき來る馬のつく息白し
村の社の掃除や終へし
はうき手に〳〵此方をさして
語りつゝ來る若き人々
今朝とく出でし兄も交れり

(行)僕は再三ことわつたのですするとしまひに皆が僕の事を弱虫だといつて笑ひました僕は殘念でたまらなくなつたので何此のくらゐの事がこはいものかと自分から先に立つて渡つたのです

支那領地虎敗捕富貴醫藥効天命從容死
冬枯別世界香薄紅色案内絹絲管髪温室

(行)寒さきびしき折から皆樣には御障もなく御前樣にも日々學校に御通ひなされ候由安心致し候
御手紙により御母上樣には御安產にて玉の樣なる女の御子御生れの由承り誠にめでたくうれしき限りと存じ候
御母上樣はまだ御やすみにて御前樣には御家事御手づだひのため何かと御いそがしき事と察し申し候
今日小包にて粗末なる物赤さんの御着物にもと御送致し候間御ひまの折裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候

(行)御祖母樣御病氣御養生御死去御報夢御
(行)悲歎御悔御生前御好物御送御佛前御供
金銀珠玉宮居振巧丹青繪筆美術綠樂園
一隻捕鯨船乘組員破裂矢歡呼卷體威勢
輕便鐵道神境御墓所社殿梅眞盛尋跡詩
商會店員學歷着物生意氣注意美質保證
戸數模範利益幸輻專心課業基本金平和
拜觀者壯快奏樂臨御指揮合圖一秒歡呼
(行)貞義男女警固武士選句天顏上聞忠臣計
(行)義を見てせざるは勇なきなりいでや行幸の

尋常第六學年

(卷十一に聯絡したもの)

存在太陽重大即答積隨意表望遠鏡黑點距離飛
大聖敬德化著勵治績專著逸高弟集錄可愉明老

第六章　ペン書方教授

路に待受け君を奪ひ奉りて義軍を起さん
天勾踐を空しうするなかれ
時范蠡無きにしもあらず

(行)昔支那に吳越とて相隣れる二國ありき年久しく相爭ひて互に勝敗ありしが勾踐越の王となるに及び吳の勢盛んにして越軍大に破れ勾踐此のうらみ忘れがたく范蠡といふ忠臣の助を得て報復の計を立て再び吳と戰ひて遂に之を亡しぬ

(行)長崎租界區域自治制度膚風俗縱橫博物館狹占
(行)鳴くやひばりの聲うらゝかに

かけろももえて野ははれわたる
いざや我が友うち連れ行かん
今日はうれしき遠足の日よ
右に見ゆるは名高い御寺
左に遠くかすむは古城
春は繪のごと我等はめぐる
今日はたのしき遠足の日よ
たどりついたる峠の上に
菜の花にほふ里見下して
笑ひさゝめぐひるけのむしろ
今日はうれしき遠足の日よ
風は音なく柳をめぐり
船は靜かに我等をのせて
行くは何處ぞ桃さく村へ
今日はたのしき遠足の日よ

こんなによく整頓してゐる中で勉强したらどんなに氣持がよいだらうと思ひつゞけました私はひとりで歩きながら自分の始末のわるいことを考へてつく〳〵恥づかしくなりました これまで自分の不整頓のためにむだに費した時間と勞力は大きなものであつた整頓といふのは體裁をつくることではなくてむだをなくすことだと思ひました

裁判所聽犯罪刑罰疑檢事事件組織處罰附錄極解初率配置督水際一筋路斬倒指揮勝算旨進軍退却戰況片桐突進組打押合拔勇士武名武器稱

(行)相接海峽未山海皆綠民家點在波間出沒趣公園

(行)植林伐採峯通杉苗間伐補植斜面枝打貯金利息

(行)拜啓久しく御無音に打過ぎ失禮仕候さて昨日御地より歸村せられたる河井氏の御話によれば貴兄には去月以來御病氣にてしかも一時は大分御重態なりし由誠に意外のことに驚入候しかし此の頃は餘程御快方に向はれ候とか何とぞ十分の御養生ありて一日も早く御全快なされ候樣切に祈申候御承知の通り當地には温泉これあり病後の保養には特によろしき由に候何分田舍にて萬事不便には候へども若し御光來相成候はゞ及ぶ限りの御便宜相計り可申候先は御見舞まで斯の如くに御座候

(行)拜後御親切なる御手紙有難く拜見仕候尙又結構なる葛粉御送り下され御厚情の程深く謝し奉り候實は去月十日頃より感冒の心地にて引きこもり居り候處其の後とかく病氣衰へず遂に肺炎を引起し申し候しかし幸に經過良好にて熱も凡そ二週間餘にて全く相去り申し候今少しく日もたゝば轉地するもよからんと醫師も申し居り候につき或は仰に從ひ其の中に御地へ參り候やもはかり難く候其の節は何とぞ宜しく願ひ上げ候先は取敢へず御禮まで　拜具

(行)君は畫を以つて一家をなせる人なるに數年間一度も筆を取り給ひし事なし我もとより衣食の費をいとふにあらざれども何時までもかくておはすべきにあらねば今は何處へなりとも行きて君の技をふるひ給へ愚僧も所用ありて京に上り或は一二年滯在せんもはかり難し

(行)畫師先に畫きたる繪何となく物足らぬ所ありて氣にかゝりしが東國へ下る路すがら箱根山中にてよき枝ぶりの檜を見て其の意を得たれ

ばかき添へんため歸りしなりとて一枝かき添へ又別れを告げて立去れりといふ

消原料製造需要激增熟練取除彈力用途著音機

(行)ふかの口はもうほとんど子供に居いて居るあつと思はず人々が叫んだとたんにずどんと一發すさまじい大砲の音がとどろき渡つた砲手はその結果を見るのをおそれるやうに手で顏をおほつて大砲の上につつ伏した立こめた砲煙の薄れゆくにつれて先づ目に入つたのは大きなふかの死體であつた喜びの聲はどつと起つた二人の少年はボートに乘せられて歸つて來る老砲手は大砲にもたれてそれを見つめて居る

市街貫大規模密林一條廣野殆僅農業切株知識

類栖木人智食物調理發明燃料完成閉消末席

學問立寄訪著書才氣學識希望努力師弟不滅光

(行)石貝家畜獸皮布農產物などが時代により場所によつてそれ〴〵貨幣の役目をしたこともあつたしかしこれらのものは受取る者にそれが不用であつたり思ふ樣に分割することが出來なかつたり其の他いろ〳〵の缺點があるそれで金屬を用ひることを思ひつき遂に今のやうな貨幣を造つたのである

(行)我は海の子白波の

さわぐいそべの松原に

煙たなびくとまやこそ

我がなつかしき住家なれ

高く鼻つくいその香に

不斷の花のかをりあり

なきさの松に吹く風を

いみじき樂と我は聞く

生れて潮に浴して

浪を子守の歌と聞き

千里寄せくる海の氣を

吸ひてわらべとなりにけり

丈餘のろかい操りて

行手定めぬ浪まくら

百尋千尋海の底

遊びなれたる庭廣し

幾年こゝにきたへたる

鐵より堅き腕あり

吹く潮風に黑みたる

はだは赤銅さながらに

浪にたゞよふ氷山も

來らば來れ恐れんや

第六章　ペン書方教授

海まき上ぐるたつまきも

起らば起れ驚かじ

いで大船を乘り出して

我は拾はん海の富

いで軍艦に乘組みて

我は護らん海の國

(行)竹島を越すと手足が大分くたびれて來た腹もすいたその中先に進んで居た者が二三人列から離れて船に上つた僕も急に元氣がなくなつて一所に船に上らうと思つたがいやここがまんのしどころだと自から勵まして進んだ

(行)書物戸棚椅子卓子本箱火鉢筆墨紙硯定木鉛筆時計下駄障子小刀庖丁手桶風呂茶碗神社佛閣道路橋梁鐵道航路學校役所會社商店帳簿記入曆略本曆紀元土用彼岸月齡太陽太陰季節重寶

大統領雜草成績優等圖書館國史就忠實働偉人

(行)御手紙拜見いたし候二人ともよく勉強し居らるゝ由安心いたし候勉強も大切なれど體にも精々御注意なさるべく候

(行)何所に行きても日本人を見かけ候は甚だ愉快に御座候殊に日本人の小學校ありてお前たちぐらゐの子供が通學し居るを見ては殆んど身の南米にあるを忘れ候

(行)白雲いう〳〵去り又來る

西窓一片殘月あはし

うき世をよそなるしづけき住居

出でては日毎畑を打ち

入りては机に書をひもとく

雪降りみだるゝ冬のあしたに

風なほ冷たき春のゆふべに

劉備が三顧のごとなき知遇

我が身をすてゝ報いんと

起ちてぞ出でぬる草のいほりを

天下を定むる三分の計

たなそこの上に指さすがごと

いしずゑ固めし蜀漢の國

漢中王はおごそかに

帝の位をふませ給ひぬ

二代の帝に盡す眞心

强敵ひしぎて世をしづめんと

三軍進めし五丈原頭

はかなく露と消えしかど

其の名はくちせず諸葛孔明

(行)自治協同一致公共一般選擧勸誘公吏尊重慈善

(行)農場騎馬依然老紳士勳功崇敬禮答禮公爵萬歲

(行)窯の周圍には八九人の職工が汗を流して働いてゐる細長い管の一端をとけたガラスの中に突つこんで引出すと先に赤い玉がくつついてゐる一端に口を當てゝ息を吹きこむとぶうつとふくれるふり動かしては又吹くいよ〳〵大きくなるまるであめ細工のやうである

(行)佛教書籍出版忍成就喜捨悉救助寄附印刷倉庫

(卷十二に聯絡したもの)

(行)古のふみ見るたびに思ふかな

おのが治むる國はいかにと

荒駒を馴らしがてらに野邊遠く

櫻がりするますらをのとも

大空にそびえて見ゆるたかねにも

のぼればのぼる道はありけり

はる〳〵と風のゆくへの見ゆるかな

すゝきが原の秋の夜の月

さし昇る朝日の如くさわやかに

もたまほしきは心なりけり

海原はみどりに晴れて濱松の

こずゑさやかに降れる白雪

汽車鐵橋參詣境內拜殿四隣快起原規模拜觀彈動植物礦石叱習性博物學辛吐出探檢意氣揚々速印刷衆單純遊戯現逐通信司販賣能力組遠隔

(行)ふもとの川を白帆が二つ三つ通つて行くあれは港の親船へ蜜柑を運んで行くのであらう小春日和の暖さにとけて其處からも夢のやうに

船歌が聞えて來る
敏速堅實自己實際永續不振個人忍耐人格考誤
(行)商業は之に從事する商人だけを利するためのものではない商人たる者はよく共同生活の眞意義を辨へ品質のよい品物をなるべく安價になるべく敏速に供給して廣く公衆の爲を計らなければならぬ
(行)若宮堂の舞の袖
しづのをだまきくりかへし
かへし〻人をしのびつゝ
鎌倉宮にまうでては
盡きせぬ親王のみうらみに
悲憤の涙わきぬべし
歴史は長し七百年
興亡すべて夢に似て

英雄墓はこけむしぬ
ロンドンは何といつても世界の大都會でテームス川を飾るタワー橋ロンドン橋を始め國會議事堂大英博物館ウエストミンター寺院其の他見る物聞く物唯々驚く外はありません
混亂藝術壯麗兩側繪畫彫刻眺望光景戰跡沿道
黑煙勤儉美風活動敬服湖上風光連峰
(行)音樂家演奏會御免樂譜不思議月光題奇怪揃曲
木材增殖憂建築產額縮柔耐久磨裝飾强烈製作
(行)十和田湖の東南岸だけは二つの半島が並んで突出してゐるためやゝ複雜になつてゐる
(　)直りましたねぢが一本いたんでゐましたから取りかへて置きました工合の惡いのは其のためでした自分もほんたうに役に立つてゐるのだ

徽章旭日昇天純正潔白示熱烈燃愛國至誠嵯地
氣短與与領地言葉認準備發狂請責腸存養安樂
(行)數そうの船に分乘した漁夫がえんや〳〵と掛聲を掛けながら曳網を一方からたぐつて行く
(行)春暖大暑秋冷嚴寒御機嫌壯健無事消光安心約
束早速郵送取紛延引小包落手吹聽改良品製出
續々出來御用引立宜敷時節柄御自愛末筆敬具
(行)阿波と淡路のはざまの海は
此處ぞ名に負ふ鳴門の潮路
八重の高潮かちどき揚げて
海の誇のあるところ
山もとゞろに引潮たぎり
たぎる引潮あら渦を卷き
卷いて流れて流れて卷いて
空にとび立つ潮けむり

櫟島より渦潮見れば
胸も波だち眼もくらむ
船頭勇まし此の潮筋を
落し漕ぎゆく木の葉舟
(行)疑問實際調査樺太探檢確雇困難宅懷事情研究
(行)法律制定提出討議可否省令厚薄測幸福生活營
同情物思沈聖賢苦行試綠色濃悟反抗迫害巡鑑
(行)私は行はうと思つたことを行ひ盡し語らうと思つたことを語り盡したこれまで說いた敎そのものが私の命であり私のなくなつた後もいく〳〵が其の敎をまじめに行ふ所に私は永遠に生きてをる
奈良帝都森嚴廢社寺壯麗霞鹿廉哀音歴史文學
(行)たとへ何十年かゝらばかゝれ我が命のある限り一身をさゝげて此の岩山を掘拔き萬人の爲

に安全な路を作つてやらうと神佛に堅くちかつて此の仕事に着手した三十年目に見事に成就した

(行)電燈實驗用缺點稀代天才竹炭素綠好結果利器

(行)講演電氣利用蒸氣革新無線電信消息交換會衆

(行)拜啓誠に御無沙汰に打過ぎ申しわけもこれなく候當地に參りて以來一度手紙を以つて御樣子御伺ひ申上げたしとは存じながらなれぬことゝて仕事に追はれ一日々々と延引致し今日に相成申候失禮の段御許し下され度候先生には何時も御壯健の由何よりのことに御座候近頃は店の樣子もわかりお客樣の扱方にもなれて仕事に興味を覺ゆるやう相成り申候間御安心下され度候先づは御無沙汰の御わび かた〴〵近況御知らせ申上候　敬具

何々縣何々郡何々町
字何町第何番地
大井德三殿
平信

何々市何區何町何番地
何々吳服店內
年月日　小山文太郎

(行)夢にのみ見し山川も
あけくれにしたひし家も
まのあたり近く迫りぬ
かもめの飛ぶ海をすべりて
船は今靜かに歸る
懷かしき故鄕の港

(行)はやと吹くやみにたゞよひ
寄るべなき海にさすらひ
思ひ出の深き航路や
つゝがなく今日しも果てゝ
船は今靜かに歸る
懷かしき故鄕の港

(行)うるはしき眞玉白玉
にほひよき木の實草の實
うづたかき積荷の中に
海山の寶を載せて
船は今靜かに歸る
懷かしき故鄕の港

(行)交渉委任書策參謀確答仁慈評議捧銃努力果斷

(行)次第によつては或は君等の銃先にかゝつて死ぬかも知れぬよく此の胸を見覺えておいてくれ

世界無比國體冠據萬世一系一掃除創造侮脫廉恥

(行)我々は其の長所を知つて之れを十分に發揮すると共に又常に其の短所に注意し之れを補つて大國民たるにそむかぬりつぱな國民とならねばならぬ

(行)農業肥料收穫田畠耕作果實軍人官吏教員商人貴族士族平民工業實業庶業醫師僧侶貸附資本借用商品支拂受取營業貸借組合委託株券積立定期手形預金割引證書創業給料旅費法律勅令訴訟登記權利義務委任代理期限所得抵當保證契約買取擔保日歩取調屆書代筆出願審査差押

記

一金壹圓九拾貳錢五厘　かつを節百十匁代
一金參拾六錢　鹽　三　升　代
一金六拾四錢　白砂糖二斤代
ノ金貳圓九拾貳錢五厘也
右正に受取申候也
年　月　日　岡本商店
石田　樣

教育に關する勅語
戊申詔書
精神作興に關する詔書

第六節　ペン書練習形式の研究

毛筆でもさうであるが、單なる臨書法によつて相當の成績を擧げようといふには、頗る長時間の練習と、なか〳〵の努力とを要するのである。それで從來から毛筆でも色々の練習法が工夫されて居り、吾人も亦毛筆の爲めに特に有効だと信ずる種々なる方案を提唱して居るのであるが、硬筆書方に於いては、一層適切な仕組の練習形式を必要とするので、この練習形式の研究は、硬筆書方研究問題の殆んど中心問題たるの觀があるのである。それがペン書にあつては、特に重大な問題であると考へるのである。

そこで吾人は曩に鉛筆書方の章下で、此の練習形式に關する根本問題に就いて可也詳細に說述したのである。即ち練習形式研究の必要に就いて、又横文字と漢字との字形の差異から、吾が國字たる假名及び漢字には特別の形式を組立つべきこと、並に其の組立に關する幾多の條件を列擧したのであるが、是等の諸項は何れもペン書にも共通の事項である。而して其の條件として、(一)練習形式には最も善美なる手本の刷入を必要とすること、(二)練習形式は左起右進の形式たるべく、そして練習の場合左半分は横に書かせ、右半分は縱に書かせる樣に仕組むべきこと、(三)骨書を刷入して其の上を渡書させる部分と、直接に手本を見てそれを臨書させる部分とを適當に組合すべきこと、(四)模書と自書とを適當に組合せて、手本に依りすがつての練習から、漸次兒童自身の獨立書寫の方へ導く樣に仕組むべきこと等を列擧した。今ペン書の練習形式を仕組むに方つても、是等の諸項は全部其の儘之れを適用すべきものであるが、其の上に尙ほ用具がペンに變つたことから、又學年が尋常五年にもなつて、臂や手指も相當に熟れて來たことゝ、更に教材の選擇も、尋四までは、主として新出漢字やそれを使つて出來て居る語句だけであつたのが、今度は假名交文を可也採用することゝなり、同時に葉書や手紙、歌や佳言をも採り、是等は何れも特別の形に書くべきものである等、鉛

筆書に比して特別の用意と修練とを必要とすることになつたので、前掲の條件以上にペン書の爲めに特に考ふべき幾多の問題があるのである。左に是等の問題を順を追うて說明を試みよう。

第一　練習の行數及び字詰

鉛筆書のものとして、吾人は練習の行數及び字詰を次の如く說明した。尋常一二年にありては五分方眼、一行十二字詰のものを八行、尋常三四年では四分五厘方眼、一行十三字詰のものを九行、尋常五年以上では四分方眼、一行十五字詰のものを十行とする。尤も之れは手本、淸書、自書を共に合しての行數である。さてペンでは、前記鉛筆書程に多數を練習させるわけにはいかない事情がある。それは尋常四年迄は鉛筆書方の爲めに特別の時間を取らうとおもへば、大抵の學校では一週一時間位は取り得るであらうから、さういふ場合には、出來得るだけ多くの分量を練習させる樣に仕組むがよく、又特別の時間を取つた以上に、都合によつては讀方の中にも練習させ得ることであるから、傍々多數を練習させ得る樣に形式を仕組んだのであるが、尋常五年となると、學科の數も增して來て、ペン書の時間が取りにくいことであり、又他教科にも兒童の自働すべき領分も擴張されて來て、なかなか暇がないことになるから、書方まで家庭作業とはなしにくい事情にもなるので、先づ大抵は讀方に附帶し、讀方の時間中に片附けて進ませることを本體とせねばならず、萬已むを得ざる場合の外、家庭作業にしないといふ方針を立てねばならぬ。さうすると、練習の字詰行數は大に工夫しなければならないのである。それでペン字の大さは既に述べた如く、尋五では三分五厘方眼、尋六以上では三分方眼を適當とする。そして練習紙の大さは、矢張り尋四以下に用ひたと同樣に、菊判形を適當とするのであるから、其の寸法內に此の方眼を配置すると、尋五では十七字、尋六以上では二十字となるので、之れを鉛筆書のものに比して一行について二字乃至四字を增して來たのであるが、其の代り練習の行數をうんと減じて、尋五六共に六行宛となし一頁に二單元を收めるのである。尙ほ實際兒童の練習する字數を比較して見ると一枚の練習紙に習ふ字數が、鉛筆にありては、尋一二では一頁一單元で八十四字、尋三四で同上百〇四字、尋五以上では同上百三十五字となり、ペンでは尋五が半頁一單元で八十五字、尋六以上では同上百字となるのである。

今通覽の便の爲めに、前記の諸項を一覽表に纏めて見ると次の通りとなる。

種別		學年	方眼	字詰	練習行數	一枚の練習字數
鉛筆		尋一二	五分	十二字	七行	八四字
		同三四	四分五厘	十三字	八行	一〇四字
		同五以上	四分	十五字	九行	一三五字

ペン	巻五	三分五厘	十七字	五行	八五字
	巻六以上	三分	二十字	五行	一〇〇字

第二　縱書と横書との按排

縱書横書の問題に關しては、二樣の意味がある。其の一は練習法としての縱書と横書とである。即ち兒童に練習させる場合、從來の通り(一)イ(右起り左進の縱書法として、順次に別の字を縱に連續して練習させるか、それともロ右起りをやめて、左起り右進に同樣の練習をさせるか、又は(二)横文の如く左起り右進に、横に同一の字を反復して練習させるがよいかといふことである。之れに關して文字の大小用具の如何に拘はらず、練習法としては吾人は(二)の方法即ち左起り右進に同一の字を反覆して練習させるがよいと考へるのである。其の二は仕上げの書振りとして、(一)右起り左進の縱書にさせるがよいか、それとも(二)左起り右進の横書にさせるがよいかといふことである。即ち練習の方法としてではなく、普通の經まつた書寫物の書振としてである。今日の書簡の體裁としては從來の如く尙ほ右起り左進の縱書にすることを以つて本體としなければならないとは考へるが、然かし時勢の進歩に連れ、左起り右進の横書法も次第に多く用ひられる樣になつて來たことも事實である。今其の事情を說明して見ように、(一)數の記述法が、從來は漢數字を用ひて縱書にして居たのが、今日では多く算用數字を用ひて横に書く樣になつて來たこと、(二)簿記の數字は全く算用數字のみを用ひ、且つ名目要項等も横書にして記入する樣に仕組まれて居て、それが漸次普及して來たこと、(三)今日では外來語が非常に多くなり、是等は勿論假名で表記することが出來ないではないけれども、往々原語たる横文字を其の儘書き込む必要あること、(四)筆記には殊に横文字を挿入すること多くなつたので、筆記といへば殆んど大部分横書にする樣になつたこと、(五)ペンがが普及し、インキをつかふことが廣まつて來たにつれ、縱書が甚だ不便であることを感じて來た。何となれば洋紙は和紙の如く速くインキを吸取らず、若し縱書にして安全を期しようといふと、一行每に吸取紙をあてねばならぬ、なか〳〵の手數である。それを横書にすると、最後の一行だけ吸取らせればよいので、手數が省けるといふ樣に、いろ〳〵の事情から横書法が段々と用ひられて來た。さうして見ると、小學のペン書練習の形式も、單に縱書だけを墨守して居るわけにはいかぬ。幾分横書の練習をも併せ課する樣に考へねばならぬのである。縱書と横書とはペンを進めて行く調子に幾分の差異があつて、何れも別々に練習の効を積まねばならぬので、縱書にさへ熟練すれば、横書は自から之れを能くするといふ譯にはいかぬのである。

それで横書式に充てる材料は、一字一字の漢字や語句をそれにあてること固より不可ではないけ

れども、主として假名交り文をあてるのが適當と考へる。之れ仕上げの書振りとしての横書は、實用的の書寫物であつて實用的の書寫物には漢文でない以上、漢字のみのものは少なく、多くは假名交りの文であるからである。

それから横書にする場合の字體に關して、特に左へ傾いた斜體の字を用ゐるがよいと說くものもあるけれども、之れは特別に斜體の文字を練習させる必要はないと考へる。横書の書寫物は一見斜體の字らしく見えるけれども、之れは正體の文字を書いて行く積りでも、手指の運動の關係上自から點畫が斜體となるのであるから、之れは寧しろ自然の熟練に委すべきもので、何も特別の練習をさすべきものではないと考へる。又横書の場合の紙の使ひ方に就いては、既に第六章第三節第五において詳述してあるから參照してもらいたい。

第三　罫線の割方

縱書の書寫にしても、横書の書寫にしても、純たる白紙へ眞直に綺麗に書く技能を得させることが結局の目的である。所で實用上用ひられて居る紙には、罫を引いたものと只の白紙とがあつて、葉書などは白紙であるが、それに場所取よく綺麗に書くことは、なかなかに熟練を要する技である。それで練習の方便としては、縱横に線を劃した方眼紙に書かせることから出發することは、方法上當然のことで寧しろ小學校では此の方眼紙上に練習させることを以つて本體とし、大部分之れによらせねばならぬものと考へる。殊に尋四までの鉛筆書方では、全部方眼を用ひねばならぬものと考へるが、尋五のペン書になつては、段々と兒童の獨立書寫の力を高める爲めに、漸次其の線を減じたものをも加へ、遂には葉書にも又は純たる白紙にも、相當に書き得る樣に無罫の紙に書かす練習も、幾分加味する樣に仕組むことが必要と考へる。又此の學年あたりからは、手指の發達から見ても相當にそれをなし得るのであるから、練習形式の研究上、之れも一つの條件として考へて置かねばならぬことである。

今罫線の割方の種類を擧げて見ると、次の三種となる。(一)縱横共に罫線を劃したもの、所謂方眼紙形のもの。(二)縱か横かの一方にだけ線を劃したもの、所謂罫紙と稱する形のもの。之れには縱罫のものと横罫のものとの二種ある。(三)全く無罫のもの、所謂白紙である。而して尋五年では、其の(一)を最も多くし、其の(二)及び(三)を若干加へる位にするが、尋六になつては、漸次其の(二)及び(三)の分量を增し、高等科になつては一層之れを增して、其の(一)を五、其の(二)を三、其の(三)を二位の割合に仕組むがよからうと考へる。

第四　骨書法と臨書法との適用

吾人の考案に係る硬筆書方の練習形式は、(一)左起横書の練習法を採つたことゝ、(二)骨書法を適當に利用したことの二つが殆んど生命である。然かしながら、練習は遂に進んで、單なる臨書法に入つて相當の成績を收め得る樣に、兒童の書寫能力を高めなければならず、一層進んでは獨立して相當に書ける樣に發達させねばならぬのである。それで尋常四年までは必らず先づ骨書の上を渡書することから入り、全體の半分は先づ骨書法によつての練習をさせる樣に仕組み、そして何時も同樣の形を繰返して練習さしたことであるが、尋五のペン書になつても、無論此の骨書法を重用しなければならぬので、先づそれを以つて本體とすることに於いては何等變りはないけれども、其の適用上に種々變化をつけて、漸次兒童の獨立書寫の能力を助長する所以の方法を考へねばならぬのである。即ち尋四までは、何時も一行だけの骨書と自書とを繰返して練習さしてあつたのを、尋五のペンでは二行をつゞけての骨書と自書とを繰返す樣にする部分も拵へるのである。此の方法は主として假名文に適用するのが便利である。

それから臨書法も、ペン書になつては種々變化をつけて適用することが、兒童の力を高める上に有効なのである。尋四までは同一の行を幾回も繰返して練習さして居たのであるが、それを二行宛續けて練習さして、それを繰返さす樣にしたり、或は進んでそれを三行に增したり、遂には一文全體を續けて臨書させる樣にしたりするのである。之れ臨書の範圍が廣くなれば廣くなる程、書寫の調子もよく會得され、又それだけ兒童自身の自書の能力を練磨することにもなるので、此の變化を圖ることは、決して單に嫌厭を防ぐだけの方便ではないので、練習上貴重なる價値ある所以なのである。

第五　基本練習の附設

手本によるペン書の練習に入るに先ち、基本教授として臂をならすこと、基本畫の用筆法をしつかりと授けること、並に基本文字の書方を正確に授けて、先づ其の基礎を作るべき必要を痛說したのであるが、其の場合にも述べた如く、其の基本教授なるものは、單に一回の教授を以つて直ちに成効し得るものではない。爾後引續き細く長く反覆練習させることによつて、逐次其の効を留めるものであるから、毎時間少し宛之れを練習させる方案を立てねばならぬのである。此の場合之れが爲めに特別の用紙を用意すること、固より出來ぬことではないけれども、用意の手數からいつても、管理上の便否からいつても、之れを練習帖の中へ編み込む樣に工夫することが甚だ便利である。即ち練習帖の一隅に、適當の欄を設け、それへ臂の練習をさせる爲め楷書筆意の四種の線と行書筆意のそれとを刷入し、又其の頁の手本文字に、比較的緣近き本文字の骨書と、比較的多く用ひられて

居る基本畫とを刷入して置いて、其の上を渡書させることによつて、一通り基本練習をさせてから、手本文字の練習に進む樣に仕組むことが有効と考へるのである。

第六　各種練習形式の實例

以上述べたる幾多の條件の下に、ペン書の練習形式を組立てゝ見ると、いろいろの形式のものが成立するので、鉛筆書のものの樣に單純ではない。之れが適用は教材の種類と學年の高下とによつて、夫々に適當なるものを用ひねばならず、又本體として最も多數の教材に適用すべきものと、副貳的のものとして若干之れを適用するものといふ樣に、實際用ひる分量に於いては、其の間自から大なる差異あるものではあるけれども、そは一々の教材によつて定まるもので、茲に其の全部を擧げ示すことは出來ない。それで茲では單に其の全種類に亘つて其の例を示すだけに止めるのである。

例一　は鉛筆の練習と同樣に、單に一行だけを數回繰返して練習させるもので、其の分量最も多きを占むべきものである。

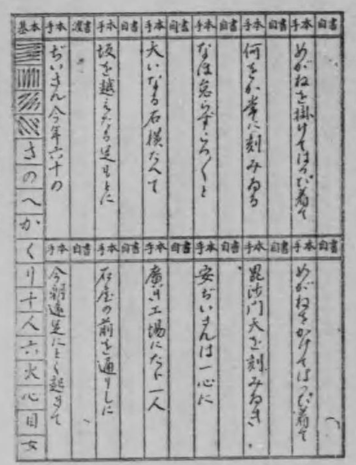
例二　は二行を續け、繰返して練習させるもの。

例三　は一行を單に一回だけ練習させるもの。

例四　は二行を續けて一回だけ練習させるものと、六行もの多數を續けて練習させるもの。

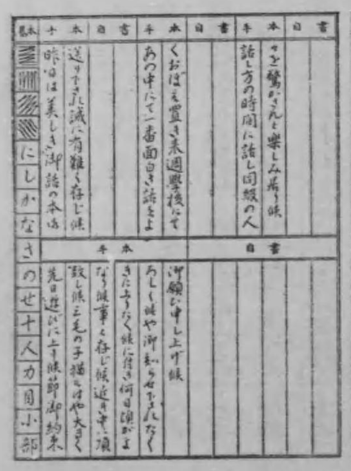
例一

例三



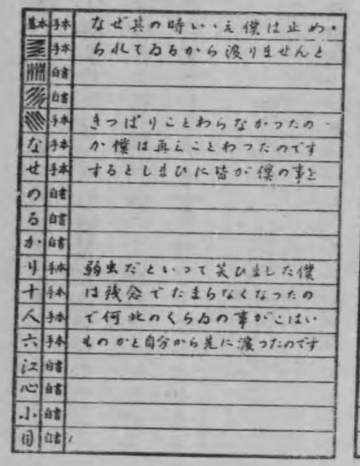
例二

例四

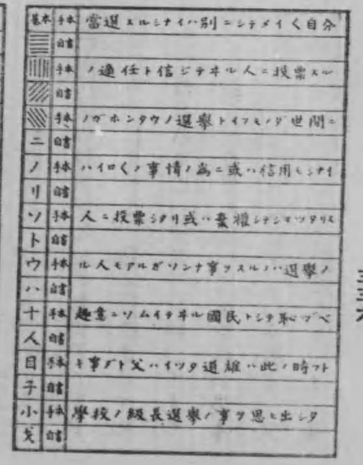


例五

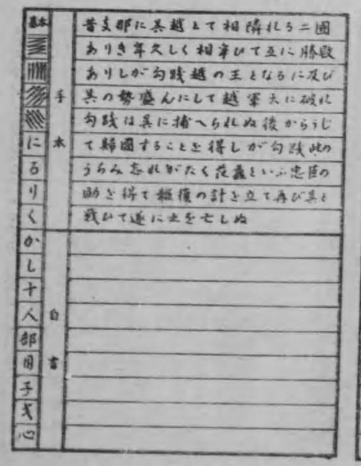
例七



例六



例八



例五は行のない白紙上へ練習させるもの。

例六は横書で一行一回の練習をさせるもの。

例七は横書二行、三行、四行を續けて一回だけ練習させるもの。

例八は横書九行もの多數を續けて練習させるもの。

第七節　練習形式による取扱

鉛筆書練習帖の使用は、第一に書寫能力を高めるにあり、之れが使用法は左前半は左起右進の横書法によつて練習し、右後半は左起縦書法によつて練習すべきものといつたが、今尋五に於いてペン書の練習帖を始めて使用させるに方つても、之れと同様に、第一に此の練習帖組立の趣意及び形式は、大體は鉛筆書の練習帖と等しいのであるが、其の形式は鉛筆のものに比べて、種々變化あるものが用意されてある。即ち鉛筆の方では、其の形式が縦書一行を反覆するもの一種だけに限つてあつたのが、ペンの方では、本體としては其れと同様のものを採つてあり、分量に於いてもそれが最も多いことではあるけれども、それ以外に二行を反覆すべきものあり、三行を繰返すものもあり、又時には一文全體を一時に書くものをも加へてあるし、又書振の方からいつても、鉛筆書方では、縦

書式のものばかりであつたのが、ペンの方では、横書式のものも若干は加はつて居ること、又鉛筆の方では、基本練習としては何等特別の用意をしてなかつたが、ペンの方では運筆の輕快な調子を會得することが極めて必要のことであるから、毎紙面に一行宛特に之れを用意してあること、それから練習の分量は鉛筆に比して稍減じてある等、大分異なつて居る部分もあつて、之れを使用して練習を進めて行くには、其の頁毎に練習法も幾分宛異なる所があるのである。

時間の配當は鉛筆書方と同樣に、ペン書の爲めに特別の時間を設け得る場合と、全然讀方に附帶して課する場合とで甚だ相異なるのである。今尋五に於いて假りに一週一時間宛時間を特設した場合のことを言つて見ると、吾人の主張する練習帖は、單元の數は五年一學年間の分として七十二單元あつて、之れを練習帖に排列して見ると四十八頁となるのである。頁數を一ヶ年間の教授週數正味三十五週に配當すると、毎週約一頁八分宛とつて、其れに排列されて居る字數は手本の字數が六十一字となり、兒童の練習する字數は六百十字の多きに達するのである。毛筆書を扱つて居た頭で鳥渡考へて見ると、大變な仕事の樣に感ずるけれども、手本文字六十一の中、説明示範を要する新字は大抵平均十二字位宛であり、又中には假名交り文も大分あるので、字數が多いといつても、さう大したものではない。加之ペン字は字の大さが小さいのに、其の運筆は何所までも輕快を尚ぶのであるから、書くには速いのであり、又六百十字の中百二十字は骨書の上を渡書するもので、兒童の自力を以て書くべき字數は四百九十字に過ぎないのである。それで吾人の親しく經驗した所を以つてすれば、一週間に於けるこれ位の練習分量は決して過重ではないといふことを信じて居るのである。只餘り説明の爲めに時間を空費することは戒しめねばならぬことであるし、又兒童の運筆が毛筆の如く重々しい態度を取つて居ることは、何所までも矯正せねばならぬことである。

次に讀方に附帶して取扱ふ場合の時間は如何かといふと、讀本一課の取扱に配當されてある三時なり四時なりの時間中から、十五分乃至二十分の時間を割けば、其の課に聯絡して採つただけのペン書はたしかに練習させることが出來るのである。吾人の編纂したペン書の練習帳は、大體に於いて一課に就いて一行宛、即ち十七字宛を採つてあるので、其の十七字中新字として説明示範を與ふべきものは、僅かに四五字に過ぎないのであるし、又兒童の練習すべき字數は、渡書が二行、自書が二行、清書が一行、計五行で、字數は一行十七字計八十五字である。十五分乃至二十分間に、ペンで八十五字を書くことはさう大した仕事ではないのである。

次に此の練習帳によつて實際に之れを取扱ふ順序方法を述べるのであるが、便宜の爲め時間を特設した場合のものに就いて述べ、讀方に附帶して課する場合のものは適宜之れに準ずべきものとす

る。それで取扱方大體は既に述べた鉛筆書の場合のものと同様であるが、只ペン書では特に基本練習の一段階を設ける必要を感ずるので、次の四段に分けて扱ふのである。

第一　基本練習

ペン書は手指の輕快なる運動を極めて必要な條件とするのであるから、手本文字の練習に入るに先だち、特別に基本の練習を課するがよいといふことは、既に詳細に述べた所である。そこで、今は單に之れを實際に取扱ふ方法に就いて述べるのであるが、此の仕事を始める前に、

(一)姿勢、腕法、執筆　姿勢、腕法、執筆を正しく取らせることは、何れの場合に於いても忘れてはならぬ大切なことである。吾人は寧しろ此れを以つて書方練習の一つの仕事と心得さして居るのである。それも單に之れを正しくせよとの命令を與へるだけでは駄目なので、一々に指示を與へるがよい。例へば「淺く腰掛けて……足をきめて……膝を開いて……背を眞直にして……顎を引いて……前へ懸つて……腕を構へて……ペンをきめて……」と合圖を與へるのである。之れによつて兒童はかねて教へられて居る通りの正しい姿勢、腕法、執筆をなして、書寫の準備をなすのである。

次には、

(二)臂の練習　臂の練習は之れを二段に分けてやるのである。一は臂の迅速運動をさせるので、前に詳說した如く、前臂肘の部の肉塊を支點として、縱横左斜右斜の四方向に迅速に臂を動かすのである。此の場合教師は適當の速さで呼吸の合圖を與へ、其れに合して兒童は臂を動かすのである。其の回數は四方向共に各十回位宛反覆させる。即ち教師は可成の速さで一二三四五六七八九十と呼唱を唱へる。兒童はそれに合して縱の方向に十回空書し、次の十呼唱に合して横に十回、次の十呼唱に合して左斜に十回、次の十呼唱に合して右斜に十回だけ臂を動かして線を空書するのである。此の場合教師は初の十回よりも、次の十回の呼唱速度は幾分宛速めてこれを與へる樣に加減して、臂の動く速さが漸次發達する樣に圖らねばならぬ。斯くて兒童が段々熟練して來るに從ひ、教師は時々其の呼唱を止め、兒童だけに小聲で一齊呼唱をやらせて、全生の呼吸の一致を圖る樣に進めて行くがよい。

他の一は此の四方向の線を、ペンによつて實際に引かすことである。之れが爲め練習帖の最初の欄には、其の骨書を入れてある。そして其の骨書は手本の字が楷書文字である場合には、直線のものを入れ、行書や平假名交りの文であつた場合には、曲線のものを入れてあるが、其の骨書の上を渡書させるのである。渡書の速さは、到底前項迅速運動の速さと一致させることは出來ないが、然かし出來得るだけ手速く運筆させるのである。兒童の渡書は必しも骨書と一致させようと努めなく

てもよい。强ひて一致させようとすると、勢ひ運筆が鈍くなつて顫動を起し、筆跡が甚だ見苦しいものとなる許りでなく、運筆が非常に遲くなるので、それはペン書練習の本旨でないからである。而して此の渡書の場合にも、最初は教師はそれに適當な速さで呼唱を與へ、それについて運筆させる樣にし、熟練するに從つて兒童の自由に任かせる樣にするがよい。次に引續いて

(三)基本畫及び基本文字の練習　基本畫の方は、其の手本文字中に或種の基本畫が多く含まれて居る場合に限つてそれを提出してあるだけで、其の他は多く基本の文字を取つてある。文字の方は手本の方が漢字だけを練習させる場合には、基本文字も漢字だけを擧げ、片假名交り文の場合には、片假名と漢字を、平假名交りの場合には平假名と漢字を擧げてある。又手本の書體が楷書の場合には、基本文字の漢字も楷書とし、手本の文字が行書の場合には、基本文字の方も行書を擧げてある。何れも其の上を渡書させるのであるが、然かし此の方は運筆の呼吸を合圖で示すといふことはしない。前項で練習さした臂の練習を應用して、兒童銘々が自己の呼吸によつて渡書するのである。只全然之れを自由に任かした場合には、なか〳〵輕快な呼吸を收得することが困難なものであるから、最初は教師が板上で白墨を以つて模範書を示して、其の呼吸を直觀させ、之れに模倣して渡書させる樣に躾け、段々調子を會得するに及んで、兒童の手に任かすといふ風に仕事を刻んで行くがよいと考へる。

一體ペン書は輕快な運筆呼吸を會得させることが最も大切な仕事であるが、手本文字の練習によつて兒童がこの呼吸を自然に體得することはなか〳〵困難である。それかといつて教師が其の都度何時も一行全體の模範を示すといふことも、時間が許さない。それで此のことはどうしても此の基本練習を有効に運用し、之れによつて其の目的を達する樣に工夫することが、此の仕事の爲めに最も經濟的であり、且つ最も適切な仕組みであると吾人は考へて居るのである。

第二　說明示範

(一)教材の分節　一時間の教材として配當された新字が、假りに十二字ありとしたら、其の全部を一度に說明示範を與へることは無理である。當然分節しなければならぬ。さて其の分節に關しては、漢字だけのものと假名交り文とで、多少注意を異にする。漢字のみのものは十二字であるから、六字宛に分けるといふ樣な、器械的の分節ではよくない。字數の方では假令幾分の多い少ないがあつても、語句として纏まりのよい個所を見定めて區切るがよい。それが爲め十二字を七字と五字に分節するが如きことになつてもよろしい。それから假名交りの文の方は、一行のものは殆んど分節する必要はないが、二行もの三行ものは、文意の上に適當の個所で區切り、六行もあるものは、大

體二行目三行目あたりの適當な個所で區切をつけて扱ふ樣にすべきは言ふまでもないことである。

(二)讀方の復習　讀方は殆んど之れを省略してもよい位の仕事であるけれども、然かし兒童が其の讀方を忘れて、器械的に其の書方を練習して居る樣なことがあつては無駄でもあるし、又書取といふ意味から此の仕事を眺めた場合には、其の讀方は最も重要な仕事であるから、矢張一通り其の讀方を復習する方がよいのである。さて其の讀方は讀本に聯絡した教材であれば、既に讀本で授けた讀方があるのであるから、其の通りに讀ますことが勿論當然のことではあるが、それにしても、語句によつては往々別な讀方を有するものもある。其の語句を書方の教材として取つた場合は、其の語句が讀本の內容とは分離して、宙に浮いた形になつて居るのであるから、讀本で授けた讀方をも授けて、應用の道を拓くことを併せ注意することが適切と考へる。又讀本以外に日常須知の文字文章として、特に採つた教材に關しては、其の讀方を確かに教授してから、其の書方に移るべきである。又連續した文章も、全文の讀方と意義とを復習してからペンを下さすべきものである。

(三)書方の說明示範　適當に分節された五字なり七字なりに就いて、運筆や整形に關する心得の說明と示範とを與へるのであるが、何分ペン書は一時間に扱ふべき字數が比較的多く配當することになつて居るから、假令時間を特設して扱ふとしても、毛筆書の樣に一字一字に丁寧な說明示範を與へて居る暇はないのである。殊に運筆の方は一字一字の各點畫に就いて取扱つて居る譯にはいかぬ。それは基本畫や基本文字の練習の方に於いて、細く長く練習させて其の會得を圖るとして、手本文字の方は特に必要なるものに限つてのみ、說明を與へる樣にする方針を取らなければならぬ。整形上のことは實際に於いて運筆よりは比較的多く教授すべき必要を感ずるが、是れとてもさう詳細に取扱つて居るわけにはいかぬ。それで最も大切な注意一二だけをしつかりと教へ込む樣にするがよい。

說明示範の際には鉛筆書に使つたと同樣の小黑板に方眼を劃したものを使ふがよい。但し方眼の數は四行五段に線を引いて、合計二十字までを同時に示し得る樣に用意する方が便宜である。之れ尋六以上では、一行二十字の練習形式を用ひることになつて居るから、其の一行全部を一枚の板面に示し得る樣に用意して置くことが便利なのである。そして矢張り方眼內に十字線を劃して置くことが、形の說明や各點畫の位置を說明するのに都合がよい。そして其の方眼內に矢張白墨を以つて模範書を示すのであるが、此の際教師の努むべきことは、ペン書としての運筆の呼吸を適切に示すべきことである。

今實際に取扱ふ通りの順序で說明して見ると、教師は先づ其の書くべき字が縱中心線を整ふべき

種類の字であるか、但しは横中心線を整ふべき字であるかといふ、整形上の根本となるべき要點を見定め、それによつて方形内の縦中心線なり横中心線なりの上へ、赤のチョウクで一線を引いて其の根幹を示し、それを便りにして輕快なる運筆で、其の方眼内によく嵌まる樣に其の字の範書を示すのである。それが出來たらば、今度はそれに向つて、運筆ではどの點畫をどう注意して書くべきかを話すと共に、其の點畫の上を綠のチョウクで渡つて色をつけ、其の色によつて特別の注意を促がすのである。それから整形の方は其の模範書に對して赤のチョウクで圖解を施し、是れも一目瞭然と整形上の注意を知ることが出來る樣にして見せるのである。斯くして一字の取扱が終れば、次の字に移り、相續いて第一小分節の新字五字なり七字なりを同樣に取扱つた後、兒童の練習に移るのである。

尙ほ一字一字の說明示範が終つた上は、更に一行なり全體なりの字體の大小及び點畫の統一に就いて說明を與へ、假名交り文にありては、新字の書方の說明示範は全く前同樣であるが、更に漢字と假名との組合せの上に就いて、特に指導する所がなければならぬと共に、假名交りの文は、最初から縦書の練習法を取らせ、以つて一文として書寫の調子を會得させる樣にすることが得策なのである。之れが爲め敎師は一字一字の說明示範の後には、必ず縦書としての範書をして見せることが必要である。

又横書の形式のものを始めて扱ふ場合には、之れが爲め又特に指導する所がなければならぬ。指導の最も主なる事項は、書寫が段々右へ移るに從ひ、手を右へ移すべきことである。之れ書寫が右へ移つて行くのに、若し手を元位置のまゝにして置くと、勢ひ手首を右へ捻つて書かねばならぬことになり、さうした結果、字の中心線が段々左斜に傾いて、形の不整を來すのみならず、ペンのニッブも右側のみ强く當ることになつて、點畫の表はれが非常にまづくなるのである。それかといつて一字を書く毎に一々臂を移動さして居るのは、亦甚だ煩雜であるから、手首の加減で無理なく統制し得る範圍は續けて書くべく、大抵四字乃至五字毎に臂を右へ進めるのが適當である。此の點は連續した横書の爲めに特に指導し、又之れを嚴守せしむべき事項である。又臂を移動させる代りに、紙の方を左に移すことも出來るのであるけれども、之れは手の移動では支配の出來かねる程に幅の廣い紙を使ふ場合には、當然さうすべきことではあるけれども、紙幅が僅かに五六寸の練習紙を使ふのでは、紙を移す習慣は養ふべきことではない。それに横書となると、どうしても字心が左へ傾いて、左斜體の字となり易いのであるが、之れを放擲して置くと、其の癖が進んで遂には書體が極端な斜體に陷ゐつてしまつて、甚だ好ましからぬ書風となるから、之れは成るべく其の度を高

めぬ樣注意させねばならぬ。

それから縱橫の劃線なき白紙形、例へば葉書などに自由に一文を書かして見ると、隅の方へ小さく狹く書き纏めてしまふのが、兒童の常態の樣に思はれる。これは一枚の書寫物として見た場合、甚だ見苦しいもので、纏まつた書寫物は、紙面と文字の大さや配置がよく鈎合つたものでなければならぬ。之れは大切な注意である。殊にペンは比較的小さな字が書ける用具であるから、鉛筆や毛筆に比べると一層其の弊に陷ゐり易いのである。其の他天地のあけ方、左右の餘地、行の改め方、起筆終筆の個所等に就いては、特に注意を喚起し、書寫物としての體裁を適當に保たせる樣注意させねばならぬことである。

第三　練習批正

第一小分節の說明示範其の他書寫上の注意を與へた後は、練習帖によつて實際にペンを下させるのであるが、さて愈々ペンを下す前には、今一度姿勢、腕法、執筆を正す必要がある。それから敎師から與へられた說明や注意は、確かと之れを心得て忠實に練習するでなければ、書寫能力の進歩は望み難いのである。無雜作無頓着のなぐり書からは、惡癖こそ生ずれ、進步向上は決して生れて來ない。練習に對する兒童の學習態度は極めて眞面目でなければならぬ。之れ練習上最も重大な要件であるから、特に之れを述べるのである。

さて吾人の仕組んだペン書の練習形式は、前揭實例(一)(二)の如く、渡書欄二、自書欄二、淸書欄一、計五欄で、兒童は手本の一字を此の五欄へ五字だけ書くことになつて居るが、實際練習の方法としては、漢字のみの頁は、最後の淸書欄は之れを殘して置いて、他の四欄だけを橫書で練習をさせ、淸書の一欄は其の時間に配當した小分節全部を橫書で練習し終つた後に、纏めて縱書として淸書をさせたいのである。即ち始は橫書の練習から出發して、遂には縱書の淸書に終る樣に仕事を進めて行くのである。但し假名交りの文の練習は、其の縱書式のものは最初から縱書に、橫書式のものは最初から橫書にさせることは既に述べた所である。

又敎材として採つた漢字には、單なる一字だけのものもあるけれども。大部分は二字を連ねた熟語である。たまに三字のものもあるが、之れが書方を練習する場合には尋常四年迄は一字一字に引離して練習さしたけれども、尋五以上のペン書練習にあつては、一字のものは其の一字だけを反覆して練習させるが、熟語となつて居るものは、其の二字なり三字なりを續けて縱に書かせ、其の語句を反覆して橫に練習させる樣にしたいのである。さうすると、字としての書方を練習すると同時に、語句の書取としての目的をも同時に併せ達することが出來て、一舉兩得のことゝなるからであ

る。

次に兒童練習中は、教師は絶えず机間を巡視して批正を與へねばならぬのであるが、若し共通の誤謬拙劣なる點を發見した場合には、適當に板上批正を與へることは勿論であるけれども、ペン書では成るべく個人毎に批正を與へることを本體として働くがよい。之れペン書の姿勢、腕法、執筆、の正否は、大に書寫能力の發達に關係深いことであるし、又運筆の呼吸を輕快ならしむることは甚だ重要なことであるから、特に此の點に關して各兒の情態を觀察し、一々適切なる指導を與へることが最も大切なる任務である。又批正には自己批正を奬勵すること必要である。即ち自書の二欄は兒童が獨立して書いた後は、必ず手本の字と比較して、其の及ばざる所、過ぎたる點、字心の整へ方、分位の方法等に關し、自身之れを發見して加筆することは、目と手との發達上極めて有効なことである。若し此の二欄を斯くの如く自己批正を行ふことは、餘りに時間を要する樣ならば、最後の清書に向つて、其の一行だけを自己批正に訴へる樣にしてもよろしい。若し此の清書欄を兒童に自己批正をやらせない場合は、教師一々之れを點檢して、適宜加朱して返附するのである。

斯くの如くして第一小分節の横書練習が終つたら、更に第二小分節以下に就いて、之れと同樣の說明示範と練習批正とを行ふのである。

第四　清書

練習形式最後の欄は清書用のものとしてあり、此の欄は何時も其の部の一單元を經め縱書として清書をさせるものであることは既に述べた所であるが、然かし此の練習帖内の清書といふのは、言はゞ第一次的の假の清書であつて、之れだけを以つては滿足する譯にはいかぬ。更に第二次的の本當の清書をさせる樣計畫する所がなければならぬ。それは練習帖とはなれた特別の清書用紙を用意し、それにうんと綺麗に清書をさせるのである。其の清書紙は豫じめ印刷したものを用意することが最も望ましいことではあるけれども、これは經費を要することであるから、誰にもすゝめるわけにはいかぬ。そこで最も行はれ易い方法は、ペンのよくきく質の洋紙を選定し、之れを所要の寸法に切つて銘々に作らせるのである。即ち尋五では三分五厘方眼で、十二行十七字詰、尋六以上では三分方眼、十四行二十字詰のものが最も多いのであり、其の他縱線のなきもの、又横線のみで縱線のなきものあり、又單に輪廓のみのものもある。夫々其の時々に寸法を明示して兒童に作らせるがよい。圖畫で定規を用ひ、製圖的の稽古をして居る子供の作業としては、寧しろ適當の仕事であると考へる。

特別に用意した紙にさせる第二次的の本清書は、一單元の練習を終はる毎に、其の單元を十二行

なり十四行なりを繰返して書かせるとすると、それが爲めに著るしい時間を要するので、之れは實際の事情が許し難いことである。それで四單元なり、六單元なり、七單元なり繰返して書けば、丁度其の行數にはまりのよい單元數だけを練習さした後に、一枚宛淸書をさせる樣にするがよい。例へば尋五では淸書紙が十二行であるから、四單元の練習の終つた後、其の四行を三度繰返して書かせると、丁度十二行となつて都合がよいから、其所に一枚の淸書をさせる樣にするとか、又六單元を終へた所で、それを二度繰返して書かせる樣にし、尋六では十四行であるから、七單元を終へた所でそれを二度繰返して書かせる樣にするのである。而して此の場合の書振は、縱書式のものは普通の方法の如く右起り左進みに書かせ、横書式のものは無論左起り右進みに、そして上から下へと書かすのである。

ペンの淸書は概して毛筆や鉛筆の淸書に比べて、美しく見えるものである。之れに向つては加朱することなく、只評語を附したまゝ返附して永久に保存させるがよい。尙ほ淸書の場合ペンの良否はいたく其の成績に關係するものであるから、特に吟味さして最もきゝのよいのを使はせねばならぬ。

第八節　用具の製法及び選定

第一　ペンの製法

ペン先製造の順序は、(一)原板の製造、(二)打貫作業、(三)燒入れ燒生し、(四)研磨及び截頭、(五)色附の諸工程を經て出來上るのである。左に其の要點を說明しよう。

(一)原板の製造　ペン製造に用ひられる材料は、アルミニユームを使ふものあり、又金を使つて作つたものもあるけれども、主として用ひられるものは鋼鐵である。坊間に賣つて居るペンには、金色のものもあり、鐵色のものもあり、靑光するもの、黑光するものなど、其の色合は種々雜多であるけれども、之れ等は何れも鋼鐵で作つたものに色附をしたものである。

我が國のペン製造業は近來頓に進步して、漸く舶來品と相拮抗するだけの製品を作り出す樣になつたけれども、原板製造用の鋼鐵板は、今日尙ほ主に英米からの輸入品を使つて居るのである。それで幅の廣い大形の鋼鐵板から、小さなペンを作るには、直ぐにペンの形に切り取るわけにはいかぬ。先づ其の鋼鐵板をペンの長さを幅とした細長い紐帶狀のものに截斷するのである。そしてそれを金屬製の箱に納めて、火爐の中に投じ、徐々に燒鈍法を行つてから後、又徐々にそれを冷却させ

る。さうすると鋼鐵が幾分軟かくなるのであるが、しかし此の作業の結果として、其の鋼鐵板面にスケールが着くから、之れを稀硫酸液の中に浸してそれを除き去り、次に其の鋼鐵板を木製の桶に入れ、水と小石とを混ぜて、鋼鐵板面が殆んど銀色になるまで器械的に磨き上げる。それからそれをルーラーにかけて、ペンを作るに適當な厚さに壓搾するのである。これが先づ原板製造の大體の工程である。然かし此の仕事はなかなか大仕掛でもあり、又困難でもあるから、ペン製造家は、磨き上げた原板を買ひ入れて、其の以後の工程だけを加へて作り出すものが多いのである。

(二)打貫作業　磨き上げた原板を自働送りに裝置してあるプレッスによつて、それを大體ペンの形に打貫き、スクルー、プレッスペンの記號や、自家の商標などの文字を打込み、次に打貫機でペンの鑽孔を打貫くのである。此の鑽孔はペンに彈力を與へ、且つインキを流出させるに必要なものである。それが濟むと、又徐々に燒鈍しを施し、鋼鐵が軟靱性になつた所で、之れを壓搾機にかけて平板狀であるものを、半月形に彎曲させると同時に、壓搾を加へるのである。此の作業によつて、外見は略ぼペンに見える樣になるのである。

(三)燒入れ燒生し　以上の工程で出來たものは、其の質からいつても、其の形からいつても、とても使用に堪へるものではない。そこで鋼鐵の質を適當にする爲めに、燒入れ燒生しを行ふのである。燒入れは最も大切な仕事であるが、其の法徐々に熱を加へて、約二三十分間で薄赤色になる樣に熱してから、それを油で冷却させる。それが冷め切ると、今度は其の油氣を除去しなければならぬ。それは回轉して居る桶の中へペンを入れ、遠心力の作用で器械的に油氣を取るのである。然かし此の作業は完全に油氣を取り去ることが出來ないから、更に之れを沸騰して居る炭酸曹達の溶液中に入れる。さうすると完全に油氣が取れるのである。

斯樣にして燒入したペンは其の質が非常に脆くなつて居るから、續いて燒生しを行ふのである。燒生しには、木炭火を用ひる。即ち火爐の上に回轉して居る筒の中へペンを入れ、徐々に回轉させつゝ行ふのである。

(四)研磨及び截頭　以上の工程で出來たペンは、其の尖頭が粗暴になつて居るから、之れを細い金剛砂砥石で研いた後、之れを稀硫酸液の中へ投じて、表面に附着して居るスケールを除き去るのである。さて稀硫酸液から出したペンは、直ちに之れを水桶中にある荒目の篩に入れ、之れを回轉しつゝ洗つてスケールなどを篩ひ落してしまふ。次に之れを特種の廣い裝置をしてある回轉桶の中に入れて、ペンの光澤を出すのである。此の仕事に約七八時間はかゝる。斯くて最後にペンの尖頭部を截斷するのであるが、此の截頭の巧否はペンの生命の繫かる所で、ペン製造中最も肝要な仕事で

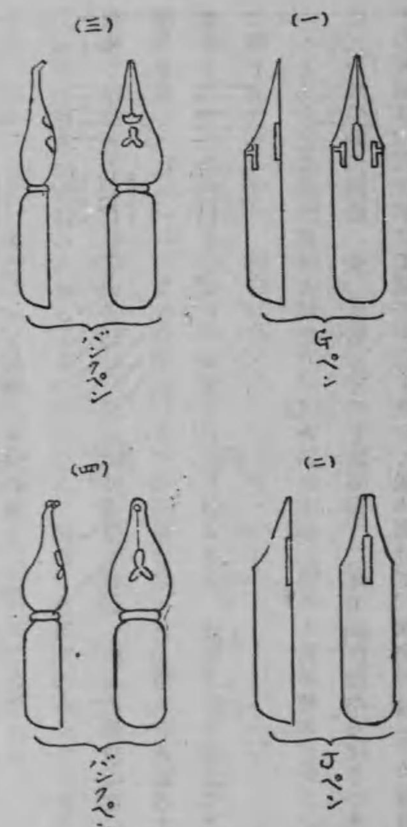
あるから、之れに使ふ刄物裝置は極めて精細なものでなければならぬのである。

(五)色附　尖頭截斷されたペンを再び廣い裝置をした回轉桶に入れて、五時間乃至六時間位仕上げの研磨をかけるが、それが十分研磨された所で、今度はそれの表面に色附をするのである。其の色は前にも述べた如く、金色、茶色、鐵色、青光、黑光いろいろあるが、之れは自由自在に附け得るのである。

第二　ペンの種類と其の選定「附」ペン軸

ペンの種類は製造の材料からも分けることが出來、又全體の形や色附などからも區別することが出來るけれども、是れ等の分類は、字を書く關係からいへば何も價値はないのである。書寫作用の關係からいへば、ペンの尖頭の構造によつて分類することが最も意義あるのである。ペンの尖頭の構造を仔細に吟味して見ると、大別すれば二種となり、更に之れを細別すると四種となる。左に其の圖を示さう。

(一)と(二)とは尖頭が眞直な種類で、(三)と(四)は尖頭が曲つて居る種類である。而して(一)と(二)との區別は、(一)は尖頭が稍鋭く尖つて居るものであるが、(二)は尖端が稍平らになつて居るのである、(三)と(四)との區別は、(三)は單に尖端が少しく曲つて居るだけで、紙面に接する部分が少しく彎形をなして



居るものであるが、(四)は同じく曲つて居る上に、尖端の背の部から、腹の部へ打込を與へたもので、背の部には凹陷を生じ、紙面に接する腹の部には圓形の小突起が生じて居り、其の突起の頂が紙面に接するのである。然かし此の四種に通じて、尖頭の構造上注意されて居ることは、何れも尖頭の腹背からも、左右からも、皆稜角を擦り落して、角のない丸味のあるものにしてあることである。之れは紙との接觸をよくし、且つ移動に便利ならしむる上に、必要缺くべからざる構造なのである。若し何れかの一方が角張つて居たとすると、紙に引掛つて使ひにくいことになる。錆びついたペン先が、紙に引掛つて使ひにくくなるのは、錆によつて尖端面が角立つからである。

それから尖端の構造や、彈力の强弱と、點畫の現はれとの間には、當然密接な關係があるのである。先づ構造と點畫との關係に於いては、左の(一)と(二)とを比べると、其の(一)は横線と縱線との間に、固より相當の區別がつく、即ち横線は細く縱線は太く現はれるのであるけれども、其の區別は左程著るしくないが、其の(二)はそれが甚だ著るしく異なるのである。何となれば、此の二者共に横線をひく場合は、ニッブ間の溝が閉ぢられて居てインキの流れも細く、紙面の接觸部も狹い一部分たるに過ぎないから、其の細

い接觸部だけにインキを移して行くので、其の現はれが細く出來るけれども、縱の線になると、其の(一)は溝が左右に開いて、多量にインキを流出させる上に、尖頭の幅の殆んど全部が紙面に接することになり、其の上に溝の開いた幅が加はるから、横線よりはうんと廣くなり、其の全部へインキを移すのであるから、縱線は著るしく幅を增すのである。それが其の(二)になると、尖端が平になつて居るだけ、其の(一)よりはうんと幅廣くなるのである。それであるから、其の(一)で書いた字は、左程でもないが、其の(二)で書いた字は、丸で活版の文字の樣に横が細く縱が太い畫の字が出來るのである。次に其の(三)と其の(四)とは、横線と縱線との間にさう大した變化は見えず、二者殆んど同一の現はれを示すのである。そして其の(四)の方は、構造上腹部を膨らましてあるので、紙面に接する部分は、其の(三)に比して稍狹く、從つて幾分點畫も細く出來るのである。

次に彈力との關係を考へると、同一のペンでも、彈力の强いものは溝の開きが狹いから、縱線がさう太くは現はれず、彈力の弱いものは、溝の開きを多くするから、縱線が太く出來るのである。

そこで以上四種の中、小學校の兒童に使はすペンは、何れがよいかといふと、經濟上からは何れも殆んど大差ないのであるから、構造上から考へて、吾人は其の(三)が最も適當して居ると考へる。其の(一)Gペンもわるくはないけれども、初步のものには使ひにくいので、力を入れて使ふと縱横の

畫の幅が大分異なつて、字に品がなくなる。其の(三)は普通に銀行ペンと稱するもので、今日内地品として作り出されてあるゼブラペンとか、或は日光ペンとか稱するものは、皆此の種類に屬するのである。日光ペンの一種に、鐵色銀行ペンといふのがあるが、彈力が非常に强く、點畫の現はれが極めて細く出るペンである。うんと細かな字を練習させるには、之れもよいと考へる。之等は以前は舶來品に比べると、内地品は丸で物になつて居らなかつたのが、近頃では製作の技が急速の進歩をして、少しも遜色なきまでに進歩したから、内地品を使はせる方がよろしい。

「附」ペン軸　ペン軸には、太くて短かいもの、細長いもの、軸頭が太くて軸尾の細いものなどいろいろあるが、五六寸位のもので、軸頭の部にコルク又は護謨を貼つてあるものがよろしい。そして目方も成るべく輕いものゝ方が適當である。

第三　インキ

筆記用のインキには青色のものと赤色のものとある。青色インキは、洋靛(ペレンス)六分と蓚酸一分との割合に混ぜ、之れを粉末として、それに少し宛水を加へてこねまぜ、全く平滑な糊狀塊とし、これを多量の蒸溜水に溶解して作ることが出來るのである。

赤色インキは、ブラジル木の澱粉二封度を、三ゲレインの醋酸中に入れ、其の溶液を一封度半に煎つめ、明礬一封半を加へ、攪拌して製することが出來るし、又別法としては、ブラジル木四分を六十分の水に溶解し、三十六分に煎つめ、アラビヤゴムの四分の一及び鹽化錫の八分の一を混和して作ることも出來る。

すべて筆記用インキの品質は罎中に長く貯へておいても變色せず、酸性が適度でペン尖を腐蝕させず、又紙中に浸潤したり、紙背に徹透したりしなくて、ペン尖に殘つたインキが乾いた時に、そこに薄皮を生ずるのがよいのである。若し乾くに從つて固結して粉末がつくのは、粗惡な品である。又インキは初め書いた時は、其の色薄いけれども、段々酸化作用を受けて終には濃厚になるものである。インキ製造の術も非常に進歩して來て、内地品で優良なものがいくらもある。丸善のセンチュリーとか篠崎のチャンピオンなどはよい品である。

第四　用　紙

紙の製法や種類に就いては、既に鉛筆の部に於いて詳述したことであるから、茲には之れを省略する。只之れが選定に就いては、一言でいへばインキとなじみのよい紙を選ぶことが大切である。筆記用紙は此の點に注意して作り出すものであるから、何れも適當して居るといつても、比較的インキの乾きのよいものとわるいものとある。インキの乾きのわるい紙を使ふと、一々吸取紙を使ふ

手數もあり、又往々にして紙面を汚す虞もあるから、此の點に注意せねばならぬ。それから等しく筆記用紙の中にも、甚だしくインキの浸潤する性質のものもある。そんな紙に字を書いても、鮮明を缺いて甚だ不愉快なものである。又厚さは餘り薄手のものはよくない。相當の厚さがなければならぬ。それから紙面が餘り平滑に過ぎるものは、得てインキのにじみがわるくてよくないが、それかといつて紙質が粗糙で、ペン先が始終引掛る樣なものは、速度がおそくて是もよくないのである。よく實物に當つて吟味し、最も適當のものを選定しなければならぬ。

第七章　硬筆書方の實用化

普通教育に於ける書方教授の目的は、實用的書寫の能力を高めるにあることは、屢述した所で今更繰返して說明するまでもないことである。然かるに吾人前上硬筆書方に關し、巨細を盡して說述した所のものは、鉛筆書方にしても、ペン書方にしても、皆之れ手本に依據し、練習形式に依り縱がつて練習させる所以の方法を說明したに過ぎないのである。さて兒童が教師の說明示範の下に、骨書を渡り、手本を見て自書したものに對して教師の批正を與へ、又兒童自からも批正しつゝ、漸くにして達し得た最後の成績は、是れ果して眞の兒童實力の成績であるかといふと、決してさうではない。毛筆大字の書方などで之れを見ると、手本を模書した成績が相當に立派であるのに、手本なしに何か他のものを自書したものを見ると、事實其の間に著るしい差があるのである。それを從來單に手本を模書して得たる成績を以つて、直ちに書方全部の成績であるかの如く思惟して居たのは、大なる誤である。

今硬筆書方に就いて考へて見るのに、硬筆書方は字が小さいだけ、毛筆大字の樣に模倣にのみ凝つて居るわけにはいかぬ、手本や骨書に依據して書く中にも、兒童の力が自然に働くべき領域の比較的多いことは事實であるけれども、さりながら練習帖の面に表はれた成績は、何といつても之れ大體は模倣の成績である。又特別の紙に淸書をさした成績にしても矢張さうである。兒童實力の眞の成績は、手本の文字ではなく、全然別な文字文章を、全然兒童の獨力を以て、しかも一切を計畫的に書いたものでなければならぬ。そしてそれが實用的の價値を有つたものでなければならぬ。そこで今後の書方教授は、此の實用的の目的を達するが爲めに、手本や練習形式によつて學んだ書寫の力を應用して、獨立的に相當な書寫をなし得る樣に、一段の工夫を加へることが極めて必要のことである。このことは、毛筆書方にあつても固よりさうであるが、毛筆よりも一層實用的であるべき硬筆書方にあつては、尙ほ更これが必要なのである。そこで此の方面の計畫は、硬筆書方の建設

と共に大に考慮を要する重大なる事項である。然からば此の方面に於ける實際の仕事は凡そどんな事柄であるかといふと、それは大體は二つに分かれるのである。一は應用書寫の力を練磨することで、一は速書の能力を高めることである。左に節を分けて說述しよう。

第一節　應用書寫力の練磨

應用書寫力を練磨することは、毛筆の方でも矢張り大切な仕事である。毛筆の方ではどんな風にやらせるかといふと、大字を書かした場合には、其の手本文字と同大同形の類似文字を應用的に自書させたり、又字の大さを變化さして、大字を中字に、中字を細字に書かしたり、又書體を變化さして、楷書を行書に、行書を楷書に直さしたりさせるのであるが、硬筆の方では、類似の文字を書かせることは固より出來ないことではないけれども、吾人の案に從へば、硬筆書方の材料としては、讀本で新たに授けた文字は一つ殘らず、何れの時期かに必らず其の書方を練習させるのであるから、特に應用の材料として之れを持出す必要を認めないのであるし、又一方からいふと、硬筆書方は多數の文字を練習させるので、なか〳〵時間の餘裕を見出しかねるから、一々さういふ風の應用をさして居る暇がないのである。

次に大さを變化させることも亦、毛筆の方では屈竟の應用であるが、硬筆の方では大體大さが一定して居るので、變化をつける程の餘地はないのである。書體を變化させることは、之れは相當の應用作業とは考へるけれども、之れも貴重な時間を割いてまで、是非ともやらなければならぬといふ程のこととも思はれぬ。

所で、硬筆殊に尋五以上のペン書にありては、前述の樣な應用取扱よりは、もつと〳〵直接的な、そして實用的な重要なる仕事があるのである。それは(一)ペン書の基本練習や練習形式によつて修練さして、其の時期其の程度相應に會得さしたペン書の輕快なる運筆呼吸を、他の書寫物に應用させること、(二)纏まつた一枚の書寫物として體裁を整へさせる爲めに、硬筆の書法として授けた諸般の心得を應用させることである。此の二項は兒童の實際を觀察して見ると、如何にも幼稚なものであることは、事實の上に明かに看取することが出來るのである。此の種の力を伸ばさせる爲めに、適當なる應用作業を課することは、硬筆書方の應用としては寧しろ屈竟のものである。

實際どんな材料を與へ、どんな風に働かせるかといふと、材料は讀本なり、修身書なり、其の他地理、歷史等の教科書中、よく纏まりのついて居る適當の長さの一文を選び與へ、それを如何なる體裁に書寫すべきかの一切の工夫を兒童に委かして、十分に工夫をさせるのである。即ち兒童は(イ)

之れを縦書にすべきか横書にすべきか、(ロ)字體は楷書にすべきか行書にすべきか、(ハ)字の大さはどれ位に書くべきか、(ニ)行數は凡そ幾行位にをさまるであらうかの概算を立てること、(ホ)上下左右はどれ程明けるか、行間はどれ位あけるのが體裁がよいか等、積々頭腦を働かさねばならぬのである。兒童に此の計畫がよく立つた所で、それに必要な紙を用意さして、さて愈々書かすのであるが、紙も最初の時期は縦なり横なりの線を劃した紙を使はすがよいが、漸く進みては成るべく白紙を使はして書かすがよい。殊に之れを葉書形の白紙やレターペーパーなどに書くことの練習は必要である。

尚ほ材料としては、教科書の文章の外、兒童の作つた手紙の文であるとか、學校から家庭へ發する通知報告の文であるとかいふのも適當のものである。其の他教師は特に適當な材料を作つて之れを與へて、それに相應はしい書寫上の形式を工夫させることもあつてよろしい。

此の種の仕事は相當大きな仕事で、一枚の書寫に少くとも一時間は入るから、さう瀕繁に課することは出來ない。先づ尋常五年にあつては、一學期に二回位のものであらうし、尋六になつては一學期三回位之れを課したいのである。高等科になつてはもつと數多く課してよからう。又若し學校の授業時間中に課し切れなかつたときは、家庭作業として取扱ふことにしてもよい。兎も角も書方では大に努むべき仕事である。それから其の成績物に對しては、一々出來るだけ親切な指導を與へねばならぬ。單に評語を與へて返附するが如き取扱では、兒童の力が伸びない。又甚だしく低劣なものは、教師の批正に基づいて改書させるがよい。

第二節　速書練習

曩に書方教授新課程案の章下に示した如く、將來の書方教授の系統には、正美書の系統と相並立して速書の系統がなければならぬ。之れ書方なる技能の本質から見ても、又教授上の目的から考へても、無論當然のことである。殊に今日の書方教授なるものは、何處までも實用主義を取るべき以上、速書の能力を高めることは寧しろ究極の目的であるといつても宜しいのである。從來とても速書の能力を與ふべきことは、議論としては相當に主張されては居たけれども、實際どれだけの方法が盡されて居たかといふと、前にも述べた如く、書方の領域では殆んど何等計畫されたことなく、僅かに讀方の書取に於いて幾分注意されて居たに過ぎなかつたのである。

一體此の速書練習に對しては、餘り之れに贊意を表しない人がある。曰く書方で速書をやらすと、自然字を粗末に書く弊風を馴致するからよくないと。成る程正しく美しく書くことゝ、速かに

書くことゝは殆んど兩立し難いことである。さりながら實用上からは、字を速く書くことは非常に大切なことゝして、强い要求を受けて居る。此のことは教授上何とか工夫を立てねばならぬ。假令讀方の書取で速書のことが相當に注意されて居るとしても、尙ほ書方の方でも適當に計畫せねばならぬことゝ考へる。何となれば、若し嚴密に言はゞ、讀方の書取の速書と書方の速書とは其の目的を異にして居るのである。即ち讀方の方のは、新字の書き方を間違なく思ひ出し得る樣に、そしてそれを成るべく速く書き得る樣にといふのであつて、主なる任務は記憶を練ることにあるのであるが、書方の方のは、既に練習した文字を正しく美しく書く上に、更に速かに書き得る樣にといふ其の速度を高めることが目的なのである。無論時間の制限なくゆつくりと書いた字の正しさ美しさと、それから時間の制限を受けて書いた字の正しさ美しさとの間には、隨分差等の生ずるのは當然である。さりながら實用として差支なき程度の正しさ美しさに於いて、成るべく速かに書き得る樣に練習することは、極めて必要なことで、ここが時勢の最も强く要求して居る所であり、硬筆就中ペンが非常の勢を以て普及して來たといふのも、要之這般の消息を十分に物語つて居るものである。書方に於ける速書の練習は、此の考を以つて課しなければならぬので、將來の書方教授は此の點に對し、大に面目を發揮する所がなければならぬのである。次に速書練習に關し必要なる諸項を說述しよう。

第一　速書練習の機會

硬筆の速書練習をさせる機會としては、どんなことがあるかを數へて見ると、次の數種がある。

(一)書方として練習さした細字を、直ちに速書練習の材料として取扱ふこと。是れ最も自然的の好機會である。例へばペン書方の練習として或一單元を練習形式によつて正しく練習させ、第一次の假淸書をすました後に、其の文字文章をすぐと速書させるのである。而して其の材料は假名交り文を以つて之れに充てる方がよろしい。何ぜかといふと、單なる語句は速書の際想ひ出しがわるくて、速く書けないが、續いた文章であると、すら〳〵と想ひ出すことが出來て筆を運ぶのに便利であるからである。

(二)讀方で書取の練習として扱つた一片の文章を、更に速書練習の材料として扱ふのも都合がよろしい。之れ書取としては前にも述べた如く、主に記憶を目的としてやるのであるが、其のよく覺えた材料を今度は書方の速書練習として、字形字行に注意して書かせるのである。實際の取扱は書取に續けて、讀方の時間で扱ふがよい。何も殊更書方の時間へ持つて來るには及ばない。

(三)綴方に於ける記述も速書練習の機會として考ふべきものである。理窟から言つたら、綴方の記

述は速書の力を養ふべき仕事ではない。寧しろ書方で養はれた速書の力を、これへ應用さすべきものであるとも考へられるが、然かし兎も角も速く書くことは綴方自身の爲めにも極めて必要なことで、事實兒童も速く書くことを努めねばならぬことであるから、之れを速書の機會として捉へることは、少しも差支ないのである。殊に綴方の記述に際し、先づ草稿を書かせ、それを淸書して出さすといふ時などには、其の淸書することは全然書方の仕事となり、速書練習の好機會となるのである。

(四)各教科の筆記をさせる場合とか、成績調査の筆答をする場合とかも、亦速書練習の機會である。相當に字形字行の整つた文字を、相當な速さで書き得る樣注意して指導せねばならぬ。從つて筆記帳は時々其の書振をも檢閲し、答案は之れを返附する際、書振に對しても相當の批正を與へねばならぬ。

(五)學校生活に於ける實用的の書寫物、例へば學級日記とか、兒童各自の日記とか、其の他學校から家庭へ發する各種の通知とか、兒童の發送する手紙とかいふものを書く場合も、亦速書練習の一つの機會として考へ、成るべく之れを兒童に書かす樣にし、其の速さや書振に向つて適切な批正指導を與へるがよい。

第二　練習の方法

(一)速書練習の第一歩として取るべき方法は、骨書の上を渡書させることである。其の材料は書方の手本なり、讀本なり、其の他の教科書中から適當だと思ふ一文を採り、鐵筆版にても印刷して與へ、其の上を速かに渡書させるのである。由來自由に速書させる場合の弊害として、甚だしく字形が崩れ亂雜に流れ易いのであるが、此の方法によると餘程まで其の弊を救ひ得るのである。

然かし此の方法による場合には、初から餘り急がしてはよくない。最初は比較的ゆつくりと書かすがよい。即ち成るべく綺麗に、然かし成るべく速く書く樣にと奬勵する位に仕向け、段々進んで來てからは、之れだけのものを何分間に書き終れといふ風に、時間の制限を設けて速書に導き、最後には銘々の書寫時間を記錄させて、其の優劣を比較し、幾分競爭させる位にする。時間の記錄をさせるのに、銘々に時計を持たすといふわけにも行かぬから、例へば大抵之れは五分位に書ける材料だと思つたら、着手の合圖から三分間位までは、默つて書かして置くが、それが過ぎたあたりから、教師は十秒おき位に刻んで時間を宣告するのである。即ち「三分十秒…三分二十秒……三分三十秒……」と。そして兒童銘々は、自分が書き終つた時に宣告された時間を以つて、自分の書寫時間として、氏名の上に之れを記入することに約束してやらすのである。

此の方法は余輩屢々之れを試みたのであるが、時間の測定は幾分精密を缺く嫌はあるけれども、大體の速度は之れを卜することが出來る。而して此の方法によつた場合、其の成績を判定するには、一方には時間に對する點數を附し、他方には其の渡書の精粗に對する點數を附し、其の平均を以つて成績とするのである。

(二)視寫による速書練習を課することは、次に取るべき方法である。之れも材料は前者と同樣に、手本なり讀本なり其の他の教科書本文なり、又は特別の印刷物なりを與へ、合圖によつて同時に筆を起させ、時間の宣告も前同樣に取扱ふのである。成績の判定法亦全く同樣である。

(三)聽寫による速書練習を課することは、視寫の後に取るべき方法である。讀方に於ける書取と全く同樣なのである。然かし材料の取方は、讀本に限らず、矢張手本なり、他の教科書なり、特別の文章なりを取るがよい。而して此の方法は其の時間の遲速は教師の方で自由に加減することの出來る方法であるから、筆の遲い兒童を催進するには最も適當した方法なのである。成績の判定は、時間は同一であるから、之れをぬきにして、單に字形字行の如何によつて行ふのである。

(四)暗寫の速書練習を課すること。之れは速書練習としては最も有力な方法なのであるが、只此の方法による時は、其の材料は或特別なものに限らねばならぬのである。即ち何れの兒童も皆暗誦して居るものでなければならぬ。例へば五十音とか、いろは歌などは無論其の一材料であるが、然かしこんなものばかり書かして居るわけには行かぬ。須らく讀本で授けた文章中、特に暗誦を命じた章節とか、修身で授けた格言、俚諺、其の他特別の文章を取り、又手本で練習さした特別の語句などをも取るのである。時間の宣告や成績の判定などは、總べて渡書や視寫の場合と等しいのである。

第三　練習上の注意

(一)前項に擧げた渡書、視寫、暗寫の順序は、之れ練習上大體の順序として示したものであるが、變通は固より自由である。

(二)速書練習に於ける書體は、正しく楷書に書かせようといふことは無理である。勢ひ行書體のものとなるのである。尋五で行書を學んでからは、速書は寧しろ最初から行書で書くものと定めてやらすがよい。

(三)假名は平假名か片假名を單用させるがよい。之れ速度を高める上に必要な注意である。而して、速度だけから言ふと、片假名の速いことは故元良博士の實驗によつて既に證明されて居るけれども、今日實際社會に多く使はれて居るものは平假名であるから、平假名を單用する方が實際的であると考へる。

(四)速書練習には略字を用ひさせるがよい。漢字には正字と略字とあつて、點畫に非常な差異がある。從つて書寫の速さに非常な徑庭を生ずるのである。讀本では主なる略字は之れを授ける方針が取られてあり、吾人の編纂した硬筆練習帖にも略字は悉く之れを練習させる樣に仕組んである。略字の使用は寧しろ之れを奬勵するがよろしい。

(五)渡書並に視寫による速書練習の場合にも、一字一字になづまず、一句とか一節とかを胸に收めておいて書く樣に奬勵せねばならぬ。兒童の書取の遲いのは、皆一字一字を相手にして居たり、甚だしいのは一字中の一點一畫毎に視て寫して居るものさへあるからである。それでは速さが生れて來よう筈がない。

(六)各兒の速度の記錄を作ること。之れは兒童に速書を奬勵する上に極めて有効なことである。誰でも自分の進歩を明瞭に自覺した時には、言ふに言はれぬ愉快を感ずるものである。今速書の技倆も、どれ位進歩したかを兒童に自覺させる爲めにこの記錄を作るのである。自分の擔當して居る兒童には、何時も之れを實行して居るのであるが、滿六ヶ年間の發達を通覽して見ると、敎師として非常に愉快を感ずるのである。速書の練習は尋常四學年からやらすがよいとはしてあるけれども、吾人の此の記錄作成は、尋常一年から既に出發して居るのである。どんな方法によつてやるか、吾人の實行して居るものを其の儘に述べて見ると、尋常一年の學年末たる三月中旬を以つて、出發の時期と定めて居るのである。其の時に「アイウエオ」の五字を全兒童に速書させるのである。此の種の材料を採つたのは、之れを思ひ出す爲めには、少しも時間を要せぬもので都合がよいからである。それで、尋六に至るまで、何時も之れを速書させるのである。ちやんと用意を整へさしておいて、合圖を與へて一生懸命に正味三分間だけ反覆してアイウエオを書かすのである三分たつと再び合圖を與へて筆をおかせ、其の字數をお互に交換調査をさして記錄しておき、さて尋常二年の同月同日同時刻に、又全く同種の方法で速書させ、其の數を調べ、段々に前學年の分と比較してきかせる。さうすると中には非常に進んだものもあり、一向に進まぬものもあつて、銘々が自分の進否を明瞭に自覺するのである。爾後三年から六年になるまで、材料も方法も全く同樣にして之れを行ひ、最後に尋一から尋六までを通じて比較させ、且つ之れを銘々に圖表にも作らして眺めさせるのである。

自分は大正十年の春で第三回の卒業生を出したが、第一回の兒童に就いては、未だ之れを試みる氣着がなかつた爲めに、つい記錄しなかつたけれども、第二回目第三回目の兒童には四十人分そつくり、一年から六年迄記錄を取つたのである。今其の十二ヶ年間の統計を纏めて見ると、實に次の

通りである。

學年＼種別	大正四年卒業生 人數	大正四年卒業生 平均	大正十年卒業生 人數	大正十年卒業生 平均	兩者平均の差	三分間の平均	一分間の平均	各學年の發達
尋一	39人	一〇二字	37人	九四字	八字減	九八字	三三字	
尋二	38人	一三二字	38人	一四九字	一七字增	一四一字	四七字	一四字
尋三	40人	一五三字	42人	一七〇字	一七字增	一六二字	五四字	七字
尋四	38人	二〇七字	39人	二〇八字	一字增	二〇八字	六九字	一五字
尋五	39人	二三三字	37人	二五三字	二〇字增	二四三字	八一字	一二字
尋六	37人	二五五字	35人	二六七字	一二字增	二六一字	八七字	六字

此の表によると、大正四年に卒業さした兒童と、大正十年に卒業さした兒童との間に、平均の差が概して隨分著るしいのを見る。之れ兒童の種が異なることがあるとはいへ、自分の取つた此の速書練習の方法が、前者には甚だ不徹底であつて、多少それに注意した位に過ぎなかつたが、後者には

は相當に骨を折つたので、それが最も主なる原因をなして居るものと、自分は解釋して居る。又一分間の平均をグラフに作つて眺めて見ると、兒童書寫の速さが、大體一年から六年までどんな風に發達するものかといふことも窺ひ知ることが出來、又同時に之れを材料として、速書の標準を作つて練習上の目標とすることも出來るので、大に教授上の參考ともなり、又速書は奬勵と指導の方法とによつては、相應に進歩するものであることも判かつて、少なからず興味をも感ずるのである。

尙ほ記錄作成の方法は、此の一法に限るといふ譯ではない。等しく此の種の方法を取るにしても、材料を他のものに變へることも出來る。例へば「いろは」を取るとか、又は單なる線をひかせるのである。又此の方法とは全く別な方法を取ることも出來るのである。即ち若干分量の書くべき材料を一定しておいて、それを書くに要した各兒の時間を記錄するのである。種々工夫して最も有効なる方法を立てゝ、兒童速書の能力を高めると共に、教授効果の省察に資するがよい。（完）

修訂硬筆書法及教授之實際 終

原宏平翁の教育に關する歌二首

日も足らず夜もまた足らずいそげ〳〵
學びの道はすゑぞはるけき

實にならひことをすゝめよ花にのみ
うつりゆく世の人のこゝろの

原宏平翁は余の郷國新潟縣新發田の人で、嘗に一日五百首の歌をよみ、後又一日千首の歌をよまれた歌道の大家である。昨年八十七歲の高齡を以つて物故されたが、一代の間によまれた製歌が實に八萬の多きに達して居るといふ。

大正十一年九月廿五日印刷
大正十一年九月三十日發行
大正十四年十月廿日訂正四版印刷
大正十四年十月廿五日訂正四版發行

修訂硬筆書法及教授之實際
定價金參圓五十錢

著作者　東京市小石川區宮下町十九番地　水戸部寅松
發行者　東京市京橋區南傳馬町二丁目五番地　目黑甚七
印刷者　東京市京橋區弓町二十五番地　高橋郁
製本所　東京市麹町區有樂町一丁目四番地　合名會社齋藤製本所
印刷所　三協印刷株式會社

著作權所有

發行所　目黑書店
(東京)東京市京橋區南傳馬町二丁目　電話銀座五六八四番　振替口座二八〇九番
(長岡)新潟縣長岡市表四ノ町(本店)　電話長岡一八番　振替口座三六一九番
(新潟)新潟市古町七番町(支店)　電話新潟九〇二番　振替口座四〇九〇番

263
1781

終